



繡
國姓爺忠義傳

後編

~13
4270
4



213
4270
4

國姓又耶忠義傳後編序

趙廷

明季之國姓耶耶成功者飛虹將軍
郝芝龍之男而皇國肥州平戶之
產也幼名森字大木後隆武帝耶
賜姓朱自是中外稱國姓又耶吳三
為表明倡義起兵思奏捷功矣不
幸而身陷虜庭高之獲送惜哉
男成功為人羊偉雄壯明遠英年深

本義夫
61

91-2144

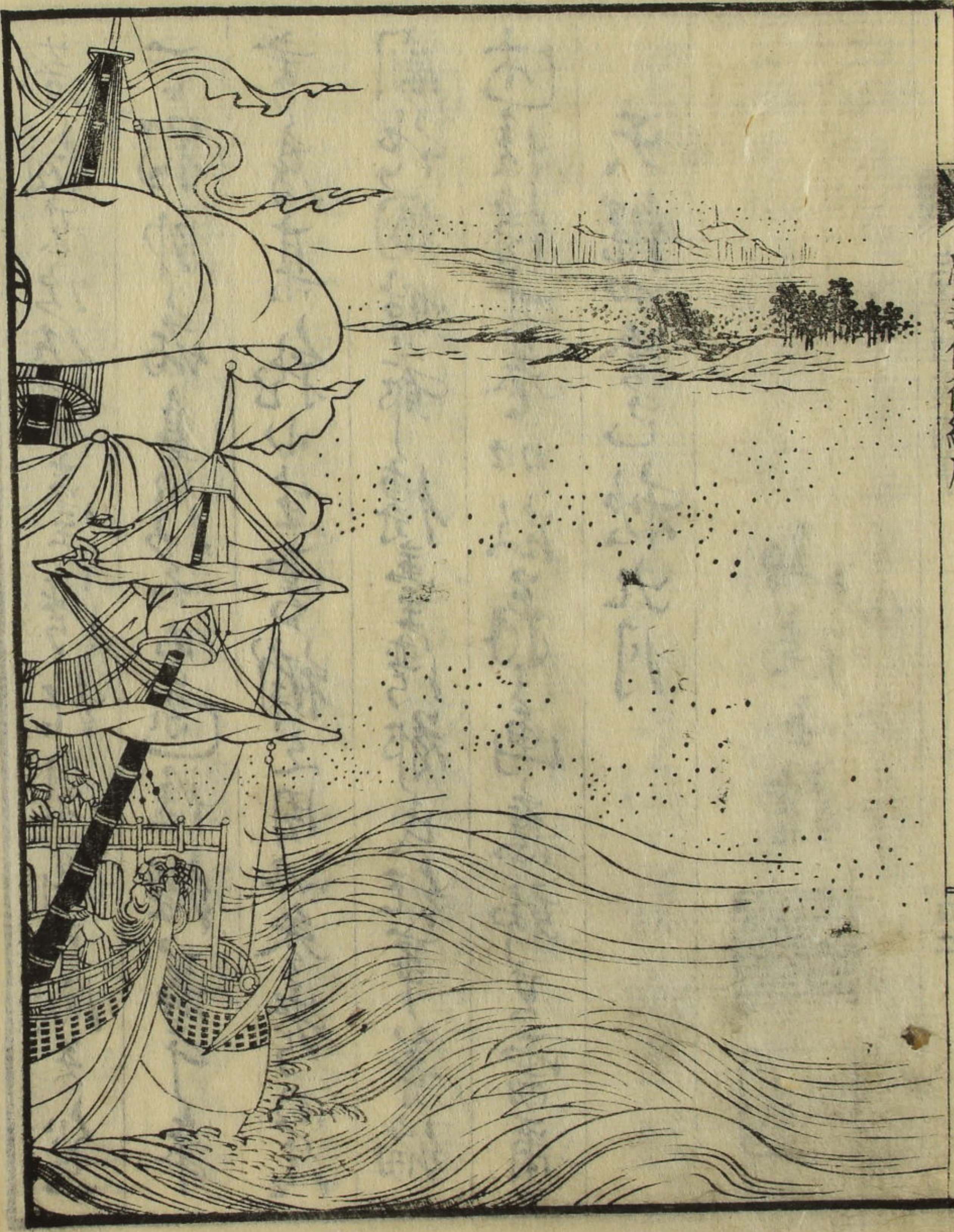
恨父之飛運而不獲抱，席了物也悌
然其情欲大繼其志之業，負棟
梁之用，以為國雪恥，為家復讎，焉躬
率甲兵，攻城畧地，狼噬鯨吞，鸚張
席，卷強使清人為戰，標雖然成功
案情，夫命，喘清之機，身返臺灣，時
入山終不知佳，豈亦不惜哉，故玉山翁
著曾國姓，鄭一忠義，畫傳于世，行欲

著猶其次，編及臺灣誌，圖畫已成矣，然
一躬即病身，沒而不遂，後經若干年
書房，其就山生，雪補之因，以參考，以居
闕他國，姓鄭一傳，臺灣鄭氏紀事等編
述後傳十卷，加故，翁一函，應鄭其需，爾
天保四年，己秋九月

山桂士信



臺灣島の
紅夷船
國姓爺
献貢税図



虎井作花繪序

コノ書海軍史と稱す

三



義後
江國論

忠義傳卷之十一

四〇



明帝
皇裔
朱一貴

明李忠
文玄孫
李勇

明朝遺臣
杜君英

忠義傳卷之十一

四一

繪本國姓爺忠義傳後編總目錄

卷之壹

國姓爺拔安海城

名妓瓊燕國姓爺不渴

瓊燕惠門禪師廬

韓固山中謀計戰死思明

重疊謀略鑿韓固山兵

設計策國姓爺破福建兵

國姓爺韓固山斬

卷之二

國姓爺深智靖和兵

國姓爺初刀を製

永曆帝奔南寧

國姓爺和兵を募

瞿式耜良勳を辱

永曆帝漂泊

式耜同敵と酒燕

戴捷遺計傷北兵

同敵を首級清人を懼

羅溪の津吏聖駕を迎

卷之三

函輝使大宛嶋

征南王地を刺く清泉を得図

國姓爺定大寬嶋

國姓爺虜紅婦圖

崑崙奴船を覆さんとし図

酈芝豹及而降韃將

函輝全の妻子及我が妻子我漁翁小純る図

函輝勇戦水死

函輝大北軍を悩む水死し図

國姓爺孛殺猛虎

卷之四

國姓爺謀討李成恭

國姓爺奇兵李成恭を惑し圖

國姓爺發兵攻宗明

國姓爺鎮江城を攻取圖

國姓爺火計陷宗明 同圖

國姓爺横擧賦詩

國姓爺拒練向南京

國姓爺禦戎横し詩を賦し圖

國姓爺神力破城門

卷之五

國姓爺夜走鎮江

南北大戦金陵

萬孔力戰陣死の図

國姓爺再復思明 同図

清王贈鄭芝龍講和

國姓爺天柱嶺得仙書

德を慕ふ思明の民大宛に移る図

國姓爺尸解 在清王治世

卷之六

李勇汎塘斬姪歎

大宛嶋地妖を現す図

李勇草身小く姪歎を斬る図

神通道人出大宛 同図

朱一貴柱嶺見李勇 同図

杜君英怒捉噲元

朱一貴崗山結義

杜君英殺噲元士卒図

朱一貴定針策取各塘

卷之七

李勇直取南路營

李勇馬定國を討る図

周應龍敵勢を見て逃走る図

一貴智取塗壘堙

大宛人民朱一貴小仗する図

許雲大戰安平鎮

許雲遺計燒兵糧 同圖

卷之八

陳策計保淡水官

杜君英攻淡水官圖

吳外萬死在道水溪を渉る圖

覺羅滿奏計略臺征

諸國官軍出厦門

朱一貴雲氣をえる圖

施世驃集兵澎湖

吳龍詐募赴澎湖

世驃吳龍を虜ふる圖

大東卷之九

錦囊計破鹿耳門

世驃定計復安平鎮

李勇突戦の圖

朱一貴柳原伏地雷

朱一貴遠討救危急圖

藍廷珍破一崑身

火坑乃計清兵を焼圖

杜君英驍勇の圖

世驃叠陣破明兵 同圖

卷之十

世驃逐敵浮海

神通道人明兵を救図

廷珍大戦之換曆申

儒生世驃不見之難易を説図

世驃討折明水軍 同図

朱一貴謀計劫敵營

廷珍入臺府安民

朱一貴一討を遺し山林に隠る図

大寛地震疫癘流行

總目錄畢

繪本國姓爺忠義傳後編卷之壹

目錄

國姓爺拔安海城

名妓瓊燕國姓爺小得とる図

瓊燕惠門禪師廬を訪図

韓固山中謀計戦死思明

重疊乃謀韓固山が兵を廢金おとる図

設計策國姓爺破福建兵

國姓爺韓固山を斬図

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 韓固山, 日鏡, and 國姓爺.



繪本國姓爺忠義傳後篇卷之二

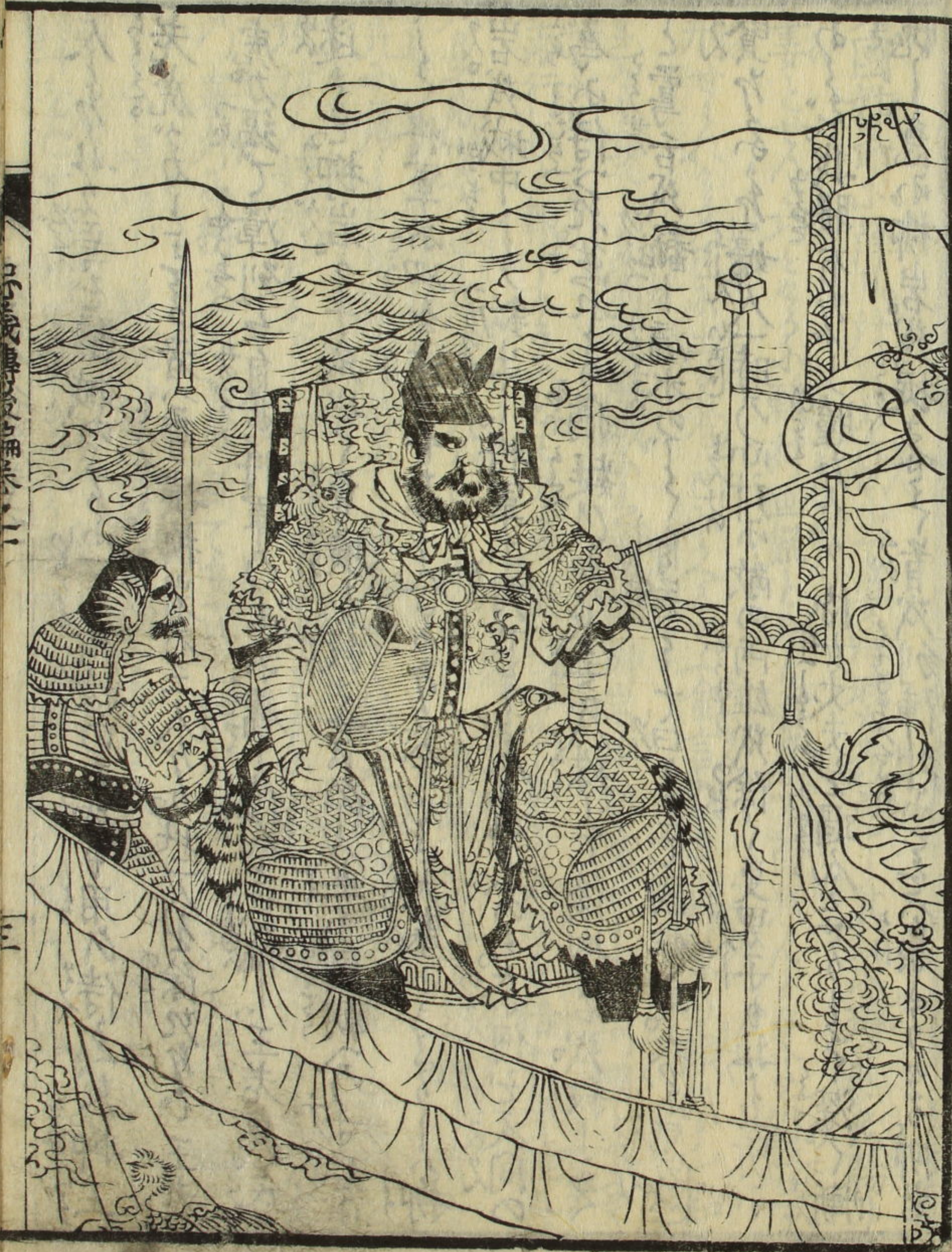
浪花 山珪字士信譯

國姓爺拔安海城

老海曰國家昏乱有忠臣と宜らるるふ言也茲小明末萬曆の皇
帝治小居く乱を忘まひ逸楽小耽り國政を荒ゆひより天下
擾乱して鞆韃王其弊小乘り李自成自立し忽ち萬民塗炭
小陥る世とかり遂小圍賊帝城攻襲く崇禎爺狂死とるも其
後大清鼎を燕京小定てより中國鞆韃の有りかり世人も頭
を剃北狄の服を著るる小独鄙之籠か子國姓爺鄭成功の
忠義の節然改むと思明列小兵を集(鞆韃を亡く)再慶明の世
小覆さんと謀略を廻り威武を逞まると度々清の強敵と敗

勢小乗じて十五萬騎の軍兵を率し漳列安海城を攻る。吏頻あり
 然るに安海城中に瓊燕といふ名妓女あり。明の國恩を感ずるに
 漢王元が女貂蟬が董卓然と亡せし謀をわたりひ色を力めり。王老虎が
 心成蕩し柳力士をして曾神兵を殺させ。猶も柳力士が自ら滅せし
 んもの雄々しく針策を定め刺客を名として安海城を出國姓爺
 う陣へ赴たたり。是柳力士が鉤出し國姓爺が手成借て斬せん。の
 方便かり斯て金瓊燕が國姓爺が陣前小到り監平が名成通して
 酈成公小對面せん。吏を望む素り隠かれ名妓かたむ塞中へ將平
 怒り者多く子細をふれと陣中へ入り國姓爺ふ斯と達し多ふ
 酈成公ゆり嘲笑ひ察するに王老虎饜道が断ち電城叶ひかた
 がり美婦を餌として罫を解せん。科かた入り對面とも何の益も

あし人速し追返す。今とる所ぬ忽ち一卒走りきり。即今城中より
 一彪乃軍馬馳出甲冑成脱て降を乞名刺を通じ。是即ち安海城の
 先鋒柳力士ゆり報じ。國姓爺呵々と笑ひ。されどこと王老虎先
 美婦瓊燕を吾が陣へきこし。又柳岩を降せり。又間を行ハ
 せん巧みかり。先柳岩成陣中へ止り。あはれ妓婦瓊燕を誘き。れ
 吾其女を一刀小斬り捨其後柳岩を誅せし。命と士卒
 令成受て。頓て瓊燕を伴ひ。主將面前へ出國姓爺兩眼を怒ら
 して瓊燕を眈と睨。你娼妓の身として膽斗も吾が寨小きる
 八王老虎が謀を受降將柳岩と及間を行けん。ととるふあを。とと
 喝も瓊燕。女も怕ど色成正して曰く。妾薄命ふして又母乃
 為小身を鬻南に賤妓とハれ。是も明朝の曆小生。明朝の粟小



名妓瓊燕

名妓瓊燕
謁國姓爺
令殊柳力
士



人しかりし馬ぞ鞭賊のつらふ一毛は抜の力なり用ひ侍りたる柳王
 老虎が力とまざる者へ曾横柳岩の二人あり。此二人を除けり。王者
 虎が縄で漳列と自然將軍の千の属侍人と思惟し。王者虎と昏
 迷させ柳岩の手を以て曾横を殺させし。ひのひ妻が國朝へひ守忠の
 しく將軍の功を遂させし。今さら大塞ふきり。柳
 岩は城中より釣出し。將軍討せし。今さら何ぞ天間の
 為の侍づれば然れども猶疑ひむ。妻は珠して後柳岩を殺し。と
 と鴛舌は翻し流水のぐく自若して曰く。國姓爺。大の感謝
 賢かふ。婦人一時の心計の敵の両雄を除く。更男子のやぶ所は
 あら。我眼有な。腫か。家女丈夫を過んとせり。深く慚
 愧し。急し柳岩。捉ま。首は列陣外ふ。今さら公集し。り。柳岩

八國姓爺。小降り。計畧を献。て安海城を攻。落し。其功は瓊燕に賜り
 妻とせんと巧。と。小較計画餅とかり。瓊燕は面然。ん。更は。能。が
 刑せ。れ。多。る。已。ふ。出。る。者。已。ふ。る。と。金言の。と。奸悪の報ひ。を。知
 る。是。より。前。安海城。を。先鋒。柳岩。手勢。成。平。して。何國。とも。あ
 落行。ね。と。報。ら。る。と。王老虎。疑。ひ。し。て。更。其。故。を。悟。も。赤龍。與
 八。是。成。中。牙。咬。を。と。柳岩。匹。夫。瓊燕。と。て。密。通。し。女。を
 先。小。落。し。已。由。跡。を。慕。て。拔。落。せ。し。必。定。部。族。小。降。参。し。當。城。を
 攻。拔。人。奸。計。を。多。し。と。い。更。い。ふ。終。さ。る。小。士。卒。や。と。走。り。き。り。敵
 の。塞。外。小。柳。カ。士。の。首。を。斬。て。集。い。と。報。む。と。王老虎。慨。然
 と。と。嗟。嘆。し。瓊燕。実。小。傾。國。の。女。子。なり。一。針。の。裡。小。吾。が。兩。先
 鋒。を。亡。せ。り。我。愚。小。渠。容。色。小。蕩。され。と。更。茲。小。女。と。更。今

吏悔まじも及らむ。此上六城を堅固に守りて援兵のきくは待たず
 賊を屠尽して此恨を報せん。使も赤龍奥を右先鋒と賈勳
 段を左先鋒と定め内城を堅く守りてされども兵糧の道は
 まるごとく城兵に餓死の歩卒は日夜小落失漸々小無勢となりぬ
 王老虎大少心神死苦は是れ制せんともいふも糧已小尽れ絶
 ちて死方便なり。三日が程は馬死殺し草の根を掘り諸軍と俱小
 是れ食の足を翹り福列海只の報死待たれども一人のきく者ほ
 赤龍奥賈勳段一存ヤ多の吏已小死二軍死地小就ぬ然も城兵
 二萬と八等まじも病卒弱兵半小して弓矢射る小腕痿砲を放小
 気力なり。物乃用ふ小命死者も飢渴小困は日來の勇氣折けりん
 斯て空く城中小餓死せんより小渾く敵塞小押寄あり程戦ひく

屍於海岸小曝さんこそ本意なまぐりと練多小と王老虎大少歡喜
 一。実両先鋒乃言渾く然も小月見一死二戦を遂燼燻く戦死
 せしむとて六月十五日の明方小城小火を放ち諸軍死を二塗ありて
 海岸から敵塞小を押寄多國姓爺此体死多緒將小殺敵
 飢渴小堪むとて死族となり寄るをれを一旦小銳気尖るもされど
 由再度進む死気力なる命。只寛く小敵死練。其兵勢の高廟
 死待く微塵小確よと指揮しをまむ。其意死得て林勝戴健の
 兩將一萬騎小右より支へ夢仲林順乃二人を二萬騎ゆく左に備
 小城兵を今日死限りとかり定むれは何く女も猶豫死餘波一
 声發し比く鳥炮放ち箭放射け奪地暗く殺進む其勢ひ
 決死して當るも國姓爺が部下乃勇卒物の屑ともせず

是と向ひ合せ追つ及しつ戦ひく小時寇を揚しつ城兵心むりハ
 勇れり也。人之三日の糧を断馬を五日を飼がれむ亦も進む泥
 障りも弛得むと移せしめて乱まき國姓爺敵の勞まきも成んは後
 須波菟まきと後陣の勢を操出し短兵急小雄まきと王老
 虎が萬五千騎残り少小射をきれ屍疊まきとて數堆の岡か
 鮮血混まきと白砂悉く紅井小斐の王將王老虎ハ此体を見
 て瞋る眼迷小裂。今ハ是追ぞり死まき道なむ國姓爺を射
 て死中と叫び射残れまき兵を一隊とす赤龍真貫勒段を左右
 小從雲霞の如た敵中へ弛入縦横小斬まき悪戦と其鋒小觸
 て命成落しと者數まきとて小斬兵十五萬の多勢をれむ
 更しむせむと矢を射つけ関を上と操まき程小遂小王老虎を林

勝が一鎗小刺まき死赤龍真貫戴律と戦り流流前小中り馬
 ころ落く歩卒のま小一刀小斬貫勒段を公翁天祐を鎌下小
 て肉泥とかり自余の残卒も悉く討まきと國姓爺軍成班て
 凱歌成唱安海城の燒跡小陣成張兵勢日々小熾れ小漳列の
 本府も其勇烈小恐怖とて鞭將兵成帥逃奔りまき小劍小
 邱むと漳列を恢復し國姓爺喜こと飛かり一時義婦瓊燕
 國姓爺小別成若て曰ま己小三將成謀し將軍の手成借り亡
 更成得と聊國朝の思小酬えま今ハ望ま足ぬ暇むりんと出
 行成國姓爺其才色成惜と種々小曰く田まきも瓊燕ま小承
 引ど袖成拂り出去ま其後福列の黄蘆山も惠門禪師小
 就く髪を剃て尼となりぬ法名小紹香女六霜蘭と号し專ら

瓊燕功成
惠門禪師
為徒弟

只此專心



佛道修行一多し。此金瓯燕詩文も巧なり。之を実奇時
かき婦人なり。

固山中練戦死思明

却統廣列の唐王女時監國一多し。清兵十萬騎雲の奥に如
く押寄城置近く逼り多し。撫觀生顧元鏡ホカを竭して是は防
た多し。清將韓固山練を定め紅巾を載れ廣列の兵の摸様小抄
扮城中一紛生入換觀生は討副將杜永和兵之唐王を以周王を
王遼王ホカ擒り福列を凱陣して褚王戎市を斬是も依り顧元鏡
何吾弱等鈍々と髪を薙り清に降りぬ。又吾別肇慶府の同小永
曆公節防禦の術盡城を洛く小船を乘西峽に溯り玉を信使り之
瞿式恭一人のをもて従ひも其後丁魁楚王化澄追々も馳参り丁

二年の春桂林小難を避むり。四月清兵又瓊列を攻め
し。王埤等聖駕を促し楚の方を洛し。嗚呼痛し。去る丙
戌の二月即位す。戊子の年より三年の間一日も聖慮不安
ん。其時方く緒列を標浪し虜賊の爲小護り多し。緜小瞿式恭
が忠義小りて玉體を保ちぬ。命運の末を悲し。多し。茲小國
姓爺。漳列を恢復し。多し。所小梧列の急使をもち来り。聖体危急
ふ臨し。むより報をもち。ふおられ。郵鴻達。小二萬の遣兵を授け梧列
を救し。れども早聖駕は是の方へ遷り。むひ。後をれ。郵鴻達方
を落し。脚跡を慕ひ。清兵を遮り。聖駕は安くと洛し。多し。此間小
國姓爺。福漳の海島。廿余所を切隨。十五萬の兵を分ち。之を
船に二萬余騎。思明列の居城。小籠り。昼夜軍機。小心を凝す。

多し此時福列の貝勒王猪院部の武官を領し國々の招撫を日
夜に計る。韓固山告く曰國姓爺武威を逞まうて島嶼を奪ふ
更其數をあるを捨置とんが奈何を患はう懸出さるも量りて早
く制せんとむ叶なりとて渠が兵十五萬と八千の多しも実之十萬騎
の過と臣退て考るふ二萬の王永成援ひ二萬の漳列の屯し一萬を
大星の備ふ残る五萬八廿余箇所の島嶼をもち鎮る然るも厦
門の兵二萬の過をうとて臣此處を棄れ國姓爺を擒めり
朝廷の宸襟を安んじもんと更もかけぬぞや多し貝勒王曰將軍
の妙算理の至極なり然れども鄙族を武備を長せり明の弱將と日
は日して論せを還て敗を取を宜く三思を加く後兵をさ
向へしとを韓固山押返し臣曾て安平を責一戦ありて功を

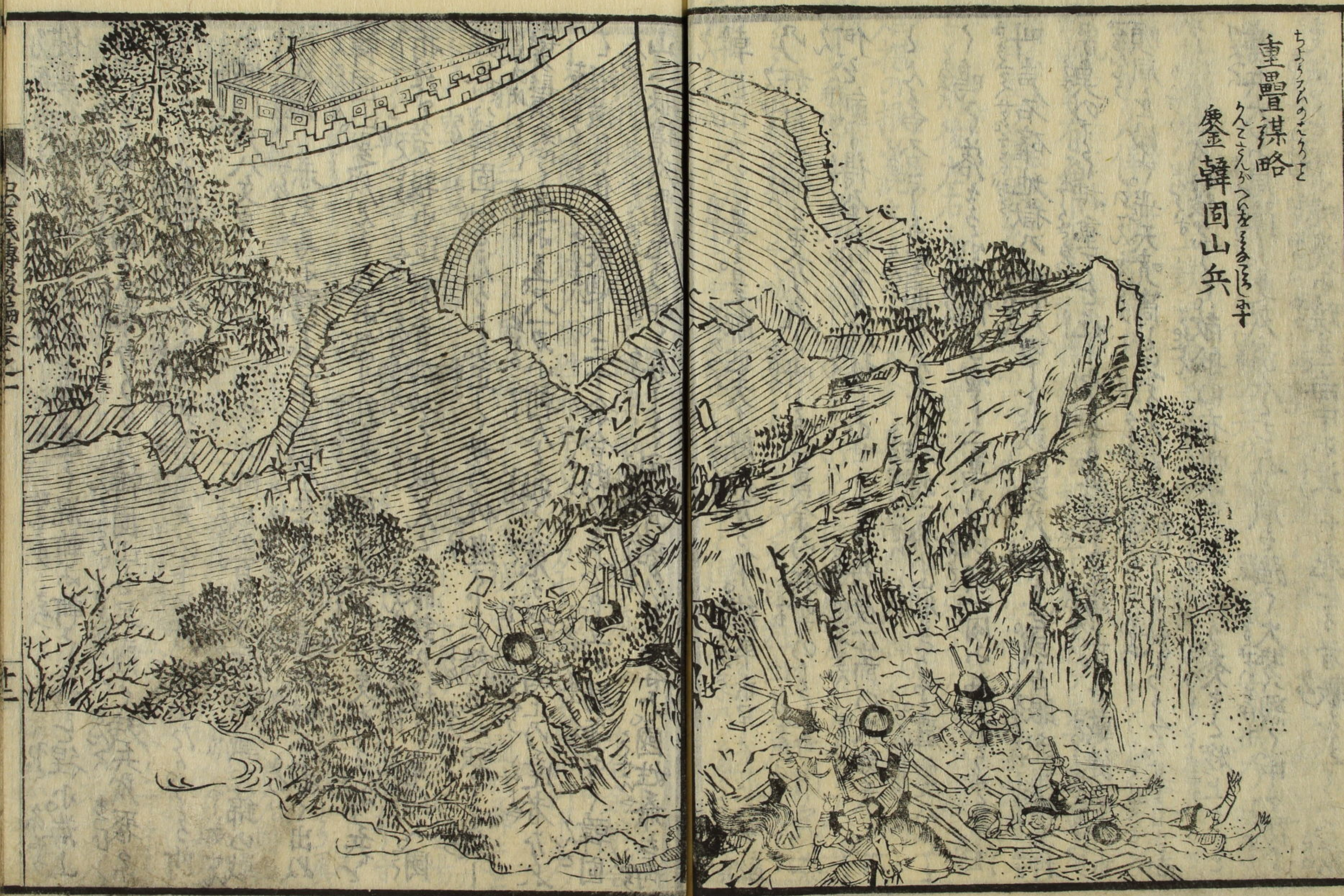
奏す。何の恐るの分れ。只臣に任せんと強て乞王に貝勒王の制
し。然るも敵の三倍の勢六萬騎を授けし。將軍一途の勇疾
と事小臨む。懼を謀て用ひて。勢を敵に侮るごとと戒む。韓
固山大悦び。此日より試場を用た六萬の軍卒を進退を調練
せし。時小思明列の國姓爺登終日軍馬を煉。夜八連夜天文を
望み。觀る。或日例の如く擡小登りて天文を觀し。妖星の芒南海
の分野を犯せり。國姓爺驚おなり。永曆皇帝に正しく唐東路に
巡幸し。此妖星の関を事なり。その何の凶兆と疑ひ。惟
て更に決せむと叔父芝豹側小在り。曰賢姪よく彼妖星はトるや。國
姓爺曰。我いま是れ知吏能く願く。高論を申さん。芝豹曰。天ハ
理なり。元声あり。能言る星を萬物の精上小顯る者なり。然

どり天と元心なり何の吉凶なり彰さん一億萬の星の裡卿が眼
小是成怒く妖星とをこそ是卿が心天の妖星なり不如早く守徳
の備成固せんふく統國姓爺大の收び叔父の言説得て是こ
とく遠小麾下の諸將成集へ軍議し頭小雉堞の裡小空濠と堀
其土成以て二重屏成築た三日が間小準備十分小調ひたり然る外
大星の守將函輝三千騎を帥て馳き入り告ぐ曰福列小韓固山
弑場成構て六七萬の兵成煉近日襲きし候より同者より報じ
將軍をなせりと油断しぬ候とて國姓爺完示して曰我已小其准
備をなせり彼固山ハ我の母の怨敵なり此所小来る成待一戦し
て塵小かり仇成復せよ卿が大星ハ漳列の緊要なり敵と一卿か
出小虚成規ひ不時小攻拔を再復甚く難くるを速小去く大

星成守まよと令と函輝が曰今味方勢成緒島小分て這城小管
る者二萬小過と敵を三倍の勢成れを侮て臣も將軍の二聯
成技く敵成伐いんと望む國姓爺頭成左右小揮勝敗を兵の
多少小よと只將の機密小あり七萬ハ疎廿萬世萬攻寄しと
微塵小せんこと我が方す小あり卿ハ早く大星小より不時の變と
防よとて固く宥されぬ函輝力なく遂小兵成帥てと回せと
去程小韓固山ハ緒軍の熟練せし成か々々進めよとて六萬
騎成數百艘の軍艦小乘り南海を横切をり小漕連度ハ
の東南成固く喚れ叫び石火炮鳥炮成放て靈の船が如し思明列
ゆも兼て期したる事ハ些も強がと戴徒受仲ハ兩將數百
艘乃沙船を渡へまの火器成備楯を以て船を圍ひ力と

く防戦を國姓爺八五千の強兵が前門後門の分ち敵進くと
ど待りけり。韓固山三萬の兵が帥く海濱の上り城の北門は
押寄せ喊が上鉄炮毒箭が放と更雨の降とくたれども
城中より八伴と少々前が射け支うりて休むとてあそ
固山も有るしとて副將杜煥張起が下知し我が量りふ違は
城兵甚く不勢力唯速に屏が崩し堞を破り二搦に踏潰し
とて前後左右を靡けが虜兵は小旗を得て人煙を族々
雉標の根が混るとも寄大斧が斧鉄鞭が揮石が砕た搦と
毀ち我劣と功を争ふるふおるや這城微塵ふなるらん見
とて小忽然とて城の隈より一箇の火珠飛出其声大地に
震とひくく石垣の盤石抜出ると弾碁の子の落るが如

韓固山大の小異。是齣匹夫の謀計なる。緒卒亦早く退な敵
の奸計に陥る更なれと叫ぶも二萬余の兵雲のく寄附るが奈
何ぞ削り得るは只身が搦であせりも再度一箭の火珠天に沖
とんとる否とも堅固ふんえ雉標一脊小山崩さると霹靂のごと
く鳴く落るるふと憐む重一萬乃攻兵一箇ふおるくを泣
叫声石確地獄の罪人のごとく或は頭が砕く或は眼が出鮎小押
ふ奥のく押重てど死たりと。此時まに海上におる戴健と愛仲は
順風をたぐ飛天噴筒とて大器が船より放ちると其音は
がら海底が覆がごとく敵船の布帆が火燃るたり炎々と煙上り
虜兵大に周障し是は消令とせんと風を強く火勢が激しく中々改
更能く煙が晚炎が焼く海中に没して死する者數をまらと載



ちよろろのこころと
重畳謀略
くんとんかつをまはるす
慶應固山兵

足利三代義満の巻

健彦仲得けんげんちゆうとくよりやとく船を漕連さうれんく混斬まぎらふ斬きく落おちと程ほど小海上こがう
 の攻兵うごへいも命いのち戎助えいすけより希まれかりり。韓固山かんこさんも呆惑あまねまどろく残兵ざんへい戎聚えいあつふ
 僅わずかの五百いほひ人ひと過すべむをれまき半な兵へい善よ戎失しひ手足てあし戎損しんしたる所
 小城こじやう門かど戎八文字やちもんじ小押おし閑ひら戎國姓爺くせいや郎成らうせい公こう百花ひゃくかの盛さか戎戴たい戎錦きんの戦いくさ
 袍戎ほへい縮ちぢ戎赤免馬せきめんば小蹠こつ戎三千騎さんせんき戎左さ右みぎ小從こじゆう戎葛地かぢ暗くら戎殺ころく出でぬ
 韓固山かんこさん是こゝ戎怒いかり戎乳臭ちゆうちゆうの孺子じゆうし何なん許ゆる戎更さらあらん戎我われ戎兵へいと
 折お戎及およ報ほう戎這こ戎奴に戎首くび拾ひろ戎切き戎腹はら戎三眼さんがん鎗やう戎提ひ戎蒐しゆ戎向むか戎國くに
 姓爺せいや戎韓固山かんこさんとと戎正ただ戎母はは戎仇あひ避ひ戎怒いかり戎心頭しんとう戎發は戎
 髮かみ長なが須す象しやう心しん逆さか戎小刀せうたう斬き戎私ひそ戎蒐しゆ戎双方しやうはう馬ば上うへ戎達た戎者しや戎小
 縦たて横よこ自みづか在あ戎小乘せうま廻ま戎三十余さんじゆ合あ戦いくさ戎互たがひ戎小勝せうしやう戎勝かち戎方かた戎韓固
 山さん三眼さんがん鎗やう戎電光でんかうの如ごとく弄も戎閑天かんてんの勢いきほ戎をを戎國くに姓爺せいやとと兩

刀戎陽炎やうえんの如ごとく閃ひら戎闡地けんちの威い戎示し戎緒いと戎流なが戎二十合にじゅうが余あ挑てん戎合
 一ひと戎固山こさん怒いかり戎撞つ戎鎗やう戎國くに姓爺せいや早はや戎右みぎ戎刀たう戎中な戎拂は戎ひひ戎多おほ戎小如何いかに一ひと戎
 鎗やう戎一ひと戎二ふた戎折お戎固山こさん得え戎再また戎度たび操そう戎出で戎鎗やう戎國くに姓爺せいや早はや戎
 空くう戎小列せつ戎上馬じやうば戎一ひと戎拍は戎疾風しやくふうの如ごとく近ちか戎寄よ戎左さ戎手ての刀たう戎揚
 戎丁てい戎斬き戎小過せうか戎固山こさん鎗やう戎持もち戎右みぎ戎手て戎小肩せうかた戎夫おとこ戎一ひと戎薙は戎手
 されさ戎名な戎多おほ戎勇將ゆうしやう戎をを戎猶なほ戎疾しやく戎早はや戎左さ戎手て戎小劍せうけん戎をを戎拔ひ戎手
 一ひと戎文字もんじ戎小刺せうさ戎人ひと戎國くに姓爺せいや透すう戎左さ戎手て戎戎斬き戎固山こさん
 驍せう戎勇ゆう戎力りき戎りり戎とと戎腕うで戎をを戎薙は戎何なん戎どど戎堪か戎死し戎大地だいち倒たふ戎おち
 起おこ戎上うへ戎とと戎蝨し戎戎國くに姓爺せいや馬ば戎下した戎母はは戎の仇あひ戎知し戎やや戎とと戎すす
 斬き戎肉泥にくでい戎をを戎此こゝ戎強つよ戎勇ゆう戎戎々しんしん戎残兵ざんへい戎膽たん戎をを戎消け戎我われ戎先ま戎中な戎敗走ばいそう戎戎
 國くに姓爺せいや戎三千さんぜん戎騎き戎周しゆう戎を作つく戎追討おいうち戎悉しつ戎討うち戎取と戎海うみ上うへ戎小戴せうたい戎健

夢仲十分の勝利を得金鼓を鳴り螺を吹船を回さる。陸の兵身方班り凱歌を揚る。天地の御言て黙しりりり

破倭國姓爺破福建兵

國姓爺ハ奇謀を用く虜兵六萬騎を盡し。就中母の仇。韓固山。討取れ。武威ま。熾ふ。泉列の小壘。逃失適々残る者も。百姓も。思。韓固山自ら血氣の勇。敵。兵。折れ身。今。若。國。大。征。王。

子。大。左。右。丹。二。先。司。馬。徐。岳。三。陣。の。大。將。鐵。故。山。貞。孔。四。陣。の。大。將。劉。泰。定。海。五。陣。の。大。將。温。清。何。五。德。其。他。二。百。の。部。頭。二。百。の。頭。目。都。其。勢。十。五。萬。三。千。余。騎。日。國。の。長。樂。縣。小。塞。茂。構。え。頃。治。成。子。慶。安。元。年。三。月。各。將。誓。成。立。血。成。軟。り。心。を。一。致。し。て。國。姓。爺。を。擊。つ。時。小。思。明。列。の。破。竹。の。勢。小。乘。福。列。を。恢。復。せ。し。と。日。夜。軍。議。を。凝。と。所。北。兵。十。五。萬。騎。り。て。長。樂。縣。へ。出。張。せ。り。と。緒。方。り。急。馬。成。以。り。告。る。更。雪。の。飛。ぐ。國。姓。爺。些。も。動。せ。ず。此。方。り。も。出。張。せ。し。と。泉。漳。の。兵。十。五。萬。騎。成。三。隊。の。令。五。府。の。將。軍。六。部。の。副。將。七。十。二。個。の。頭。目。の。令。成。傳。へ。整。々。と。備。成。ま。り。押。出。し。場。所。を。見。定。て。塞。を。構。え。時。小。國。姓。爺。三。軍。の。指。揮。し。て。日。韓。軍。の。騎。射。を。善。し。特。小。烏。頭。班。猫。等。の。毒。箭。

成故つ。我が軍八馬の敷乏く安平君一依て結小繁茂裏之楯を覆ひ
 是茂肉有と号。又菅原小緩く布茂張て是茂簾幕と号。士卒小
 て毒箭茂防く使とせよ。命トされ衆軍大の悦び不日肉有
 簾幕茂多く作。王致け準備十分。綱ひく。六日。一戦を催せよと
 戦書茂送り。四月朔日。小陣互小備を押出。陣勢茂張。岡小北陣
 より一負の韃將馬を陣外小乗出。と頭小裏金乃盛茂戴。身小昔
 錦の戦絶茂穿。ち手小三。又乃鋒を携。白馬小跨りて。自左先鋒魯
 公と呼。國姓爺小一言告んと呼。りぬ。當下南陣より。門旗を捲
 て先鋒戴健馬茂出。其步扮小。獅子形の盛小生鐵乃甲茂披掛
 紅納襖茂着。腰小攢線の膝膊を繫。け。高頭乃黑馬小跨り
 丈八の綱鎗を提。と。王魯公鋒茂以。戴健を指。く。曰。明帝
 樂小耽り。政茂脩む。民茂虐げ。生靈茂困む。其惡祭討小等。く
 天惡之。地怒りぬ。因。て。我が清王天小代。々々。義兵茂揚。無道茂伐
 々。萬民の塗炭茂救ひ。ふ。れ。天下皆其仁德小懐。れ。又小鮮
 々。く。降る者。秋草の風小靡。々々。然。る。小國姓爺。天命と知
 々。と。絶。小思明を。拙。と。て。迎。塞。茂。犯。一。清。王。小。寇。せ。ん。と。是。蟻。螂
 々。り。車。小。向。ひ。音。衛。の。東。海。茂。埋。ん。と。と。る。小。比。一。何。ぞ。と。く。敵。一
 得。る。茂。死。唯。天命茂畏。と。時。勢。茂。量。り。と。速。小。降。り。三。軍。の。命。と
 全。く。と。り。ち。よ。と。曰。々。れ。也。戴。健。大。小。怒。り。不。毛。の。虜。賊。我。公。朝。の。敵
 小。乗。り。豺。狼。の。心。茂。逞。して。國。茂。奪。ひ。か。ら。猶。自。ら。殷。湯。周。武
 小。身。茂。比。と。と。る。ぞ。奇。姓。か。れ。我。が。王。爵。成。公。明。帝。の。鋒。を。承。る。は
 國王の爲小忠義の兵茂聚り。天下茂恢復せん。と。其志金。石

忠義傳後編卷之一
 二十五



國姓爺
母親仇
斬韓固

山

よりも仍堅し。奈何を區々として夷狄の爲す膝を屈せし見
 よく今小俗が輩天誅を環りまき首身を葬る小地なり
 ろを散らしと散る小悪口しるふと魯公も勃然として大い怒り
 維多の那奴射く落せよと指揮とれ声小應どく矢然射出
 こそと雨のてり。南陣よりも弓鉄砲成一夜小放ちり北陣より
 魯公丹英馬成出せむ。南陣より戴健楊祖魯公を救出
 一喊成發りけり挑之戦小程小馬蹄小跡まき土煙白日成雲せ
 喚叫声を山岳を動し凄しんを疎たり斯く酣戦數刻小
 しく兩陣傷者戦死殿く日已小西海小没しれむ。兩陣互に軍と
 班し引退ぬ其夜國姓爺緒將小對て曰虜賊妻勢めく此中
 勇壯なれな尋常乃合戦せくと勝利を得たり。明日二書

成とく敵成微塵小と成しとく其準備をかりり。程なくその夜
 由明しれ、韃兵雲霞のどく押寄喊成さく攻進む。南陣も日く
 関成合せ水牛一百疋成陣頭小追互後小續て殺出と北兵も將
 馬成連く向ひしむ。胡馬牛水成刃く大の小孩死散々小乱れ立
 小ど。北軍大い強死なぐ騎射の達者なれむ各毒空前を放て水
 牛を射る小水牛を空前成負く益々狂ひ吼り。北兵を踏殺し角小
 掛く列飛と南軍是小氣を得く鉦を鳴し鼓を奏り攻進む
 北兵も斬馬刀成以く水牛成切捨々々敵小當る。茲小清乃二王子
 金鳳乃盛小緑錦の戦袍を披挂驍駒小跨りて後陣小扣り
 敵水牛成放ち我が兵成敗るを刃く下知を傳へ水牛沼を離れ
 くと力弱し唯陣を兩く通さむ自然去るしと令を先鋒の持

実もしく水牛を避通し横切に進むゆゑ三陣三陣も是れより
 水牛を避く鶯地暗く撃つる戴健揚祖少時と是れ支一が
 堪るべく敗走さるること五里許りして二所の原野に至る北軍八勝に乗
 じて一夜の追行の路の竹筒を多く捨置り何の料もやと取て
 んれを其中より山蜂の飛出る支數がとど歩卒の飛くまで刺
 支針より利の鞭將大い笑ひ人々國姓爺が韓信張良の如
 く怖るまじも只是小兒の戲まの陸地水牛を放ち竹筒小山
 蜂が時支何ぞ怕く不足んや悉く焼捨よそ二所小聚り火を
 掛るふ忽ちして竹筒より大珠迸り出其音百千の雷のごく栗
 くゆと馬が孩を嘶く剣上り歩軍が踏倒し蜂の火勢が怕く甲の透
 向より肌を刺し益甚ぶぐぐ満地大となり空より大珠

の降こし雨のごくなれを韃軍大い周障狼狽と互に押し踏倒し
 或は焼く或は傷者數をえりてふ所小左右の臺より天地も崩
 ろごご喊を幾延平王と大文字の繡せし旗を指上伏兵一隊が
 起り石砲を直下放つ程に虜軍里をり成り死する者
 數をえりて二王子も此石砲の中へ人馬も微塵となく其他名者
 頭目も殺さる者牧卒とふ違あはれ韃軍膽を消魂を飛し
 嶺より放と石砲を防ぐ方便なく只我先小と敗走して王が押倒
 し親を引退する所南軍の伏兵此所彼より起し追討り
 討程小ま虜軍數を討ま初十五萬とせえし中二萬騎不足
 小討分れ二王子も石砲の為小命が損せし長樂縣小屯も支
 能はと寨を捨て福列(匪)回多り南軍八千小討勝て勇を悦び追

勢小乘一獨列（乱入）。貝勒王を擄（つら）せしむるを奉（こま）る。國姓爺是を
 制（せい）して曰（い）。是甚（しん）ぶ。无（む）用（よう）なり。敵（てき）一旦（いつたん）敗（さい）しむるも。於（お）數（すう）萬（まん）の兵（へい）あれ
 を却（かえ）て敗（さい）を取（と）る。只（ただ）長樂縣（ちょうらくけん）の塞（さい）小捨（せ）れしむ。敵（てき）の兵（へい）狼（ろう）孟（もう）越（えつ）と
 奪（うば）ひて歸陣（きじん）しむるを利得（りとく）たむべし。長樂の塞（さい）へいしむる兵（へい）狼
 孟（もう）越（えつ）山のくく棄置（すて）しむ。國姓爺諸軍（しよこん）小下知（げち）て悉（しつ）く車（くるま）小積（つみ）し
 り凱歌（がいが）成唱（じやう）し思（し）明（めい）列（れつ）小飯陣（はんじん）と。其軍威（きぐんゐ）宛（あ）も旭（あ）の昇（のぼ）りぐくわれ
 小遠（とん）近（きん）是（こゝ）が為（ため）小戰（せん）慄（り）舌（ぜつ）成（じやう）卷（まき）てと怖（おそ）る。

國姓爺忠義傳後編卷之一畢

繪本國姓爺忠義傳後編卷之二

目錄

國姓爺（しんせい）深智（しんち）結和兵（けつわへい）

國姓爺（しんせい）和刀（わとう）を製衣（せいゐ）志（し）むる圖

永曆帝（えいれき）奔（を）南寧（なんねい）

國姓爺（しんせい）和兵（わへい）を擧（あ）りしむる圖

瞿（きよ）式（しき）紹（しやう）良（りやう）勳（くん）を辱（は）しむる圖

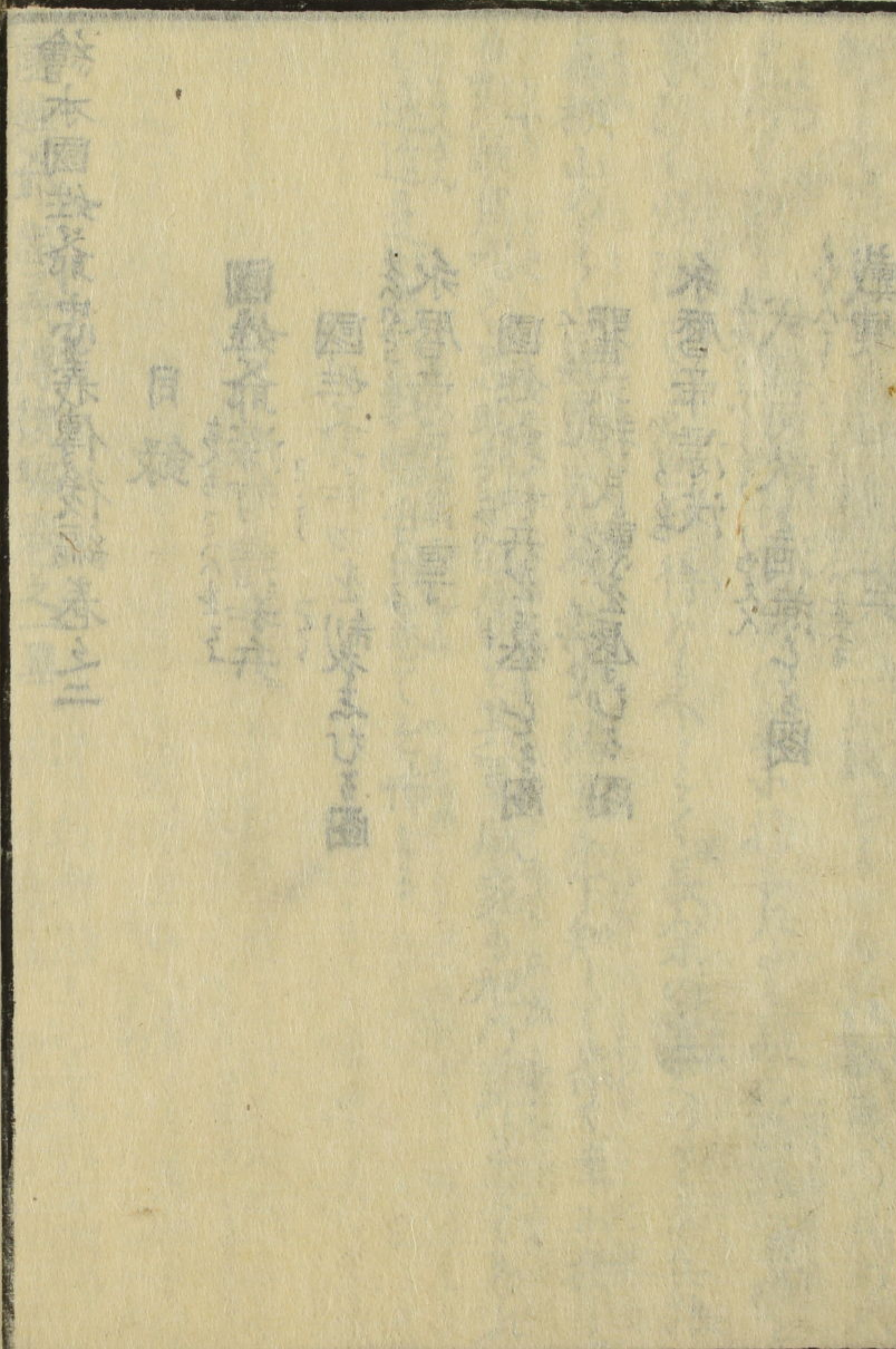
永曆帝（えいれき）漂（ひょう）没（ぼつ）

式（しき）紹（しやう）同（どう）敵（てき）と酒（しゆ）燕（えん）しむる圖

戴（たい）健（けん）遺（い）計（けい）傷（きやう）北（ぺい）兵（へい）

同敵（どうてき）と首級（しゆけい）清人（しやうじん）を懼（おそ）しむる圖

羅漢乃津吏聖駕を迎る図



繪本國姓爺忠義傳後編卷之二

國姓爺深智緒倭兵

善兵戎用者ハ計を帷幕の裡小定り勝利を千里の外小顕とす
 諸君國姓爺ハ一時の謀畧成以て清兵十五萬を微塵に碎た二王子
 成之討取多ハ四鄰怕を慄れ招く者降る者絶間なく廿余萬の
 勢とかり上下悦び勇む処小妻の林氏曾て維熊の夢を感し胎胎
 一々今五月臨産懼をなく玉乃如丸男を産多ふと國姓爺
 大の小悦び諸軍戎宴し多く錢帛分ち与へ民兵を撫育とす
 小緒先鋒高議して告て曰玉の威武南風小溢を征して利ありと
 更た戦て勝さる更なり但し安永曆爺の龍駕廣東を巡幸
 一北兵の為小害とらさむと是皆群臣軍旅を曉さる故なり王

忠義傳後編卷之二

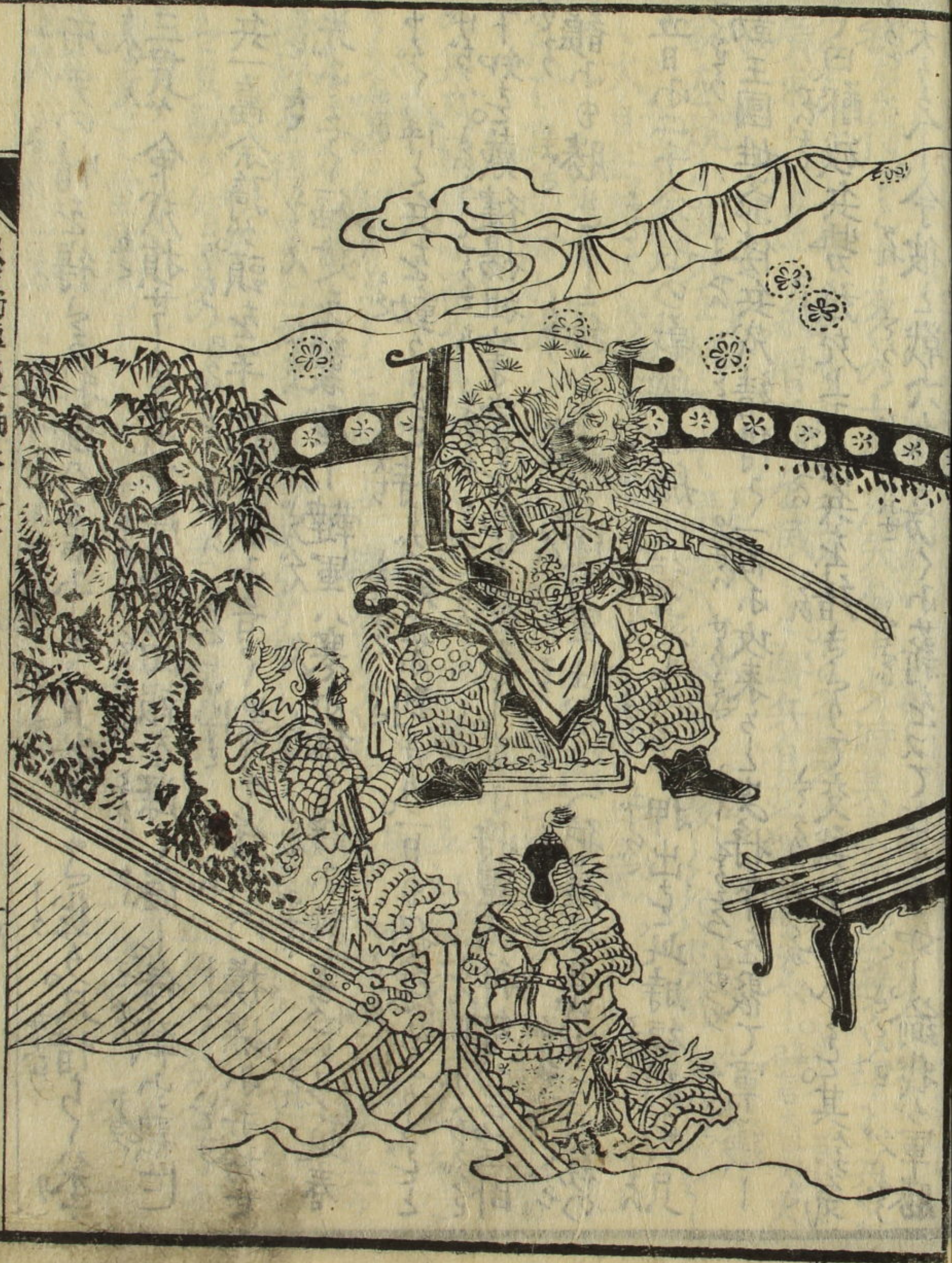
二

早く福建を定め聖駕成迎し人心を定め玉國姓爺が曰われ
 義成唱師を出してより三年を抗し陣小伏て百年を凌ぎ
 國仇を報し宸襟を慰めし人為かり然ども肉いませ孰せざる
 然奈何せん戴健が曰泉漳の兵凡二十五萬是を會して福建を討
 む北兵争う支へ得る死結急小羽檄を圓して兵を聚め之國姓爺
 が曰韃將貝勒ハ智勇兼備せし成以て虜王是を軍師とせり唯々
 しく慢りがし若福建を伐んをうむ倭兵の助力を得小あらずん
 む貝勒を退し日本ハ海を隔る吏數千里今賈船小吏を統せ
 む明春ハ必む報を得るし其上ゆく針策を定むる揚祖が曰
 近年倭寇我土を侵まむと海氣將小緒まらふも今援兵を乞む
 倭寇の巢窟を開く小あらずと國姓爺が曰本林もと日本の地也

産る因り彼土の人心を豫め知り小國よりと國王繼跡連綿し
 て武勇萬國小冠し然も義を以て命を狂介強を凌ぎ弱
 成助る國風なり何ぞ夷狄の海賊のしく撃小乘し不義を行ふ
 死と鏡をて小と諸先鋒衆軍も承伏し然も左も右も討む
 之と同意も茲小於と國姓爺泉漳の賈船小觸日本小使して
 援兵を請つた者やあると擇り求む此吏早く関中小流布し
 福列へ申せんと福列乃人民大り小おられ近年倭寇乃患と久
 しく忘ると魚國家の兵革小困り小今ま二兩寇小到ら福
 建乃人民と噍類あつと怕も惑ひ高賈ハ妻兒を推乃海不入
 農民と老幼を扶て山中小逃隱る國姓爺と漳列の賈李三賈と
 り者を得る若干乃貨物を執り長崎府尹の書成齋一戊

子九月小漳列の港を出船せり。又思明外一場の試場をひくた
 日々小日本の歩戦の法を習ひ、戴健が曰、将卒よく倭兵の法を
 熟煉せよとも其刀蓋小乏し是は奈何しむと死國姓爺曰、兼
 て其準備をなく海中の臺湾へ人を遣し、蛮船より南蛮鉄を
 多く買ひ、今已小若干を購得たり。麾下乃田六藏八森が日本乃
 卿里平戸田中の刀匠なり、渠を師として多くの鍛冶小倭刀を制す
 る法を学し、日小鍊月小鍛ひ、臘寒の水を以て淬む。日本の真
 刀は得ず、何を難く人戴健再拜して曰、王の兵道小心に用るを
 茲小至る敢て尋常の者乃窺ふ、小あくと早く日本力を鍛
 めよと勸む。國姓爺悦び田六藏を師として、多くの鍛冶小其法を
 学し、日々日本乃刀剣を造り、自日々小試場小出く三軍と指

揮し、倭兵の進退を精練せしむ。斯く其年中暮巳丑の春、小成
 田六藏八數千の倭刀を造り出、兵卒八稍日本乃陣戦小熟煉を
 せり。小漳列乃賈船飯りきり、國姓爺小錫して曰、去る戊子乃十月
 東洋大海小、俄小悪風小遭、貨物残と海底小沈、尊書小由
 俱小失ひ、小三貫小を採り取んと、海底小起入ひ、其終姿を
 小小、各罪を請、諸軍此報を告ぐ、大の發死、蒼蒼と
 小、面色小失ふ、小國姓爺此も、諸將小向ひ、荒示と、
 曰、緒將多ると憂る、吏を、余倭兵を請せ、八福建の人民を懼
 さん、謀計なり、日本王何乃好有て、數千里小隔、我國、援兵を
 借る、況や彼國王中華より、貢物せざる、威を海東小振ひ
 國変を窺ふ、小三貫小、書八兵を請、乃書小、あくと、昔日小



武田信玄の御旗



國姓爺
使田六藏
制和刀

武田信玄の御旗

府尹の情を得る。札謝の書ふして貨物もまらざり。只惜り。季
 三貫が命が損せし。吏より。今賈船の回報を深く。隠し。倭戦の執世
 兵一万余騎が頭を平剃り。額小青く。鬪して。倭兵乃。模様小。扮せ
 先小。そく。福建を襲ふ。韓軍。寒小。猛く。暖小。鈍を以て。予。此春
 ち。倭と兵を動かさざり。待り。期正小。到きり。一日。猶。豫。さ。ざ。り。と
 下知。戴。健。揚。祖。等。掌。を。拍。て。感。歎。し。真。小。将。軍。の。神。智。ハ。呂。望。卧
 龍。小。勝。き。り。と。稱。し。て。止。む。遂。小。軍。壯。兵。調。へ。孤。虚。乃。日。成。ト。三。月。初。の
 五日。小。二。千。余。艘。の。戦。艦。を。艦。し。福。建。を。望。み。押。出。さ。り。此。時。福。列。小。八。貝
 勒。王。國。姓。爺。倭。兵。成。績。得。り。一。存。小。攻。来。り。と。史。将。卒。を。聚。て。軍。議。し
 て。曰。鄙。族。兵。勢。強。た。し。小。倭。兵。を。請。き。り。て。交。戦。を。挑。ん。と。其。銳。氣
 尖。く。今。彼。と。戦。ハ。火。を。防。ぐ。小。薪。を。以。て。も。ろ。が。如。し。論。我。が。軍。勝

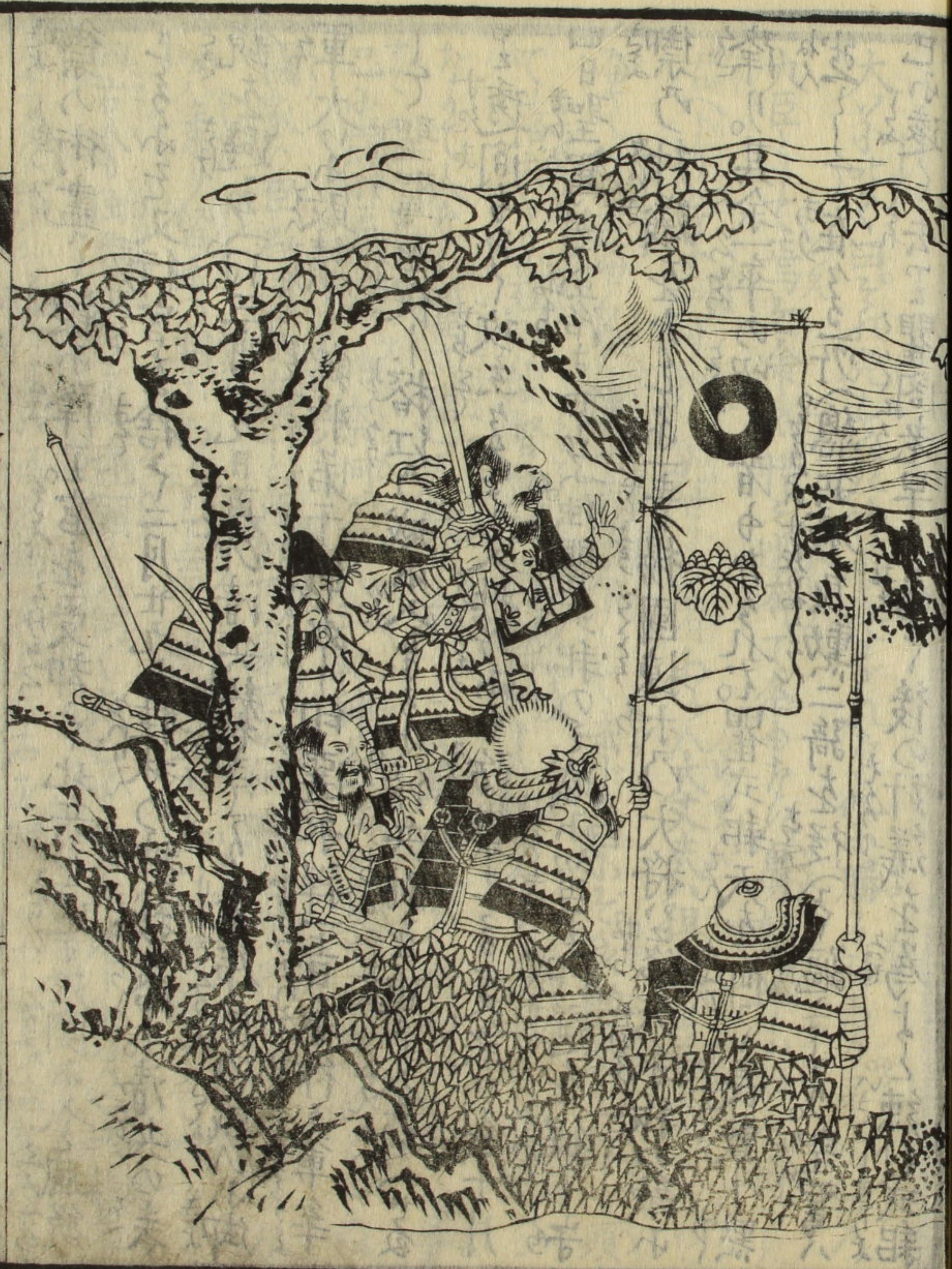
利を得るとも。多くの士卒が失せし。少時其末鋭を避く。却る兵と
 廣東小指遣。永曆爺を滅さる。鄙兵自然離散。と。壁言を。大。火
 家を焼小。其火を救む。隣並乃。家舎を毀。火災の他。不及。と。て。火。自。然。滅。さ。り。如。し。只。敵。の。寄。さ。る。以。前。小。南。京。へ。り。ろ。小。不。如。と。曰。

多れ。其。高。論。小。伏。し。と。緒。提。お。ん。と。曰。急。を。見。小。倭。依。て。貝。勒。王。五。萬
 の。兵。が。福。建。小。留。り。其。余。の。兵。を。師。と。福。建。を。立。江。寧。の。地。方。小。赴。き
 たり。嗚。呼。智。を。ろ。ろ。小。貝。勒。よ。く。機。を。ろ。ろ。小。變。小。應。む。と。緝。登。し。孫。吳。が
 秘。訣。を。得。り。と。大。清。一。統。の。世。と。せ。し。ハ。王。乃。仁。德。小。よ。ろ。と。い。ふ。も。二。つ
 之。貝。勒。が。智。勇。の。功。な。り。ろ。ろ。去。程。小。國。姓。爺。り。二。十。五。萬。の。勢。追。々。小
 漕。着。て。雲。霞。段。の。ぐ。く。海。岸。小。上。ま。た。府。城。の。兵。之。一。戦。小。ど。由。及。ま。り。夜
 小。終。ま。り。三。日。が。内。小。何。國。も。な。く。落。失。ま。り

永曆帝奔南寧

國姓爺八福建の貝勒一戦ふ由及たると敗走しつれた南海正小峽
 復もいざとも福泉雨列の遐なる隅幽なる地小八韃將を小墨を
 守り動もこれを軍卒を出し百姓を残害して止む因て己丑の
 春より八福建の兵を叱し泉列の馬都督が城を責落し福列の
 林萬戸が墨を攻潰し一日も早く永曆帝の聖駕を迎へんと
 間者を以て廣東の消息を探らせせ國姓爺一度楚小向くと欲
 されども貝勒南京小據江寧より浙江中々の間切所く小虜將
 を驚かすみぐ櫛の齒をかりくく如く備を狂忽小兵を動さ
 小貝勒引違て再度関を奪入吏を怕き敢て兵を進めと見
 合居りて茲小永曆王六度々清兵の為小趕きさせ小粵楚の地

を巡り庚寅の正月と肇慶府小駐王世の動靜を見合せむひが
 日六日南詔の守將小城を棄て逃奔ぬと報せり小と肇慶府の
 行在中保ち難く日八日船小召て西成して落ふ是小依て百官
 中取物もとりあへど龍駕小後ひぬ斯艱難危急の秋をぬも哀
 彭年劉湘客丁時魁金堡蒙正殺の五人政を專小し上を蔑如
 小し私欲をのり行ひつれも諸人是を五虎と呼唾吐して己心惡く
 只瞿式邦一人忠貞を守り五年が間王の為小身命を抛ち緒列の
 道を拂是小因て銀幣わく小猪忠貫百の金印一枚を賜ひ其
 孤忠を旌し三月朔日聖駕梧列小至り暫時昏慮を去らせ
 らる所小まも清將平南王尚可喜靖南王耿仲明各五萬騎の
 兵を師ひ海利王を捕け吉安府を攻立鎮將李士健郝尚密小防



久松義興



久松義興
 國姓爺遠計
 摸和兵懼
 清軍

御の術盡く鞭小降し官を受却く北兵を導守死闘小入と風鋭
さるふそ又行官を捨く二月廿九日桂林の地へ拔落し清兵の未
鋭を避くは三月十九日再び清兵襲きより竜虎園の戦ひ小脚
軍大い小敗績し緒將若于戦死し印選永祥一音永祚を輩率
して聖駕を促し榕江の城小入し清兵跡を追く全列へせむ
す透間ゆなく攻立々をせむ又此所ふも防禦さるる更能りとも十月
四日聖駕南へ落させむ獨瞿式耜の城小留し印選を促し守
禦の針議をなせし一音揚國棟ホ乃大将ハ落失永祚ハ敵小
降り其餘一卒の留る者ゆか多れむ瞿式耜天を仰ぎ長歎し黙
然として在る所へ總兵戚良勳二騎を従へて驅き入り聖駕ハ
巴小遠く去り瞿閣老早く落し後の針議を為しと練む式耜

大い小叱く曰それ死むる時小死せむれを死小勝る耻あり予明朝の
大臣として焉と命以惜し逃奔て名ゆかり虜奴の手小耻を得て死
すより今小到り難く死せむる者あり人丈夫ハ但死を善道小致を
るし你去るを速く去り決して去ると曰ふと良勳面を紅し頓
て落去り茲小總督張同敞ハ靈列より回リ多るが城中早空壁し
かりて人なく瞿式耜一人残り留ると皮單騎少く城中へ入る曰事
已小茲小逼るる將奈何がせん式耜神色如も変せむと尖然として曰
國家の臣を國家有るる知國家已小氓滅と身將何國へ往ぶ死
公ハ素リ留主の職小あると盡く速く去ざる同敞唱せしめて嘆く
曰百人も独君子たるが愧願く一同く死するを誓しむ久や式耜是
を中よく大い小悦び俱小酒を酌うと左右を顧る小中軍の徐高乃と

終不去して居り式部其義心を感じ近く招て酒を勧め曰る徐一
 人城小留方予と死を俱せん心う徐高う曰願くハ將軍小陪後一
 九泉小赴たいん式部泪を流して曰數多の矢乃中小倫一人從義を重
 命を運んむ縋登し真の大丈夫と但し予你小純まぶき事あり
 承引て人々否や徐高が白狗命已小將軍小捧ぐ何事を尊命小
 從さるる命死式部大悦び勅書御劍寶璽等を取出し徐高小
 子と曰予此城中死せん更八固り好む処なれども國朝の御劍寶璽を
 らび小勅書を狗堂の手小汚人更深く予が傷む所なり徐死まぶき
 命を全し何卒是を持て城を落君が行在小尋行と献是是予
 と曰死する小百倍せる大忠なり徐高不悦して曰卑將始より
 死を決しと田まり何と今更去る更を欲いづれと固く辞する

を式部同敵とも小種々言を盡し練々々ふと徐高今ハ辞する小
 道なり已更を得と密書を受納別を告網を揮て落去り式
 部大の小心を安ん又燈を挑げて觴を同敵小勸め稍其夜も更
 て三更小おひる所清兵數十騎刀を腰小し矢を携方へ入来り
 二人を縛り捉んと式部同敵吐て曰我亦兩人夜の明を待て清の陣
 小行死を渎せんとは何と縛し辱んともとて奮然として虜騎
 と俱小城を出る清江王が府小到る孔有徳清江王二人の来るを忙
 かく階を下り手成揚て曰吾湖南小在るが先生の塔江小留主
 たる故小茲小到まら兩公義小依て死を怕まざるハ感まする小
 堪らり吾何と忠臣を殺まぶ然今已小明朝の氣運盡く天運清小
 飯と余も前朝小事て兵馬を嘗りいれども天命を知り清小属し



畠山 城
畠山 式部
厚ニ
良勲
ハ



今靖江王の封を得たり。先生も明朝の錢糧を掌まり、願く清
 小降り也。余清王の奏して重職を乞て先生小勸前朝の
 相交をせし善と曰。式部大少怒。曰。我ハ是天朝の大
 職を受んや。益か死舌か。勞せんり。疾軼よと。呼り。有徳
 當我ハ是王位小居と。されど。卿が忠義を賞し。言成早して好意
 を告る。何ぞ承引さる。式部益怒り。昔唐の安録山不義無道
 あり。後自身王と称せ。卿も然り。何ぞ王位の賤中。言り。有徳
 有徳心小憤り。先生我を録山小比と。れども。我敢て君を凌ぐと。余も
 是孔子の裔孫なり。勢乃逼る。所今小至る。先生賤むる。更なるを
 と。言ひ。言ひ。終つる。小同敵。声を厲り。て曰。俗之是。不義の匹夫小

録山小後勝まり。然る小後。聖裔と稱し。自先聖を辱し。
 ひる。散る。罵て。止む。孔有徳大少怒り。左右小命して同敵を
 縛る。其臂を断んと。式部大少叫ぶ。曰。是天朝の忠臣。官。詹。司。馬。
 張同敵。余と俱小斬。何ぞ辱む。更を。有徳。入て
 曰。是。一。所。の。戲。の。ま。索。を。解。衣。冠。を。還。て。座。せ。り。諸。曰。余。実。小
 卿。亦。兩。公。知。能。を。惜。む。願。く。清。小。事。也。種。々。勸。り。諭。せ。し。も
 兩人。心。金。石。の。く。は。れ。是。北。か。く。民。家。小。兩。人。を。頭。お。た。時。を。奴
 舌。勝。ま。り。官。吏。を。遣。し。髮。を。薙。く。清。小。降。人。更。を。勸。ま。し。も
 兩人。頭。を。擲。く。不肯。官。吏。を。て。餘。一。僧。を。自。ら。僧。と。な。し。如何。と
 問。ぬ。式。部。曰。僧。之。髮。を。剃。の。漸。か。る。者。を。ん。髮。短。く。命。長。我。我
 愧。る。所。か。り。と。敢。く。之。れ。ど。日。夜。同。敵。と。俱。小。縛。を。賦。し。唱。和。す。

て其志を述^つ只管^し死^を待^まこ^し四十余日^も及^びぬ。然^らる^に一日^も虜^兵ども
數十^騎俄^にあ^きま^り。瞿^閣老^出よ^と呼^ぶ式^報同^敬を^顧て^曰。是^もあ^まず
我^徒が^死ま^さき^期ま^りる^をも^とと^て。兩^人衣^冠を^整す^る南^にむ^かひ
永^曆王^乃行^在を^拜し^半ば^く録^せる^臨難^詩兩^人唱^和せ^る緒^稿
と^俱案^上の^置置^寛せ^て歩^み行^路上^兩人^相縋^て曰^身死^を共^に
靈^鬼誓^言て^虜賊^を殺^んま^らず^と歩^で城^の隅^に到^るふ^一個^の盤^石あり
或^報顧^て曰^余平^生山^水の^佳を^愛ま^す此^石頗^る佳^{なり}此^所に^死と
登^しと^乞刑^をせ^らる^者其^結小^後の^遂小^張同^敬と^一時^に小^斬罪^に報^す
式^報の^辞世^の待^小曰^一

從容待死與城亡

二百年來恩澤久

千古忠臣自主張

頭飾猶帶滿頭香

同^敬八^刑せ^られ^ども^屍敢^て斃^まさ^ず首^地に^落と^躍上^ること
三^度眼^を怒^り炎^の如^き息^を吐^く虜^兵大^に怖^ま孩^く所^に忽^ち
晴^天搔^曇り^く暗^夜の^ぐ霹^靂天^に真^に電^光空^に閃^きて
降^雷六^掌の^どく^忽ち^十四^人を^擊手^殺し^たれ^ど残^る者^も大^に怖^ま
を^惑ひ^面色^土の^どく^小なり^追々^小を^逃れ^りなる

永曆爺漂没

去^程小^永曆^王十^月四^日小^榕江^を出^させ^む日^十日^得列^小至^{らせ}
小^陳邦^傳忽^ち謀^叛し^聖駕^を奪^ひ敵^に降^んと^謀る^我王^化
澄^此由^を洩^す後^半小^兩を^留し^嚴起^恒王^化澄^馮吉^翔歷^天壽^小
數^人聖^駕を^守護^し助^け出^しなる^斯大^急の^變事^なれ^に御^駕
小^後至^る緒^臣を^采心^く邦^傳が^小討^を或^ハ水^に落^とく^死せ^る



史記卷之八十一



式部与
同飲酒
宴罵孔
有德

史記卷之八十一

者牧^{まひ}羊^まと^とう^う不^ふ遑^{たう}あ^あら^らむ^む日^ひ月^{げつ}十六^{じゅうろく}日^{にち}聖^{せい}駕^が辛^{しん}と^と南^{なん}寧^{ねい}ふ^ふ至^しり^り也^{なり}
 小^{せう}中^{ちゆう}軍^{ぐん}の徐^{じゆ}高^{かう}喘^{たん}々^{たん}勅^{しやく}書^{しよ}御^ご劍^{けん}王^{わう}璽^{せい}を^を待^{まち}て^て来^きり^り纏^{ちん}ぐ^ぐ献^{けん}る^る永^{えい}曆^{りやく}
 王^{わう}曰^{いふ}宣^{のたま}く^く朕^{ちん}が^が落^{おち}し^し後^{のち}の^の事^{こと}ハ^ハ奈^い何^ん徐^{じゆ}高^{かう}答^{こた}へ^へて^て奏^{そう}ま^ます^すと^とく^く二^に日^{にち}ふ^ふと^と
 廣^{くわう}列^{りやく}已^い不^ふ破^ぱま^ま五^ご日^{にち}ふ^ふと^と桂^{けい}林^{りん}破^ぱる^る杜^と永^{えい}和^わ以^い下^のの^の諸^{しよ}將^{しやう}々^々髪^{かみ}を^をと^とり^り
 敵^{てき}不^ふ降^{かう}ま^まり^りと^と承^{うけ}り^り自^{みづか}皇^{かう}帝^{てい}耶^やま^まと^と問^とく^く曰^{いふ}搭^{たつ}江^{かう}々^々奈^い何^ん徐^{じゆ}高^{かう}曰^{いふ}
 城^{じやう}中^{ちゆう}の^の將^{しやう}率^{そつ}比^ひ皆^{みな}敵^{てき}不^ふ降^{かう}り^り或^{ある}は^は落^{おち}失^し惟^{ただ}罪^{つみ}閻^{えん}部^ぶ一^{いつ}人^{ひと}の^の城^{じやう}を^を守^{まも}り^り
 臣^{おみ}小^{せう}命^{めい}と^とて^て寶^{たから}玉^{ぎよく}我^{われ}君^{きみ}不^ふま^まり^りと^と自^{みづか}皇^{かう}帝^{てい}耶^や是^{こゝ}故^{ゆゑ}也^{なり}以^{もつ}苦^くと^と一^{いつ}声^{こゑ}哭^{なみ}
 地^ち不^ふ昏^{こん}倒^{たう}一^{いつ}也^{なり}諸^{しよ}臣^{しん}強^{かやう}て^て急^{いそ}不^ふ扶^{たす}起^たり^りな^なま^まる^る自^{みづか}皇^{かう}帝^{てい}耶^や漸^{ぜん}々^々不^ふ
 換^{かへ}り^り士^し化^{くわ}澄^{じやう}不^ふ對^{たい}以^{もつ}宣^{のたま}く^く朕^{ちん}監^{かん}國^{こく}と^とす^すり^り六^{ろく}年^{ねん}一^{いつ}日^{にち}片^{ぺん}時^じ心^{こゝろ}を^を安^{やす}ん^んせ^せ
 六^{ろく}祖^そ宗^{そう}心^{こゝろ}を^を不^ふ息^{せき}を^を例^{たと}ひ^ひ下^の臣^{しん}庶^{しよ}の^の為^{ため}不^ふ賞^{しょう}を^を絶^たと^と吏^し能^{のう}と^と是^{こゝ}
 朕^{ちん}が^が不^ふ德^{とく}か^かり^り式^{しき}組^{ぐみ}が^が如^{ごと}忠^{ちゆう}臣^{しん}と^と國^{こく}の^の為^{ため}不^ふ身^みを^を失^しり^り他^たの^の

諸^{しよ}臣^{しん}々^々離^りれ^れて^て叛^{はん}た^た今^{いま}天^{てん}下^か廣^{くわう}と^とり^りも^も朕^{ちん}不^ふ後^{のち}不^ふ者^{なり}卿^{きやう}等^{とう}數^{すう}人^{ひと}也^{なり}
 此^{こゝ}六^{ろく}卿^{きやう}等^{とう}も^も朕^{ちん}を^を捨^{すて}早^{はや}く^く去^さて^て生^{せい}を^を安^{やす}ん^んせ^せ王^{わう}化^{くわ}澄^{じやう}嚴^{えん}起^き恒^{こゝろ}等^{とう}
 纏^{ちん}ぐ^ぐ奏^{そう}り^りと^と自^{みづか}皇^{かう}帝^{てい}耶^や何^{いか}が^が也^{なり}斯^かる^る吏^しを^を曰^{いふ}と^と昔^{むかし}漢^{かん}高^{かう}祖^そ楚^そ項^{かう}羽^うと^と
 戦^{せん}ひ^ひ七^{しち}十^{じゅう}余^よ度^どま^ま敗^{たい}り^りと^と遂^{つい}に^に烏^う江^{かう}の^の一^{いつ}戦^{せん}不^ふ楚^そを^を亡^なし^し四^し百^{ひやく}年^{ねん}の^の
 基^き業^{ぎやう}を^を開^{ひら}いた^た心^{こゝろ}弱^{じやく}く^くな^なり^り以^{もつ}練^{れん}兵^{へい}王^{わう}化^{くわ}澄^{じやう}徐^{じゆ}高^{かう}不^ふ
 問^とく^く曰^{いふ}鄙^ひ鳩^{きう}達^{たつ}ハ^ハ奈^い何^んか^かや^や也^{なり}徐^{じゆ}高^{かう}曰^{いふ}鄙^ひ兵^{へい}も^も散^{さん}々^々不^ふ敗^{たい}績^{せき}鴻^{かう}達^{たつ}を^を
 流^{りゆう}箭^{せん}不^ふ中^{ちゆう}り^りと^と死^しす^す殘^{ざん}年^{ねん}ハ^ハ八^{はち}方^{ほう}離^り散^{さん}一^{いつ}化^{くわ}澄^{じやう}又^{また}問^とく^く曰^{いふ}張^{ちやう}同^{とう}敵^{てき}ハ^ハ奈^い何^ん
 徐^{じゆ}高^{かう}曰^{いふ}同^{とう}敵^{てき}ハ^ハ卓^{たく}錡^き也^{なり}搭^{たつ}江^{かう}の^の城^{じやう}中^{ちゆう}入^い瞿^{きよ}閣^{かく}老^{らう}と^と曰^{いふ}死^しせん^んと^とを^を
 乞^こひ^ひ一^{いつ}が^が必^{かなら}定^{ぢやう}日^{にち}時^じ不^ふ死^しす^すと^と答^{こた}へ^へ諸^{しよ}臣^{しん}是^{こゝ}を^を中^{ちゆう}々^々大^{だい}不^ふ氣^き力^{りき}と^と屈^{くつ}
 斯^かる^る斯^かる^る如何^{いか}と^と自^{みづか}皇^{かう}帝^{てい}耶^やの^の御^ご手^てを^をと^とり^りて^て浴^{よく}行^{かう}兩^{りやう}日^{にち}間^{かん}不^ふ終^{しゆう}不^ふ博^{はく}
 飯^い少^{せう}を^を進^{すす}ち^ちな^なま^まる^るの^のと^とを^を皇^{かう}帝^{てい}耶^や飢^う臨^{りん}て^て歩^あま^ませ^せ也^{なり}馮^{ほう}吉^{きち}

綱（つな）入（い）る（る）民（たみ）舎（や）入（い）是（こゝ）ハ明朝萬乘の君（きみ）とせしめ今韃賊（たつぞく）の爲
 小害（せうがい）られぬハ南寧（なんねい）小落（せうらく）まじしむせしめ徐（じょ）們（めい）三百年（さんねん）來の國恩（こくおん）を思
 ぐ宜（よし）く護送（ごそう）しなれよと叫（こゝろ）百姓（ひやくしやう）ホガ曰（い）萬曆（まんれき）より以來朝廷（ていてい）の奢侈（せうし）
 甚（たゞ）ぶ（）酷吏賦税（こくしふぜい）を厚（あつ）くして萬民塗炭（ばんじんずたん）の困（こま）を受（う）はハ皇帝
 乃（な）窮迫（きゆうぱく）中（ちゆう）維（い）天（てん）の罪（つみ）とて河（か）方（ほう）り維（い）是（こゝ）を救（すく）ふ（）敢（あ）て（）りあへと皇
 爺（や）ハ民（たみ）が惡言（あくげん）成（な）り（）ハ左右（さうぶ）を顧（か）りて御書（ごしよ）を墨（すみ）せ（）ハ亡國（わうこく）の君（きみ）ハ廢
 民（たみ）が（）棄（す）る（）吏斯（し）の（）況（いは）や朝（あ）楚（そ）暮（ぼ）秦（しん）の諸臣（しよしん）成（な）り（）深（ふか）く嘆（なげ）れ傷
 多（おほ）王化澄（わうけい）以下（いげ）是（こゝ）を慰（なぐさ）め（）し（）皇（きみ）より玉列（ぎよく）は忍（しの）び（）せ（）し（）南（なん）海（かい）の
 國姓（こくせい）爺（や）が消息（せうしき）を得（え）て再（また）び恢復（くわふ）を因（よ）る使（し）方（ほう）とて（）却（か）駕（か）と
 促（う）し羅漢（らかん）といふ渡（わ）口（くち）小著（せうしやく）津吏（しんし）其凡庸（しんぷう）な（）ら（）さ（）る（）成（な）り（）聖駕（せいかけ）を迎
 へ（）し（）船中（せんちゆう）小在（せうざい）合（が）麥飯（まきはん）を羞（は）り（）し（）王化澄（わうけい）が曰（い）昔漢（せきかん）の光武帝（くわうぶてい）軍

中（ちゆう）中（ちゆう）飢（う）臨（りん）と漳沱河（しやうたが）の渡（わ）あり麥飯（まきはん）をせられしより遂（つひ）小王莽（せうぼう）と亡
 一後漢（ごかん）を中興（ちゆうきゆう）しぬたされを其先例（せんれい）を（）ナ（）京（きやう）正（せい）く聖運（せいゆん）を因（よ）せ
 ぬふふ（）吉兆（きちしやう）あり（）と祝（い）し（）なり（）君（きみ）を始（はじめ）り諸臣（しよしん）の（）とて
 色（いろ）を整（とと）し（）津吏（しんし）大（おほ）悦（えつ）び（）儀（ぎ）して頓（とん）て土列（どれつ）の地（ち）へ送（おく）り（）し（）ら（）が
 其後（そのご）皇帝（ていおう）命（めい）さ（）び諸臣（しよしん）何國（な）落（らく）奈何（な）ら（）や聖駕（せいかけ）の（）彈（たま）り（）所（ところ）を
 ちと明朝（めいちょう）派（はい）滅（めつ）の程（ほど）と懸（か）り（）し（）ら（）る（）
 戴健（たいけん）遺（い）計（けい）傷（や）北兵（ぺいへい）
 却（か）統（とう）國（こく）姓（せい）命（めい）ハ福建（ふっぴん）を攻（せ）落（らく）して（）り武威（ぶい）を亡（な）し閩（いん）小輝（せうけい）ハ猶（なほ）も福泉（ふくせん）
 漳（しやう）三列（さんれつ）残（ざん）かり平定（へいテイ）せん戴健（たいけん）ハ八萬騎（はちまんき）を授（ま）け（）留（る）王（わう）居（い）し林勝（りんせう）
 小三萬騎（せうさんまんき）を（）与（よ）へ（）閩南（いんなん）の游擊（ゆうき）將軍（じやう軍）と（）なり船（せん）ハ残（ざん）る兵（へい）を領（りやう）して
 小畢（せうへい）が（）を攻（せ）え（）し（）然（しか）る所（ところ）ハ永曆（えいれき）四年（し）庚寅（かういん）十二月（じふにがつ）乃（すな）中（ちゆう）旬（しゆん）廣東（かうたん）より

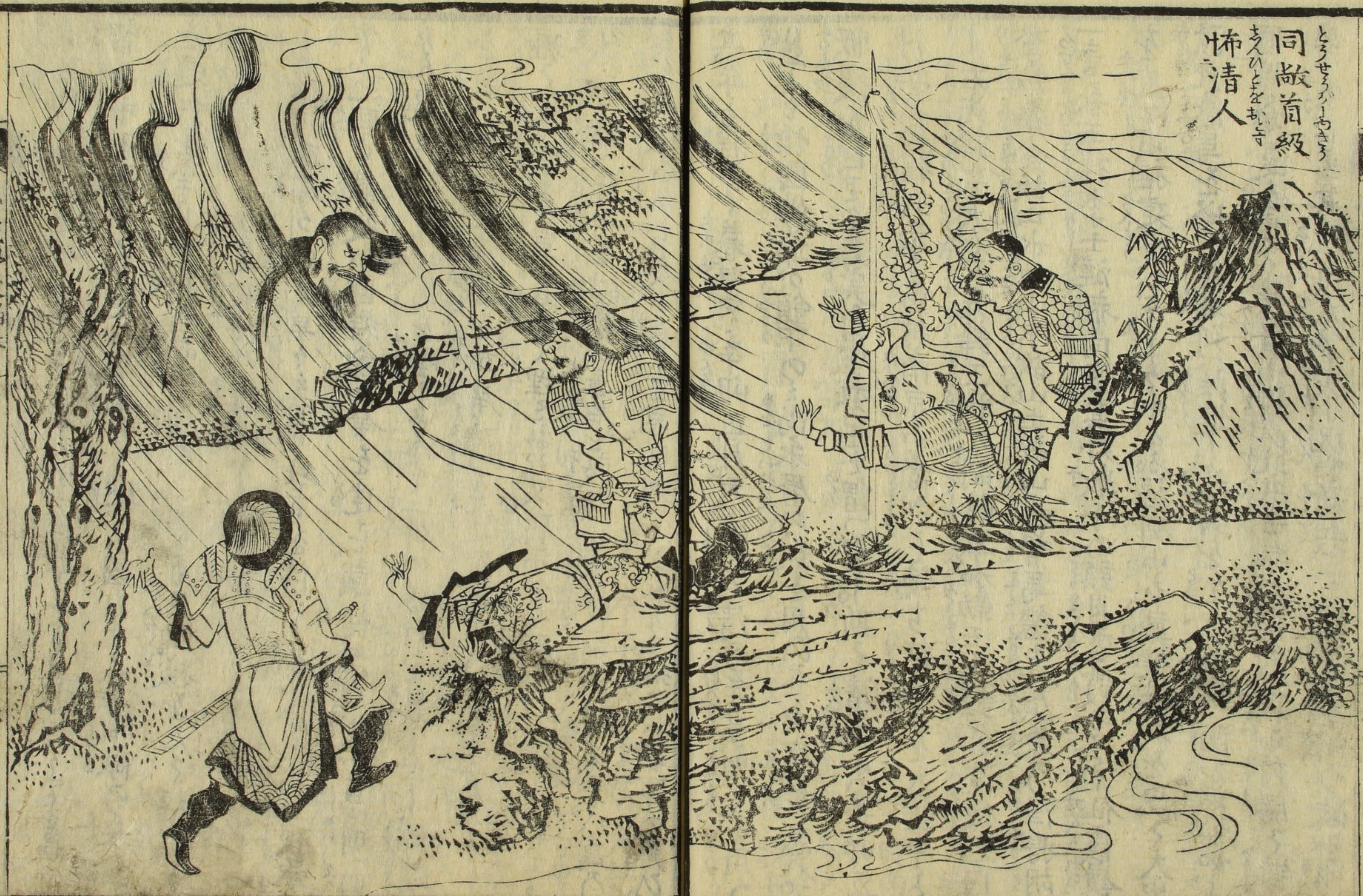
忠義傳後編卷之二

十四

向ひ一兵追々逃回リ。廣列肇慶府より桂林榕江に至るまで悉く
敵のよみ攻拔き叔父鴻達將軍ハ流官前中て卒し以瞿式耜
同敵ハ囚る。其他の諸臣ハ難死と者としてハ一人もかく悉く敵ハ
降リ。永曆帝ハ統ふ三五の内臣と俱ハ何國ともなく落失ふ。告
々ろふぞ。國姓爺天を仰ぐ長歎し嗚呼命あるを。憤怒の泪
小甲の袖を沾し々ろぐ。又カハ返す。此ハ聖駕を尋て迎へし中国
を恢復せん。諸將と相議り圍の兵を思明列ハ聚め墨を堅し堀
を深し守禦の備を嚴密ふとて專ら軍議を凝し々ろ。干時南
京ハ廣東の交戦ふ。勝永曆王逃奔有しを貝勒早く北京へ
奏し。此ハ六國姓爺を誅罰し。天下統一統ハ平定し。ゆハ南征の援兵
を賜る。應しと求む。清王大ハ喜ぶ。其旨諸臣ハ令を下され。ふが

其年ハ往々暮翌を辛卯正月。天下悉く清の年号順治を用ち
然ども惟國姓爺が領下の尚永曆の號を用ひ昼夜寝食忘れ
恢復を圖り々ろ。実ハ忠義の士と縉つ登し。斯く清朝ハ辛卯五
月北京の援兵二十萬騎南京小着到し。便ち征南王を大將軍と
し。右先鋒安大人左先鋒王狀元副將軍加勅王先鋒部院從經同
李成泰金故山水故山木故山土故山提督馬德先廣東ハ降將胡
一音永王祥李士連郝尚密其外數千の頭目雲霧段のぞく仙霞嶺
を直下ハ福建道へぞろ。や々ろ。福列小ハ戴捷此義を以て大ハ
孩ハ急馬を以て思明列ハ進進し。援兵を乞ふ。櫛の齒を挽が如し
國姓爺是を以て使者小對ハ北兵去年廣東ハ戦ハ討勝し勢
ハ小乘む。其銳氣太く尖し。況ハ新兵二十萬。是等剛ハ敵ハ非

とうせうらいちきう
同敵首級
きんひとをあら
怖清人



余弛向て雄雄を決するハ安らむと我が國將とて其心持ぐ一萬一
 留守中小變ありて進む道なき退く國なきへハ敵の来銳
 を避兵を全うして我が思明へ回る前も貝勒様を令々福徳を
 捨南京へ回まり是智將の謀略かり今戴徳まは是の力ハ回る
 とも何の耻辱あり人早々ま回リ此旨を傳よと命じられ軍使承
 けり弛回て戴徳ハ國姓爺が命を達と戴徳はさ然を思明へ回
 かん速莫北兵ハ一驚を喫しめんて二件の謀計を棄し出し焔焔
 を煎して紙を添恋を張屏障を造竈の下乃土を三尺むり
 掘く大薬を壺小装て埋めたる又厩ハ鳥頭汁小浸し乾せる
 絲を儲井小を砒霜の毒石を敷設謀計ハ小調ひたるハ萬ハ
 兵を四隊分ち夜小乘して思明列を赴たる城民ハ韃軍の再び

攻来ると皮く如何なる暴虐然らむと人々安んじ心むなく老幼と
 枝け資財を運び山林に逃隱し或ハ他郷に移り騒動とる吏
 大々たりと斯く日年六月小清將征南王三十萬の猛軍戎帥て獨
 列の地入るも敵一人もなく無人の境へ入る。左右の先鋒安大人
 王狀元を先城中へ今点檢し士率小令して曰郵族究く詐の謀計
 妻。城中如何なる可謀を藏し我が兵を穿小陥人と巧中知じ
 屏障の類ハ盡く林火棄し下知れを頭目等其意を得城乃
 隅小屏障を積るも火を掛る小忽ち空中小飛上り火乃雨
 を降し多ふと頭目ホ大ハ孩死れをこるとと騒り火炎ハ
 方小散乱し埋めたる竈の下乃大薬小火移り霹靂のこり小
 一声震とみく大地裂て大玉空中小飛回リ數百人乃頭目手成

折た面を損ト死とる者敷をちりて。女時の間小城隅小屍山を
 築た多。安大人王状元此骸を刃く深く恐き。安亦小違とる。部族
 奇針を殺しけ。決して城中の井水を汲支なれ。毒石を沈く我軍
 を塵金小せんも量が。別小新井を穿ち用ひよと令と。征南王是
 を安と。曰。両先鋒の言甚。理小中きり。予天小行く新井とる
 金と。丹城を凝して天神地祇を拜し。自剣を抜て大地を刺
 多。小天命。清小帰とる兆小。忽然とて一脉の泉漏り出。三軍大
 小悦び。萬夫小命とて其土を穿。鑿しち頃刺の間小。個の新井を
 得と。不側なり多。此夏の末少。雨降とる。夏兩月小。かびて原
 野の草焦枯く。秣小乏く。れを典廐。是小困と。多。廐の側小枯た
 る。救の乗敷千束積上。れ。大小悦び。是を救小。和し馬小。餉とる。小
 數万の馬。俄小。困之。漸々小。斃死と。典廐。其妻死た。成。覺ら。ず
 是炎暑の為小。病る。か。ち。湯藥を与へ。瘵せしむ。と。露
 ころりの致なく。數萬の馬を殺して。後初て。秣小。毒ある。成。知。韃。特
 面を見合せ。敵の謀略小。委死を怕と。合と。り。思明小。國姓爺。戴。健
 が。回。り。来。り。成。悦。び。二。十。萬。の。兵。を。屯。し。敢。軍。を。出。さ。せ。と。土。列。し。り。雲
 南の地方。哨者數ト人を遣し。永曆王の聖駕を迎へ。も。ん。と。普。賢
 探り尋し。ち。れ。い。も。如何なる。更。小。取。て。御。行。方。知。り。と。る。と。是。非
 画輝定計殺阿克高
 斯て征南王。福列小。屯して。阿克高を圍。り。遊。擊。手。將。軍。と。安。大。人。を
 招撫使と定め。漳泉の間を鎮し。も。事。も。思明を代。人。軍。議。小。日。成。送。り
 多。ら。ん。茲。小。函。輝。と。一。萬。余。騎。を。大。星。城。を。守。る。更。已。小。三。年。小。お。し。ふ

忠義傳後編卷之二

十八



らまのまやめ
羅漢津吏
迎^{せい}
聖駕^{せいこ}



只善信後編卷之三

とソトも要害堅固の切所とソハ函輝智勇兼備の名将なり。福列
 より昔て兵を進得む。久く安閑なり。歩軍も函輝女守御の
 備小急ふと器械を備へ砲声を絶と更かり。于時清乃遊撃將軍
 阿克高三萬の兵を帥て泉列の界入るるが。左軍衛林孔むむ
 我此泉列の地入らる。大星を其伏小捨置人本意なり。依て
 即今大星小押寄一奉小踏破んとあり。其準備せよと命じ。林孔
 練て曰。大星小墨たりと。虫山水を左右小緊要乃名城をる上
 守将函輝ハ攀會韓信が智勇兼一老練の将なり。今彼と戦ふ
 多く兵を損むる許也。勝利を得ん更覺束なり。惟并論小巧なる
 者成銳客となす。利害成説て降しむ。刃小鮮むとて大星を得下
 と止む。阿克高怒て曰。卿敵の強をの説て我が軍威を損む。終

是。我三萬の軍を領し遊撃乃任を受。豈二人の函輝を怕む。銳客
 の舌を借人。林孔曰。將軍自己の勇成恃む。敵を侮り無謀乃師
 をかり。更勿き事小臨で懼む。策を用ゆ。ハ聖人の金言なり。惟
 銳客を用ひて敵乃虚実を探し。降むん。其時謀略を定めて
 戦ひむ。尚顔を犯して練多を。阿克高女もまむ。自三軍を整
 点し。大星を臨て進發と。函輝を韃乃游撃軍三萬騎あり。向ふ
 下り兼て向者成以て探し。知れむ。精兵を帥て西川小出張。幅三里
 の大河の水源をせむ。と。平原のどく。備をまむ。待らけり。程
 なく阿克高が前軍一萬騎岸小添て陣を張。函輝が六千騎川を隔
 て喊を吐と發と。北軍も喊を合せ。虚実を量る。て敢て進まら
 所。阿克高ハ二陣の八千余騎を帥てまら。川面をん。小川波最

浅くして平原小異なりとて馬を乗せしと指揮し自ら雲を放ち
騎入るれど二萬の清兵我劣りと先を争ひ渡りし。函輝を千煉の
猪兵を揃へ差取雲猪矢を放つ。其前兩の降が如くなきを先小
進む虜兵的とちつて射落さる。阿克高も甲小矢を多く猪兵と
堅甲かれを裡くまぐひなきを劍を抜て飛来る矢を切拂く馬を
策て進み行林孔の後陣小在るるが阿克高が身小過ちあらんを
怖も急小進み先陣へ馳行無理小克高が馬の雲を執て東岸へ退
んとまればも連々と涉り来る味方乃勢小遮らる。頃小引退く更由
能つと前を拂く氣を焦燥所小敵方小一声號炮響や不口急上流
より雪山のごと死高浪逆卷下る。是函輝が謀計にて号炮を度と
脊く握留し塘を切落さるゆへ俄小大水至るるなり。韃軍大小

に馬を回さんとして石小蹴た水小溺る浮ぬ沈ぬ流しり。阿克高
林孔も魂を消し混鞭せて引回さんとそれと水勢箭よりの疾巨石を
流もと更鞠を傳むるごとくなれば。遂小兩將由馬の足をとれ瀬と下
る大濶小水手きて底乃藻屑とと成小なる。其余二萬乃兵も残り
水小押流されなきを屍と川を埋むるなり。翌一とりの跡なり
函輝八十分の勝利を得捷喊を上り引退ぬ韃軍の後陣小前下小
大将乃溺死とるを介れも水勢勃くして救死方便をなれ家
を表る狗乃ごとく鈍くして逃回リたり

國姓爺忠義傳後編卷之二畢

繪水國姓爺忠義傳後編卷之三

目錄

函輝使大寬嶋

征南王地を刺し清泉を得

國姓爺定大寬嶋

國姓爺紅婦を虜おとす

崑崙奴船を覆さんとする

鄙芝豹反而降

函輝主の妻子及我が妻子を漁翁おとす

函輝勇戦水死同

國姓爺擊殺猛虎

忠義傳後編卷之三

目

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 大、小、十、余、の、祖、母、等.

繪本國姓爺忠義傳後編卷之三

函輝使大寛嶋

且説函輝ハ阿克高が軍を廢せしめて大星小回おほせいのくわいの後五百騎の兵を帥しゅいて思明しやうめい列りつふ至いたり國姓爺くわんせいや小錫せうしやくとて曰いわ臣囊破しんなんぱの計策けいさく小故せうこて阿克高が二萬騎を溺没おぼろし。是去こゝろりなかり阿克高あきかう己が勇ゆう力りきを練ねり卿導しやうだうす戎しやうも用もちひがらふ依より。韃たの先鋒せんぽう安大人やすおとなを是こゝろと等ひとししと悪来あくらいが力ちからある上うへ智ちもまゝ深ふかく。百姓ひやくしやくを安撫あんぶし秋毫あきごうも犯おさざどとるふ依よて小墨せうぼくの郡主ぐんしゆ志しを韃た小傾せうかやうけ密ひそ小内うち焦あせせる者もの女め々々と況いはや山野さんやの北軍きたぐん小歸順せいかいじゆん。惟ただ南みなみ函うをくわり八王おうの鎮ちんふを以もつて。百姓ひやくしやく髪かみを剃かどと今いま韃た軍ぐんの患うれひととる者もの八思明はつしやうめいのとなれむ。如何いかんもとて攻せ麻ま非ひ人にんとちかりふや北京べいけいよの援えん兵へい南みなみ京けい小入せうにりどとて直ちかちち福ふく列りつふ至いたり。猶なほ東南とうなんの風かぜ吹ふくく小敵せうてき

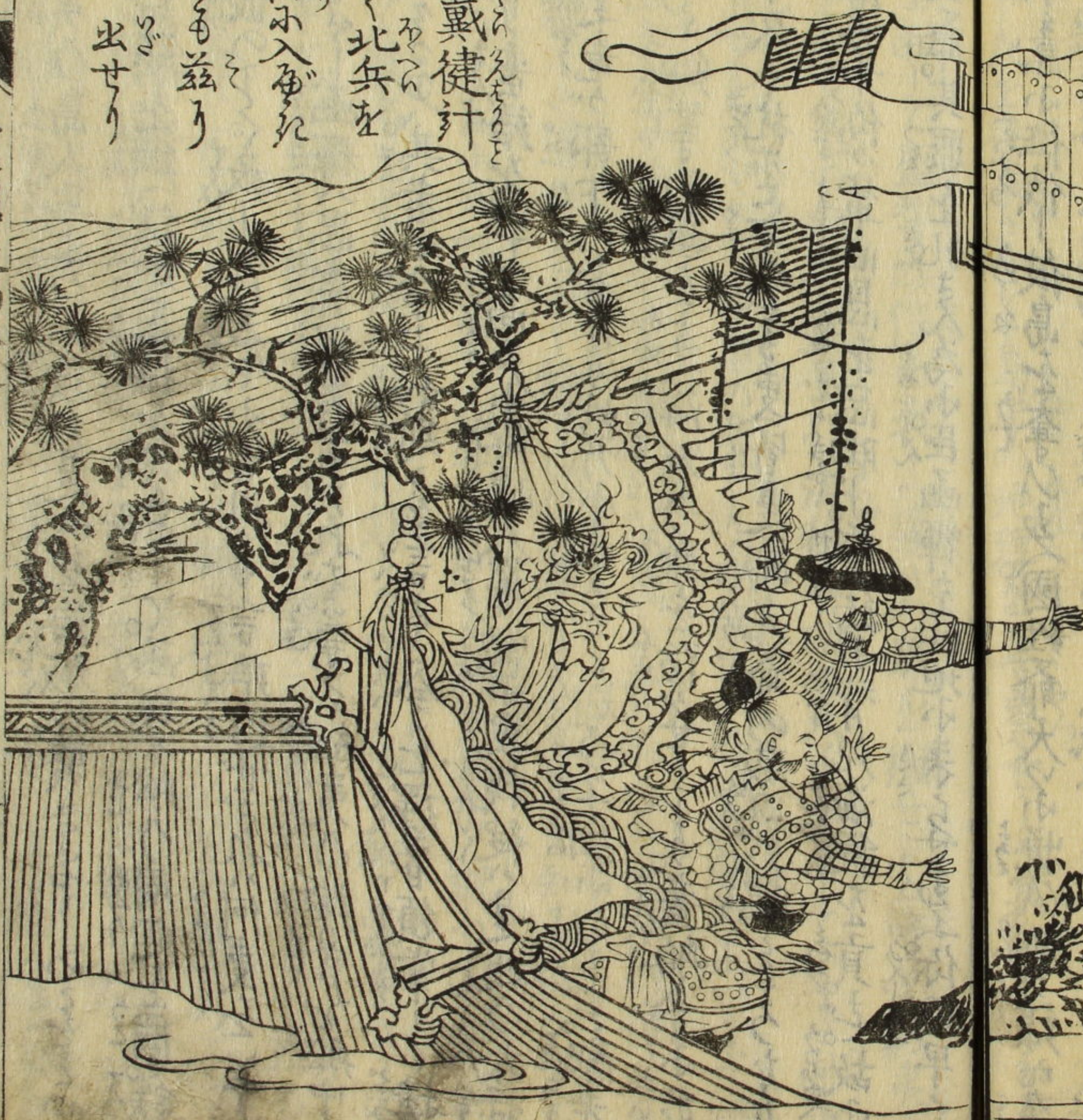
只後傳後編卷之三

一

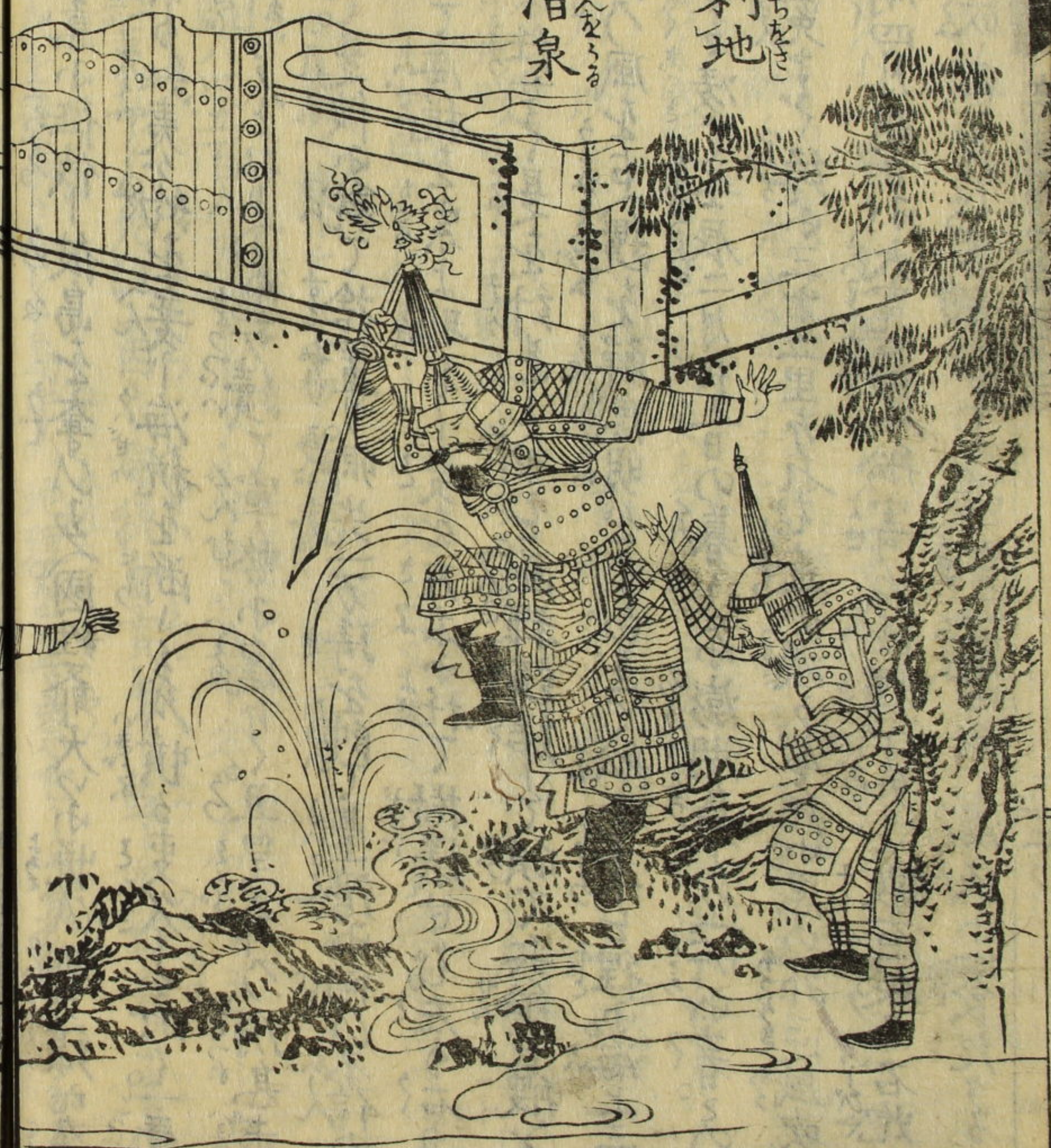
の兵船著岸せざる日は然も味方兵糧矢玉を十分貯根強
 して戦いどんを叶せざる。臣窺ふ所の大寛島（臺灣）の紅夷近年貢
 物を思明へ献らむと老大爺（鄭芝竜）の約小背たり。王是を名し紅
 夷を征伐し大寛を奪て島吏を居糧米大藥を運送させむ。大
 小軍用の助をかりし抑臺灣中華の正南ありて周廻百
 余里土肥地暖ふして五穀年々二度登る草木盛なれを庶民小農作
 ころ小糞土を用ひされもよく滋蔓し又紅夷の賈船東南の貨
 物を聚め日本へ渡りて交易を其利潤量多しと始り紅夷彼嶋
 攻取し時ハ四百人小過さるも今已ハ五千余の戸あり王も一度
 征せむ紅夷たたらた故小因り海税を貢せし然して後親く音信
 を通し人を往來させて島中の地理を善察せし其熟しむるを

待く不意小征伐し彼島を奪ひ之國姓爺大の悦ハ卿が謀を
 てし余の紅夷が約を棄し海税を断し其憤る吏久しれむ一度
 其罪を糾さんとかりども折續て軍勢小違なく且皇爺の消息未
 小知されむ是彼小就て捨置り卿先一万騎を帥て臺灣小向ひ不信の
 罪成責て海税を索し耶も吏を左右小托て擬議せむ。左も右も
 卿が意小任せし是を計しと命と函輝領緒して頃て兵船百艘と
 艦ハ西北の風を占し纜を解思明をたのまて船を走し程ハ海上三
 百里を安々凌て壬辰二月廿五日の暮る小澎湖島と一所小著るの
 地より大寛まぐ候小三十五里なれむ直小渡り候れ小思の外逆風吹
 はるれ漸四月朔日小大寛島小船寄ぬ函輝下知し數百挺の石炮
 を二舟小放しむるれむ其音百千乃迅雷の震が如く海底小響れたる

是ハ
 二の卷戴健計
 を遺す北兵を
 傷る條小入る
 園なれども茲り
 出せり



征南王
 祈天刺地
 得
 清泉



小紅夷乃島人等大小孩兒。是必然海賊の襲き。ちり小こと心
 得。函小兵船を調へ鉄炮器械を用意して。函輝が船の周廻を囲。鉄
 炮を霰のこく放。けり声々小言れども。言語通せざれば何更を以て
 中。由多き。一函輝ハ思慮深た者たれ。兼く紅夷乃譯官と船中
 小召連なるゆ。其者小命。如斯々言よと令と譯者領掌して樓
 櫓小上り。垂絡を以て高声小。你嶋人等。慥小。我徒ハ是明の大將
 軍。鄙芝竜が部下の者なり。此所小来ること。別乃子細小。あ。鄙老
 爺。小。卿等小旗をよ。海寇の難を防。せ。より。垂船小。於
 て。恙。く。久。く。枕を安ん。む。更。皆。是。鄙。老。爺。の。威。風。小。據。と。ろ。ろ。な。り
 然。る。小。近。年。你。が。輩。旧。恩。を。忘。脚。一。誓。約。小。背。た。海。稅。を。貢。む。故。小
 男。國。姓。爺。其。罪。を。糾。え。ん。為。小。臣。函。輝。を。此。地。小。来。ら。せ。よ。你。們。早。く

貢物を獻。て。盟。誓。の。信。を。表。し。昔。日。の。罪。を。謝。せ。よ。と。呼。つ。る。紅。夷。の
 通。釘。を。以。て。答。て。曰。我。が。此。島。乃。海。稅。と。明。の。天。子。小。貢。し。て。い。ま。鄙。子
 龍。小。貢。せ。む。況。や。去。る。甲。申。の。變。ト。り。明。朝。已。小。比。北。朝。の。王。い。ま。海
 稅。を。徵。む。余。が。嶋。中。今。ハ。本。國。に。云。小。屬。と。賈。船。乃。往。還。何。乃。憚。ら。有
 べ。た。一。函。輝。と。通。辭。を。以。て。繪。て。曰。你。等。い。ま。文字。を。知。む。你。が。船。小
 なる。旗。乃。上。面。小。飛。虹。將。軍。と。記。せ。し。ハ。則。ち。鄙。老。爺。が。號。小。して。四。海。の
 海。賊。と。く。其。名。を。覚。へ。飛。虹。將。軍。の。旗。を。ん。ま。を。怕。て。敢。て。寇。を。ら。ま。ず
 是。你。等。が。安。寧。を。得。る。所。以。なり。況。や。我。が。主。國。姓。爺。ハ。明。帝。の。緯。乃
 一。字。殘。忝。多。し。皇。爺。を。守。護。し。て。北。韃。と。威。を。争。ひ。勢。ハ。破。竹。の。ごと。く
 福。泉。思。明。乃。緒。列。を。回。復。せ。よ。你。等。拒。く。海。稅。を。獻。む。ん。嶋。の
 人。民。一。人。も。殘。む。と。屠。殺。せ。し。とい。を。函。輝。自。ら。樓。櫓。乃。上。小。頭。を。出。眼。と

瞋せ戟を横とてぞ睨々。其身材九尺許小して西眼鏡のどく半白の虎須針を植とてとく。迎ふとさあう天神のどくなれど紅夷大い恐怖し退り高議をなす。税金數百兩を捧て和を乞函輝が瑠余延平王の使者より島主我小後て思明の本府小往自海税とバ献せどとさうとん余敢て船を退どとら紅夷の理の至極なれど最と信伏し函輝を城中緒ト恭々く款待を部下の徒はる毒害を怕ると魚函輝を物の屑とせと飽と肉を喫酒を飲で辞を多所なり。斯て紅夷八順風を占て四月中旬小蛮舟二艘と船し税金玉帛を具函輝が船小隨ひ波濤を凌て思明小着岸と函輝陸小上りて國姓爺小謁し有し鎮末を結なれど國姓爺大い悦ひ重く函輝が功を芳ひ紅夷を船小留く種々卿良態と時小函輝八國世父耶おび五府の將軍六部の副將と高議して曰我大寛小至り物色ととら小嶋の周廻百里とハレとも実と三百里余有ねり山秀水清く風土甚佳思明小此せも三倍まの地なり。二十万の軍彼所小色し時を待た恐く八萬全の策なりと周全紙が禮函公の論理ありととら。王と彼島を奪ひたを士率逃窟の據を得敵小臨む時命を捨る更を思つと英氣自然撓人り戴徒公羽天祐が曰此議恐く八迂遠只紅夷の五小来ると幸なり氣く是を録し虚小乗とて大寛を奪ひ根を固して後北兵と雄雄を争くこと善ま。國姓爺衆議を中て曰緒將の言各々理あり但今島夷過を悔海税を納ね然る小是戎殊し其嶋を奪へ更不仁の至り小我是を為小忍びと函輝と曰王何を婦人の仁をよ

船の船小出日本刀を是と拔擣り置る島主を曳出して一刀小斬る兩
段と方を島夷是を刃とて伏啼泣するを猿の子を奪ぐとて
小身林六天むろりかろ婦人髪赤熊のごく面雪より白たが紅の衣
の上小金皮乃甲衣穿ち濠隙より潮のさるより波瀾の上を歩み来る小
ぞ人々怪む彼を如何と尋むと通辞の夷白彼女島主の夫人ありかよ
千介は揚緒般の武技小達一島中無双乃勇婦なり将足小履と
ハ浮沓とて海中必走ると陸地を行小異かるとと答思明の兵これ
中づく敵馬敷とて一所小又績て全身墨乃ごとく死重數百人海底小
入ぬ國姓爺下知して曰彼等ハ蛮國乃掠奴也。水底を行隻奥の
と皮一所詮水戦と利あるま。陸上りて塵小せよと。一萬の和兵を先
と。残る大軍追々小陸へ上る彼夫人と島主を斬きたるを恨むい

國姓爺が船を目がけ飛鳥のごく歩む。船中小残る軍平鎧と
奉る是を刺んとする小忽ち其鎧を奪ひ軍平突殺し叫んで
うらふ公羽天祐林勝士平小下知し。只矢の下小射て取よと笠前を揃へ
て雨の如く矢種を各むを射りたり。夫人女も怖る色なく鎧
を揮て箭を拂ると秋風の木葉を散とがごとく。一技も身小けす
其早業凡人業とハんえたり。國姓爺是を刃て令笑し。絶死
女が動止る。大丈夫一婦人を討んと長者気かると。虫渠が望小任せ
島主と俱小九泉の鬼となりて得せんと。偃月刀を奉てこりあり
夫人鎧をうらと捨お込。偃月刀を身をうらとて柄を握。敵を海
中へ曳入んと力を究て曳とよと。巨石を小撃碎く。國姓爺が神カ
争う婦人乃敵とて死却て逝ると船際へ曳寄られり。此時一刀小斬

國姓爺
龍臺灣
虜紅婦



忠義伯石船卷之三

を斬る。國姓爺一点の仁心を發し、檢搦で虜とかな。時小軍艦俄に動だ出し、已に覆んとし。士卒亦大に驚た。何更ふやと。又小島崑崙奴數百人船底を押し下し居り。國姓爺亦これに渠們も無智の畜生なれむ方の強しと魚鱗とるふ不足殺も無益の殺生なり。亦捨せれて陸小上り大門を攻破と。指揮と。士卒承り盡く陸小上り大門へ攻蒐る。此より以前陸小上り思明の軍兵大門を百重千重小圃と曳々声して攻る。紅夷乃兵も命を限り小防禦し、鉄炮を雨霰の如く射出し、れを明兵是が為小傷た死する者數多し。屍を門扉と比し、疊まり。されども大軍が兵更ともせず。味方の屍を揃ふ被たて、攻結々とする内、追々新兵加れむ。今ハ紅夷も力疲て、所を戴健公羽天祐夢仲ホ大奮戦以て門乃扉とち

程小忽ち滅裡々々し碎け破きぬ。紅夷亦心むるハ猛しといふも未明りの戦ひまり。尅おむる兵糧を遣され、腕瘡力究り。防ぐ更能む。遂に持口を捨て、敗走と。明兵と雲霞の如く、城内へ乱れ入當る。幸小斬て落すと。此より所へ國姓爺軍使を以て高島小曰せらる。紅夷原我と仇なり。今國家乃為已事を得む。這島を奪ふといふも、猥り小夷族を殺害する更勿を降る者ハ絆し。逃る者ハ逃せよと。觸させられ、緒卒其意を得。逃る者ハ其依ふし拒敵者乃と討取る。是の依て紅夷幸れ命亦助り。妻子亦具して船小乘。隨意小洛行り。又島夷の内小泉列の逃民、是れ有るが。是們と皆盛を脱ぎを伏て降を乞。斯て國姓爺兵を班て、旁を休らし。島主乃夫人の縛を免し、譯吏を以て利善を統せ。本國小叙る。船を以て

送りか人時味方降む女ながら重く用ひ一方乃將師ととる魚いと統せ
るれども夫人敢て左右の辞を發せども只島主屍を見人更をたこれ小
依て其軀を尋出り子々れを夫人一目見るとより伏縛て泣哀終自舌
戎咬切て死と。三軍是を見て甲戎沾さるるか。國姓爺其貞操を
憐む島主と棺を同じて埋葬し。社乃神小祠りり。次の日國姓爺
城中乃倉庫を檢るゆ米穀數十萬石金銀絹帛山の如く積貯と
まむ大い悦び兵卒小儉賞を究行ひ戴健林勝以下命して城
を奪せ工作を始む。茲小島の中一の大方る洞ありて崑崙奴數百人
其中小穴居して在戴健是を見出り釋吏小問て曰崑崙奴ハ力強
身輕く少渠亦を城番結り歩役小當かむ如何通辞白渠們原
蠻國の山溪小生と紅夷是を捉へ奴僕として家小畜渠火中く煮

くろ食を喫む大い小肚瀉る是を換腸と号すくハ死にとこりり
畜得まむ山小へく犀角象牙を取浪小へて珊瑚琅玕をとる一度
主僕の約をわけてハ死とれども愛せども若他國の王小献むる更あは
食成断り死とこれ歩役小用ひんとまむよとも渠敢て順ひひま
と曰戴健是を忠て嗟嘆し。嗚呼崑崙奴先王の道をたむと聖賢
の書成續まむとも忠義を守る更斯の如し。是們や未だ字ひす
といふと虫我之字ひりともふ死る者なり。我大明の人民崑崙奴が
義心の平たも具かむ。天下成難賊の為小奪るまむたものを天朝
の恩録を食采花を究り大臣國家の難小臨て髪を難胡服して
虜夷の為小腰を屈まむ更會歎めむ如むと怒涙小袖を漫り
立回て國姓爺小斯と告むれを國姓爺も崑崙奴が義心を感じ敢て

害及加部下の下官亦命を傳へて崑崙奴を傷或害する者
あらず決して死刑を免さと觸れとり多しより士平亦敢て崑崙
奴を犯す者あり是を去らならず崑崙奴を義の徳なりと

酈芝豹又而降將

却然思明亦國姓爺が叔父酈芝豹留まりし北朝亦えんれど
招撫使安大人何年此虛亦乘り思明を攻取んと思惟を疑しとり
或者告て言はるは降將黃獲龍を原泉列の産しとり酈芝豹
とハ莫逆の友なり渠亦謀を授けて降を勸めらし思明ハ亦小
血塗どとり取はる一とり小を安大人亦悦び即時亦黃獲龍と
招はりし曰く足下酈芝豹とハ旧友なりより亦若渠を勸て降しとり
渠亦重く用ひとり曰くれは護龍大の悦び一儀亦及とり承り

暗に思明列小至りて城門を叩く監平是を処めとり護龍曰く
余ハ酈將軍の舊友黃獲龍なり尋問せん為小来まり此旨を通
せよ士平亦と酈芝豹亦斯と達と芝豹亦審からし旧相織の護龍
かれを即時亦城中に迎へし也黃獲龍亦來る情を述て後曰とりハ
足下何を天の期を察せとり独り思明を護り兄弟の義亦背や
今酈老爺北京の賓客となり也尋問清王の恩を感ず恒亦足下亦叔
姪の攻戦の為小軍民を困むとり歎かれし早く志成改め和を乞
て天下亦安靜を量し芝豹亦曰く我と是明國の臣何を虜王に降
らば護龍曰く酈老爺亦とり既亦清王の睿智天の縱せる君小とり
萬民を撫る妻子の如くならんと信伏せり然る小足下亦清王小
弓矢彈を清の仁慈かるも一朝怒を起して酈老爺亦死を賜まま



崑崙奴等
くろがらう
くせいざうのみを
國姓多耶
くろがらうのみを
船欲
かつす
覆



しれふあつとて然るは是兄敵とるふ比くつとて且國姓爺勇くとも
繞り一列の勢を以て争く天下を帥るの清も勝利有るは清より察し
て遂に更勿き芝豹が白余と降を清王何の封爵有るは護竜其
時袖の襪より一鈕の金印を出し足せり曰是即ち安平伯の封ありて
泉列總督の印かり足下と降を此印を授くを王命なり芝
豹の元來芝豹の性なりを今紫泥金印を見て忽ち貪戻の意と
生し密に耳結て曰斯のこくかれを余清朝降るべし然れども函輝は驍勇の
老将にして其心敢て量ぐ足下先取り假し軍勢を差向思明と攻る
体をかり余其間將卒残む一味を函輝防戦せんを我内
應して北兵を城中へ引入軒く函輝を討取速に降るをいふは護竜
悦び猶本謀計を示し合せ別を告て取りたり是より配芝豹を時々の

城中の兵卒は専ら北軍の號炮を待函輝は夢中を夢中と知
む大寛の消息を如何と心ふ案じ時正ふ冬の初めを殊に海風
しれ地の大令を嚴し遣卒を叱り厲し用心を專らふと然るは國姓
爺が書の手紙密に告て曰去ぬる頃城中に老将あり配叔爺と密に
數尅して取りたり其後芝豹叔爺毎夜寐むるを將卒を聚て何事
や高議あり是は何故と問函輝眉を蹙りて曰賢夫人此事を決
して他は告む更か余よく是を探り密に探りしを密に探りしを
一者、黄護竜なりと告る者あり函輝大に疑は渠は渠は配芝豹が旧友
今清朝へ降るを察するは渠來つて芝豹も降を勧めし由は老賊國
を賣入ると成る如何もして證據をとる芝豹を誅せんものと専ら
其隙を窺ひし城中の士卒皆芝豹を誅せられて清朝へ降らん

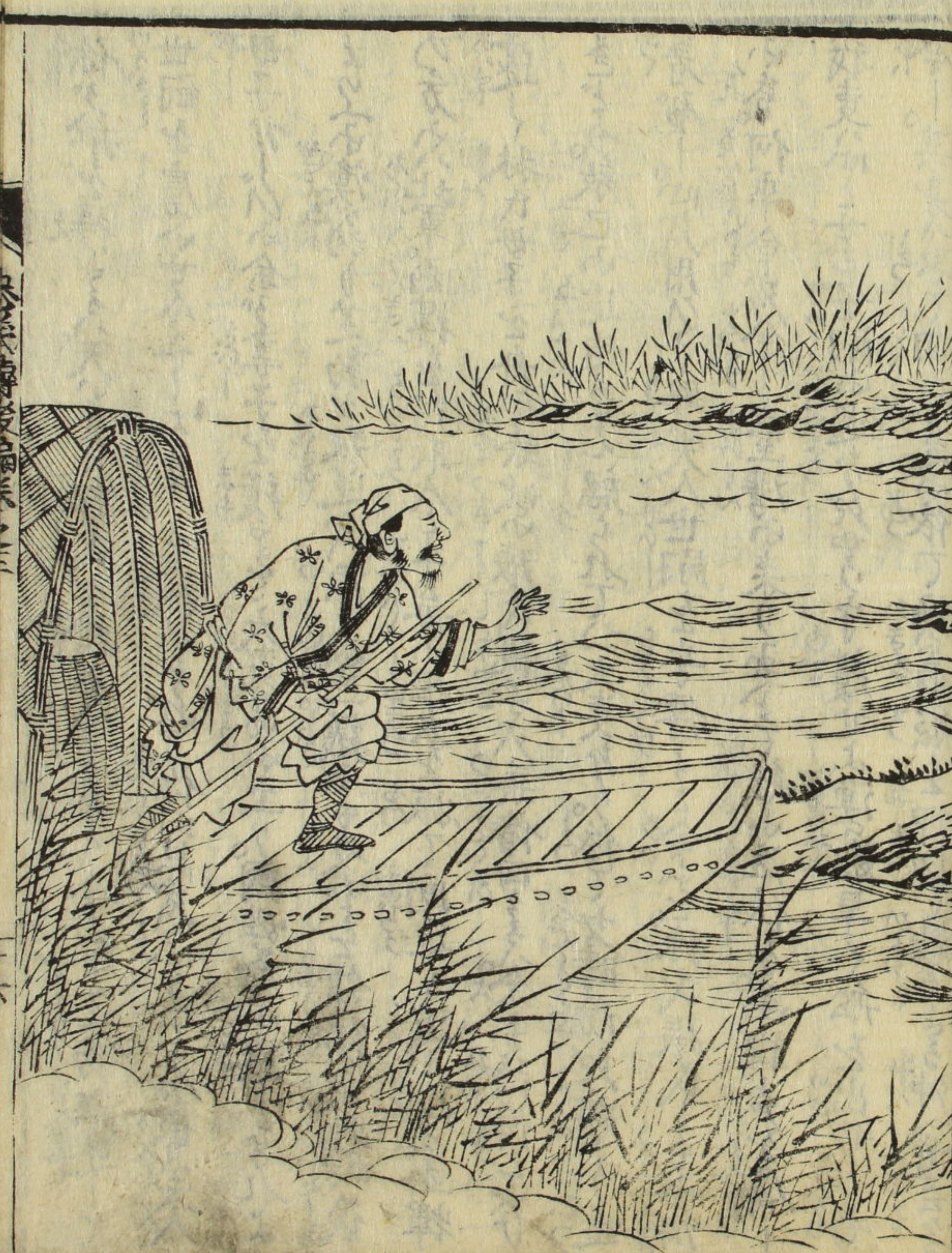
かりひききど敢て函輝の心を釘さし。是は因り敷日空しく送ふ所り
 一夜三更の頃運卒遷り走り来り俄に海上に敵船多く漕つぬ。海
 火駈くいと報ど函輝甚く發死を早く茲に至りて急小士卒は
 點檢せしむ。早拔くお落行て百騎の過む。惘果て有る所。國姓爺が
 妻の林氏嬰兒錦舎を抱たり喘々蕙きり。酈叔父は小妾と錦舎を害
 せん。劍を奉て来りて幸して避て来り。是は何とぞ死して雨を
 泣伏する。函輝是を皮て怒氣天を衝毛髪悉く逆立。眼小血を
 灑れ。罵て曰。芝豹老賊。惡逆何ぞ茲に及や。是よく今擲殺し。天罰の速
 なるを感んを願ふ。錦舎を懷た林氏を扶て城の後へ走り。往芦間り
 繫たる。沙船の裡に母子が忍を各走回て甲冑披れ掛長鎗を提
 酈芝豹を刺殺し。眼を賊て尋る所。函輝が妻の張氏五才の男

子戎抱れ逃来て夫を噓と行合。是は我が夫。何國に往ら。我身は如何
 なるに伏す。泣を。函輝を怒し。芝豹老賊。及忠せり。余渠奴と
 屠殺せんと延平王の顔有て見ゆ。城の後なる沙船り賢
 夫人が。び小令尉を匿し置り。你早く彼船に往守護せよと云。捨て
 奔馬乃如く走り去。張氏漸起上りて背を顧み。早敵間近く来
 るとんて。炬火の光天を焦せり。張氏大の周障して或は走り或は
 城後を臨て走り行る。且銳函輝は芝豹を刺殺し歩軍小紛れて
 窺ふ。曾て遭む。城中の兵は乾炮を響し。仮小守禦のてを
 かく。千時酈芝豹は質の為錦舎を憐れ捉んとせし。林氏早く逃
 去り。力及び守城を出て。護衛小逢迎接して城へ入ると。已先小馬
 を歩せ来る。函輝は猶も此所。彼所。身を潜て尋る。今芝豹鉄

の盛成項丸錦の袍を穿て馬に進み来る。怒気心頭より發
 リ鐘乃如た声ゆく國を賣老賊天罰有を志らむと叫び歩軍
 の中より躍り出長鎗を取伸芝豹が右の股坪をささと撞平煉と
 いひ無復の怖力なれど肩尖やく貫丸一揮さく刃上るめを憐む
 ぬ一郵芝豹十間をうり船が微塵も成て死しりりり。獲竜大い
 孩たがら兵卒の令して渠奴討取しとよおと部下の者我討留へ
 殺進と函輝ハ死を寃され公益とて退るを縦横小鎗を弄敵ハ
 當る此鎗先向者命ハ全する者なく忽ち二三千人突落せん戦慄て
 ちろと散獲竜ハ其奮勇ハ怕き馬を鞭て敗走と函輝是を追
 へとせしが屹と心付賢夫人世耐ハ如何とて俄ハ引回一城後乃沙船ハ
 池着ヨルハ寒風肌を斬てくたれを錦舎ハ函輝ハ見ハ声を放て

泣叫を林氏張氏泪がらる賺一居り。函輝其安睦を悦び偕曰
 反賊郵芝豹ハ鎗ハ刺殺しれども味方残と敵ハ降なきハ維ハ身を
 寄人方ハ此所ハ居ハひて遂ハ敵ハ擄とかり也。此
 方ハ渡り也とて拵る若原乃中成二里むるも導丸洲乃前ハ出
 せれども船ハ氣ハ逝去人更ハ能く長嘆して々々々。忽ち二艘ハ
 小船来リ一人の漢公羽立出。然聲言劫ハ六函將軍ハあらむと問
 函輝輝リ你何が故ハ我を知しと答む漢公羽ハ我ハ郵老爺の船ハ
 介れがも將軍ハ声をまれリ安平落城の後ハ世を遊ませ漢者と
 かりハ然るハ今霄思明の本府ハ當て大光大ハ起リハ何更ハ
 やと心かると先ハ若向ハ船を停て在るハ將軍ハ歎息しあふ
 声をばさく漕きさるハ函輝大ハ悦び今進退ハハ亮ハ期ハ望と

忠義傳後編卷之三
 十四



函輝臨 のきり
 難 のきり
 國姓爺 のきり
 妻子及 のきり
 我妻子 のきり
 託 のきり
 漢翁 のきり

忠義傳後編卷之三

你が船を得て、天いまだ、酈氏を捨て、今酈が豹を殺して、
 世嗣を虜かせんとせしを幸して救ひ、これ、你曰、我亡心、
 母子が、余が妻子を護りて、大宛島小至り、國姓爺小渡り、
 といふ、漢海も、芝豹が、殺送、我、怒、一、儀、小、及、
 の方、北軍、函輝を、射取んと、手、毎、拒、火、を、振、て、
 遠く、林氏、母子を、舟、小、乗、次、小、張、氏、親、子、
 まで、敵、已、小、追、迫、ま、怒、ら、れ、て、大、丈、
 着、登、し、心、然、用、ひ、賢、夫、人、世、嗣、を、守、傳、
 小、昏、何、事、命、全、一、臺、灣、小、来、り、
 我、妻、心、と、世、嗣、小、過、り、守、護、せ、
 令、其、身、取、て、回、と、是、小、依、て、
 函輝、勇、戦、而、水、死、

斯て、函輝、林、夫人、錦、舎、我、妻、子、
 初、を、操、て、遠、小、潛、行、
 十、里、向、小、充、満、
 騎、を、り、
 変、う、あ、
 ひ、く、
 の、者、
 傑、
 函輝、勇、戦、而、水、死、

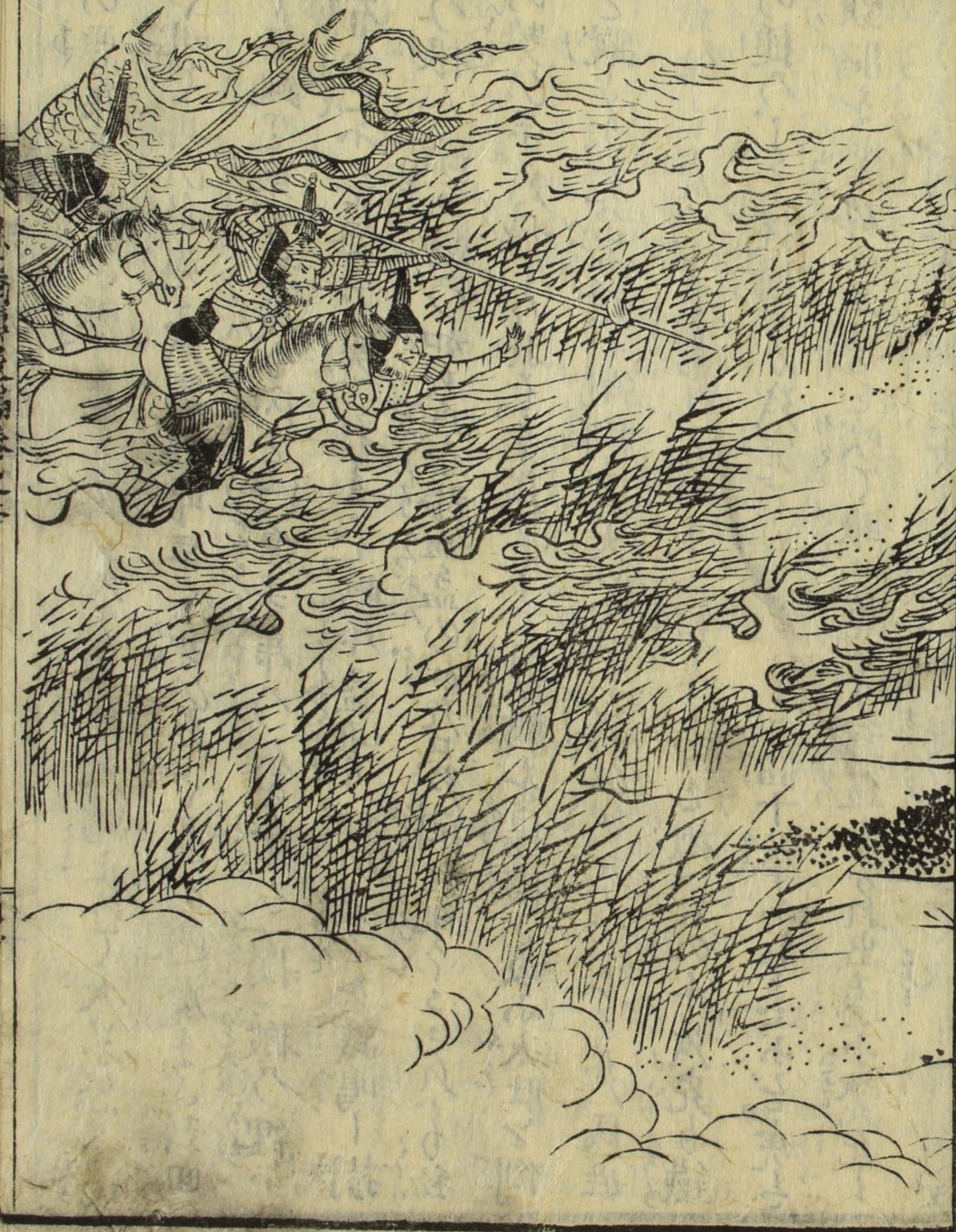
故山首を振我數百度の戦場臨めし赤い平の立者を人んと豈
 入の函輝を怖入余う一鞭の討殺を人よと廣言馬一拍りれて果
 出鐵鞭を多くと揮鳴一六撃と撃てく函輝ハ跳立か
 是を迎西雄一往一果して戦こ六十余合土故山が鐵鞭ハ流星の鳴が如
 く函輝が長鎗ハ閃々電光の似てく函輝ハ透向の是を人北
 軍酔るがこく汗を握て看る所函輝忽ち一声叫びて土故山が胸板
 を下と刺空を望で列上るよと刃えたるが寄て土故山が馬の上身と
 躍してゆらりと跨る其狂捷飛鳥のごとく北軍大に突突たか
 土故山が部下の五百騎主の仇を復さんと一斉の喊を發て進追函輝
 些も動ぜざ馬必死して多勢の中割て入前後左右の突伏を血を
 上て悪戦さる程小討り者數をさるほどさる多勢同に麻痺

まど木故山是れ入るまで六百余騎一人の函輝を鉄桶のて取囲
 箭成射る更雨のごとく些も函輝更もせと東の菟西の池で田と
 撞破り人馬を殺さるが殺許といふ數をさるほど此千もまら粉の如く乱
 まど函輝ハ甲の義の毛のごとく箭を折けあがる精神女も撓むして
 獲龜が勢小渡一合散る小突まら遂に鎗を突折らる柄をさる
 近付者を撃程の一撃小三人五人撃殺され此勢も蜘蛛の子の散が如く八
 方散乱さる黃獲龜函輝が驍勇小慍と果兵卒小下知を傳へ枯草の大
 を掛させれ海風をげて須臾小爆々と燃えさるも廣た洲に猛
 大元満より鞭軍是れ機を得て鉦鼓を鳴り鬨を發て威を示す函
 輝ハ火氣小蒸まら堪る海中小馬を乗入れ木故山千騎を帥く
 燒原を歩越鎧をさる散る小射る函輝持る鎗の柄小く龍箭

我拂ひたり大音の延平王が臣函輝君忠の為小海中死を。韃賊死
首取て廣言とる。更勿まと呼り。劍を抜て吐小突る。木故山其首と
取人と海水小馬然乗入る。小俄然して。逆濤起り人馬とも漂没し。底
の水層たり。ふり。函輝由此濤の為小漂ひ。遂小海底小沈る。を
北軍函輝が首を取。更能と。敵一騎の為小兵年。若干を討て。二人の大
將。我之失ひ。れ。惆果たり。思明の城中。小合て。勞を休め。合戦の顛末
を北京へ。進む。安大人。是を以て。李成泰を以て。思明の守衛と。獲
龜を副將と。て。嚴く海口を守らせり。

國姓爺較撃殺猛虎

延平王國姓爺。大寛を定め。城を築た。島夷の心。稍懐た。思明へ
此旨を告遺人と。おり。冬。の。り。ひ。あ。く。東南の風吹され。を。已。事。を
得と。歩過。一。多。小。城。居。の。工。作。預。り。畢。れ。是。を。點。檢。せ。んと。戴。健。夢
仲等數人を將て。新城。小。到。り。子。細。小。檢。て。後。城。後。なる。山。成。望。る。る
小高嶺。雲。成。凌。た。頗。る。峻。峻。の。名。山。を。れ。島。人。小。名。を。向。小。大。寛。弟。一
の高山。天。柱。嶺。ゆ。と。答。依。て。數。人。と。此。山。小。登。り。る。小。巖。石。峨。々。と。て
羊腸。の。路。雲。小。入。と。思。は。り。遙。かり。山。乃。羊。腹。小。至。り。大。洋。眼。下
小。有。て。遠。近。の。佳。景。一。望。小。盡。矣。小。塵。外。の。仙。境。小。入。心。地。せ。り。れ。王。臣。大。小
真。小。入。登。臨。出。世。界。證。道。盤。虛。空。を。今。古。詩。を。吟。下。猶。山。深。く。登。り
行。所。小。忽。ち。樹。林。さ。く。と。鳴。一。頭。の。老。虎。躍。出。り。身。の。大。半。乃。如
く。鏡。の。如。し。眼。を。瞋。し。り。かり。吼。て。先。小。立。たる。國。姓。爺。小。起。り。る。小。を。戴
健。夢。仲。以下。大。小。該。た。主。小。代。て。防。人。と。各。劍。を。把。て。鬪。ぐ。我。國。姓。爺。手
めて。制。し。徐。小。衣。の。袖。を。ぎ。て。猛。席。小。向。ひ。一。拳。小。頭。を。啗。と。擊。つ。一。ゆ



久き勢い
函暉大
傷北軍
水死



忠義傳後編卷之三

十九

て曰、函輝ハ智勇兼備せし豪傑百萬の勢を以て困むとも蹴破く通
 人こと朽さる木を碎より安んずるを死何なる故より自截し水小入
 然も身小笠前を許す折るけし羊痛く戦ひしと覺し。是を以て彼を
 抄りて余が此島へくるを虚を窺ひ虜兵思明へ攻寄り逸真兵糧
 矢玉二年の貯ある上三萬の兵有て函輝是を指揮せし敵大軍は
 とも容易に攻落し得ぬ死あむと。その何故小戦死せしやと不審吏
 小暗ゆくも哨船を遣て見聞せしやと思ふも玄冬の時節して東南
 の風をえを絶とぬ死方便なく先函輝が屍を仮小強り春は疾て
 泉列乃郷里小葬んとり其日より二日立て。又海上一艘乃渙舟漕
 きよりぬ周全斌が部下の兵卒是を檢る小林夫人金舎なるびり函
 輝の妻乃張氏母子を乗られ大の強死伴と周全斌が陣小いり

全斌も再び強死子細を問く初て思明の妻函輝が戦死の故を知即同
 小府城小伴の國姓爺小對面させり。國姓爺林氏錦舎死んて後然
 して其來歴を問林氏泣て告る。鄭叔耶敵と内通して乱を發し
 錦舎は虜めせんとせし幸とて逃る。函將軍小技ら張氏と俱小城
 後の汝船小身死忍びり小時許ありて函將軍鄭芝豹小對得られ士
 卒も敵小降させし。身を倚る家カ。此所へも頓て敵追迫し先彼
 一河へも汝船を出若原を合て洲崎へ出されも船をえを身を逃れん
 ちもやなく後より敵兵追迫り進退已ぶ窮りし一人乃渙舟船漕
 きよりぬるゆは是小托して妻母子張氏親子小船小乘大宛へ送り届
 せし。命も内敵早近付を函將軍小引回して敵小向ひあへし死生と
 ちも妻小渙舟の情ゆく追々波濤を凌が幸とて此島へ着

侍ねと染りぬれ。國姓爺机を噉と撃。諸叔又の逆意小よりて國
 を失ひ柱石の巨成死にさせざるを安らふ。怒の眼小泪をこ洒らふ。又
 歎いて曰。函輝身死なから。魂魄猶忠成忘れ。此島へ流るるを以て
 かりて。妻子の無異小著るるも。渠が一念の産護小因か。下し。然るを
 人小絶たる。漢舟數人を垂て。數百里の波濤を安ら渡る。吏を得。死
 海路を導し。燈の漢舟が船小。二日先きて。軀此島へ流る。其折る
 の。吏成結。使小。ふ。林氏張氏。書を放て。泣悲。五部の將軍六部の副
 將も。已々妻子成。芝豹が為小。失ひ。を悼。悔。涙を落さぬ。ハ。ナリ
 たり。國姓爺。洞を松ひて。曰。我此島成。定。中。今。函輝が。智小。ナリ。今
 かり。を。兼て。芝豹。送。る。命。を。先。知。せ。し。故。か。る。人。且。芝豹。を。生。置。む。
 生々世々の恨か。成。た。ぬ。函輝。矢石。を。犯。して。是。成。射。三。軍。憤。怒。と。解。
 更感。た。ら。ふ。余。り。有。宜。く。此。島。鎮。護。の。神。と。崇。む。命。と。建。
 て。函。將。軍。の。廟。と。号。し。妻。の。張。氏。を。往。國。孺。人。と。稱。稚。子。を。守。育。し。
 諸。漢。公。弟。小。數。の。金。帛。成。と。永。く。大。寬。小。留。る。命。を。下。し。成。勸。え
 ども。固。く。辭。し。別。を。告。て。再。以。漢。舟。小。掉。さ。り。何。國。と。も。な。く。漕。去。り
 其。後。國。姓。爺。緒。將。を。聚。ち。高。議。と。て。曰。我。已。小。思。明。を。失。へ。此。島。と
 根本。と。時。々。小。福。泉。の。地。を。恢。復。と。す。と。島。乃。名。成。東。寧。と。改。
 む。是。自。己。海。東。日。本。の。産。物。を。東。寧。の。享。成。用。る。な。る。下。し。戴。健。公。弟
 天。祐。口。小。捕。王。冬。の。中。より。三。軍。成。調。煉。し。春。小。到。を。思。明。を。攻。取。北。軍
 と。雌。雄。成。決。し。多。く。と。勸。む。國。姓。爺。並。り。と。是。より。晝。夜。兵。卒。小。進。退
 を。習。へ。軍。戰。の。用。意。を。了。し。專。ら。春。小。至。を。待。小。り

國姓爺忠義傳後編卷之三畢

繪本國姓爺忠義傳後編卷之四

目錄

國姓爺謀討李成泰

國姓爺奇兵李成泰を惑と圖

國姓爺幾兵攻宗明

國姓爺鎮江城を攻取圖

國姓爺火計陷宗明 同圖

國姓爺橫擊賦詩

國姓爺拒練向南京

國姓爺架を横て詩を賦と圖

國姓爺神力破城門

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 國姓爺 and 宗明]

古今圖書集成

を設け攻懼し休めて一旦兵戎班り海口に退て屯し。暗に物押する士卒
 小謀を授て八方へ遣り置る。其夜の曉に彼間者三人乃虜兵生じ
 立回る。國姓又其者どもに懐中を搜せしむる。福列へ援兵を乞書二
 通成得り。諸其者を跨問して猶你ホガ外に援兵を乞使者城を出
 たり。不号と向ふ。三人の外にありと答。是に依て三人公陣中縛り置翌日
 上り城を攻め密に陣中小韃軍の旗を紙に写し造り世に夢仲の
 一萬騎を授け夜中遠く出。北軍の援兵の来きる体をかきしむ
 斯て準備十分調ひしむ。戴健林勝等小七萬騎を授け謀成教て城
 を攻め。國姓爺二萬中城後小埋伏し。号炮を今やと相待居る。去程
 小戴健以下思明城押寄開城發て攻む。城兵此三四日帶甲解を昼
 夜の防禦小身軀勞る。英氣挽てらんえくる。李成泰共黃護竜志る

屬して矢石を起し防如守る。叟己の尅より未の尅におよぶ。然る所小寄兵
 俄に強た立攻口退て北に向ふ。李成泰訝り何叟小やと擗り互りて
 望遠鏡を以て見る。小福列に援兵来り。とらんえ。配兵と挑し戦体なれ
 大い小悦ひ味方の援兵来り。と。城を出て交討し。國姓又耶が首を
 取て莫大の勲功を顯せしむ。下知し護竜成止。城を守らせ。自四萬騎を
 引率し。城門八文字小用せ。舊地直に弛出。配兵小近付所。配兵忽ち
 備を雀翼小變し。李成泰が兵を取囲む。是に於て奇兵をかりし。夢
 仲の紙旗紙幟を棄て。延平王配森と大文字小書し。旗を押し。李
 成泰が軍小擊てく。李成泰大に驚た。諸小配旗小購れ。りと周
 障りか。自ら三又の戟を揮て真先小馬に躍せ。雲霞の如く敵中を
 七縱八横小蒐散し。辛うと圍を切開た。弛出て味方を顧む。四萬騎の兵

口は成泰傳後編卷之四



くせのやが
國姓命
奇兵
リセのふを
惑李成
まご
泰一

八景集後編卷之四

或ハ討ま或ハ落て五千騎不足ハ討をされ夫々小傷大傷負ぬるけ
 きを逆中拒敵叶ふと思ハ府城さして弛回る後より八景仲林勝
 戴健以下鯨波を發リ鼓噪して追蒐る北軍肝心由身小添を王
 を押退親を突倒して我先おとまりて城門小着門外同よと叫ぶ
 是より以前國姓爺ハ李成泰が城を出し後不意小起て城門とち
 破リ大浪の下に攻入るを黃獲竜防ぐ吏能を周障狼狽して
 逃送を弱天祐一刀小斬て落し城中小残る北軍乃妻子女悉く屠
 殺し多一所小李成泰敗走して回り来り門外同よと呼つる外やて國
 姓爺自己指小露ま出李成泰を指し言て曰虜賊猥小我が此思
 明公奪ハ三軍乃妻子女害したる天罰環りきり兵を折死妻女兒
 成屠殺る小至る然る小猶覺さして城門を開よと呼つるハ自城中

小入り殊小伏せん為うとて獲竜が首然も李成泰が妻子の軀を
 投下させられむ李成泰大の小孩丸憫さして二所とちを部下の
 兵率ハ城已小敵小奪られも然んく肝落脚痿て曼仲戴健亦が
 勢小向ハ悉く益益脱旗を伏て降人となる李成泰今ハ僅小四五
 騎とかり路を奪て落行を林勝曼仲透間もなく追蒐遂小曼
 仲李成泰ハ一鎗小刺殺し殘兵も悉く討取凱歌を唱て入城ハ國
 姓爺ハ思明を恢復して大ハ悦ハ緒將乃功賞ハ大宴成開死く
 三軍成勞ハ是より墨茂高一堀を深して専ら守禦の備をな
 り編列の招撫使安大人ハ國姓爺再ハ思明を斬取し中て大ハ
 續死北京ハ急使を至援兵を乞て思明を征伐せんを只勅王是之
 中て使者小向ハ鄭森ハ智勇兼備せし良將なり右刀を以て案と

征せんとせん味方も多く兵を拵けし。我一針を安大人小寺(一)劍小
 血塗(二)りて酈森を走しむ。一(三)封の書を使者小寺使者福
 列(四)池田(五)貝勒(六)命(七)成傳(八)右の書(九)成呈(一〇)小寺安大人取て披見(一一)大
 小悦(一二)部下の勢十萬騎を三隊に分て福列(一三)鬼追出張(一四)して(一五)將
 數百艘の空船(一六)小旗(一七)旗を多く之海上(一八)漕運(一九)て大亮(二〇)を攻る勢(二一)と為
 國姓爺(二二)是小孩(二三)今敵の大軍境(二四)臨(二五)む有(二六)小根本(二七)なる東寧(二八)と
 攻取(二九)して(三〇)ハ叶(三一)ハ。先東寧(三二)小回(三三)リ針路(三四)を定て又々(三五)思明(三六)を奪返(三七)さん
 城上(三八)の空(三九)旗(四〇)旗を多夜(四一)中(四二)暗(四三)小惣軍(四四)戎帥(四五)の軍艦(四六)小(四七)り無(四八)大亮
 (漕)回(四九)り(五〇)り安大人(五一)是(五二)成(五三)んて(五四)手(五五)拍(五六)て(五七)笑(五八)ひ我(五九)元師(六〇)の策(六一)果(六二)る
 中(六三)より(六四)こ(六五)金(六六)故(六七)山(六八)を思明(六九)の惣鎮(七〇)して五萬(七一)の兵(七二)を授(七三)け其(七四)身(七五)と
 福列(七六)の故陣(七七)北京(七八)右(七九)の義(八〇)を注進(八一)と。是(八二)より(八三)庚子(八四)の年(八五)ま(八六)く(八七)八箇
 年(八八)間(八九)年々(九〇)年(九一)戦(九二)止(九三)時(九四)か(九五)く或(九六)ハ攻取(九七)或(九八)ハ攻取(九九)ら(一〇〇)ま(一〇一)雄(一〇二)更(一〇三)小決(一〇四)せ(一〇五)り(一〇六)た
 國姓爺(一〇七)發(一〇八)兵(一〇九)攻(一一〇)宗(一一一)明(一一二)

北朝(一)乃(二)順治(三)爺(四)日(五)々(六)小德(七)を脩(八)て民(九)成(一〇)撫(一一)育(一二)し。庚子(一三)年(一四)秋(一五)の頃(一六)湖南
 道(一七)成(一八)巡(一九)狩(二〇)し翌(二一)年(二二)辛(二三)丑(二四)の春(二五)ハ南京(二六)小封(二七)多(二八)其(二九)風(三〇)聞(三一)隱(三二)なく東寧(三三)を以
 洩(三四)すえんを國姓爺(三五)五(三六)府(三七)の將軍(三八)成(三九)罷(四〇)ち議(四一)して曰(四二)余(四三)不(四四)肖(四五)の身(四六)と以
 延(四七)平(四八)王(四九)の封(五〇)を辱(五一)るじ屢(五二)七(五三)閩(五四)の地(五五)成(五六)恢復(五七)と(五八)し(五九)今(六〇)小至(六一)る(六二)たて
 皇(六三)爺(六四)の消息(六五)成(六六)回(六七)と信(六八)かり小聖(六九)駕(七〇)ハ雲南(七一)の山谷(七二)小裁(七三)と帝(七四)ハ瘴
 嵐(七五)の患(七六)小(七七)り登(七八)遐(七九)と(八〇)多(八一)く覺(八二)下(八三)り右(八四)成(八五)る(八六)と(八七)心(八八)十(八九)有(九〇)余(九一)年(九二)の内(九三)争(九四)り
 紹(九五)書(九六)の至(九七)來(九八)せ(九九)る(一〇〇)更(一〇一)あ(一〇二)る(一〇三)音(一〇四)信(一〇五)ハ死(一〇六)を待(一〇七)て空(一〇八)く南海(一〇九)小據(一一〇)手(一一一)成
 束(一一二)て中原(一一三)の賊(一一四)盛(一一五)を(一一六)ん(一一七)小思(一一八)び(一一九)運(一二〇)成(一二一)天(一二二)小任(一二三)せて先(一二四)鎮(一二五)江(一二六)城(一二七)を攻(一二八)落
 して根(一二九)城(一三〇)と(一三一)浙江(一三二)の兵(一三三)を募(一三四)り南京(一三五)小伐(一三六)て勝(一三七)敗(一三八)を(一三九)一(一四〇)戰(一四一)小決(一四二)せ(一四三)ん(一四四)更

忠義傳後編卷之四

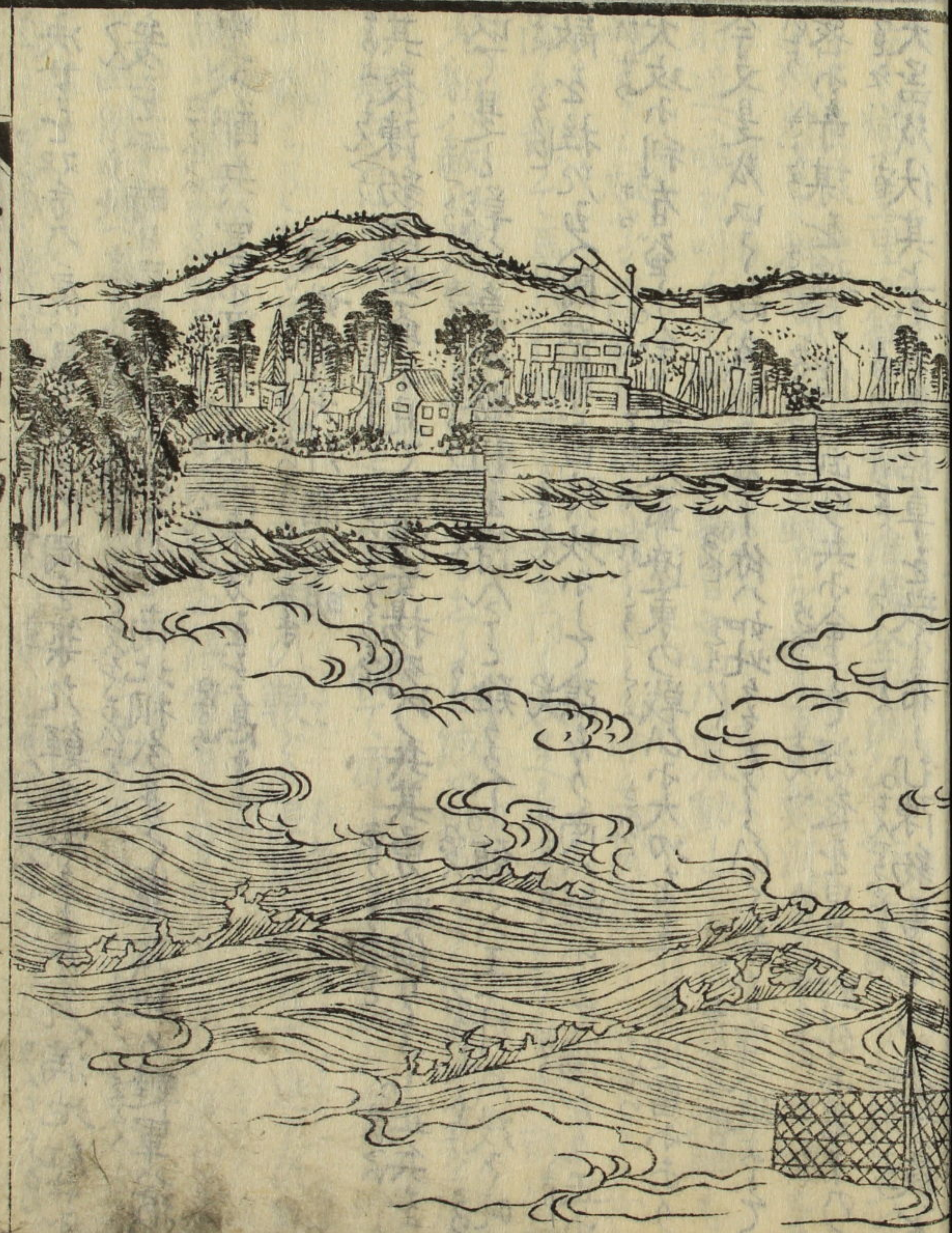
於此上列位の意見は奈何と向載健階に進み出て曰王の論甚か
街おる軍中の將をく國の産かれを金陵の地理の暗し維う卿
導成爲るは周全斌が白南洋の城を陳豹を浙江南京の地理を達
せり彼がきて五府の員を備へ先鋒たしむる國姓爺然り一且
余此度南京に向て支國家の真にふらるる大事これぞ緒將より歩卒
小至るまで屍を原に不暖と支成厭むと死を一途ゆして韓軍の百万
を慶金ふと志る志る人々蓋世の功を成りしと言をれは五府六部の
緒軍勇を悦ぶ頃く一寸ゆても敵地の進み屍を戦場の塵となり
多年の高息成報どもんと肯國姓爺六の悦び日々擇り試場
出て日々兵を調煉し進退よく熟しこれを出帆せんとして先軍令
が定む黄廷成留獲の將軍として周子錦舎成守らせ洪旭載健

林勝の三萬騎を授て東寧の居城を鎮護せしめ南京發向の緒
軍の陳豹馬信を卿導の先鋒として一番の五府の將軍二番より
出軍先行三番の正五軍四番の援勦鎮五番の宣毅六番の五兵
鎮七番の水師八番の火武九番の五常鎮十番の五行鎮十一番の
參軍十二番の旌兵鎮十三番の鐵騎鎮中軍の國姓爺後陣の六部
の將を配當已れ定りしを明の永曆十七年庚子十月の東寧
より數千艘の福船沙船小舟乗艦を解き順風に乗り數百里の
波濤を凌ぎ南京の海口崇明といふ所小着此國の大將軍李部院
副將即故山王老豹等是を守り揚列淮安盧列安慶の兵を加
二十萬騎少く固む海上第一の関なり南軍の磯隙小船を乗せえ
碇を投下し十七萬騎二舟の陸の上り海辺小塞を構へ隊を整え

此の書は...
...

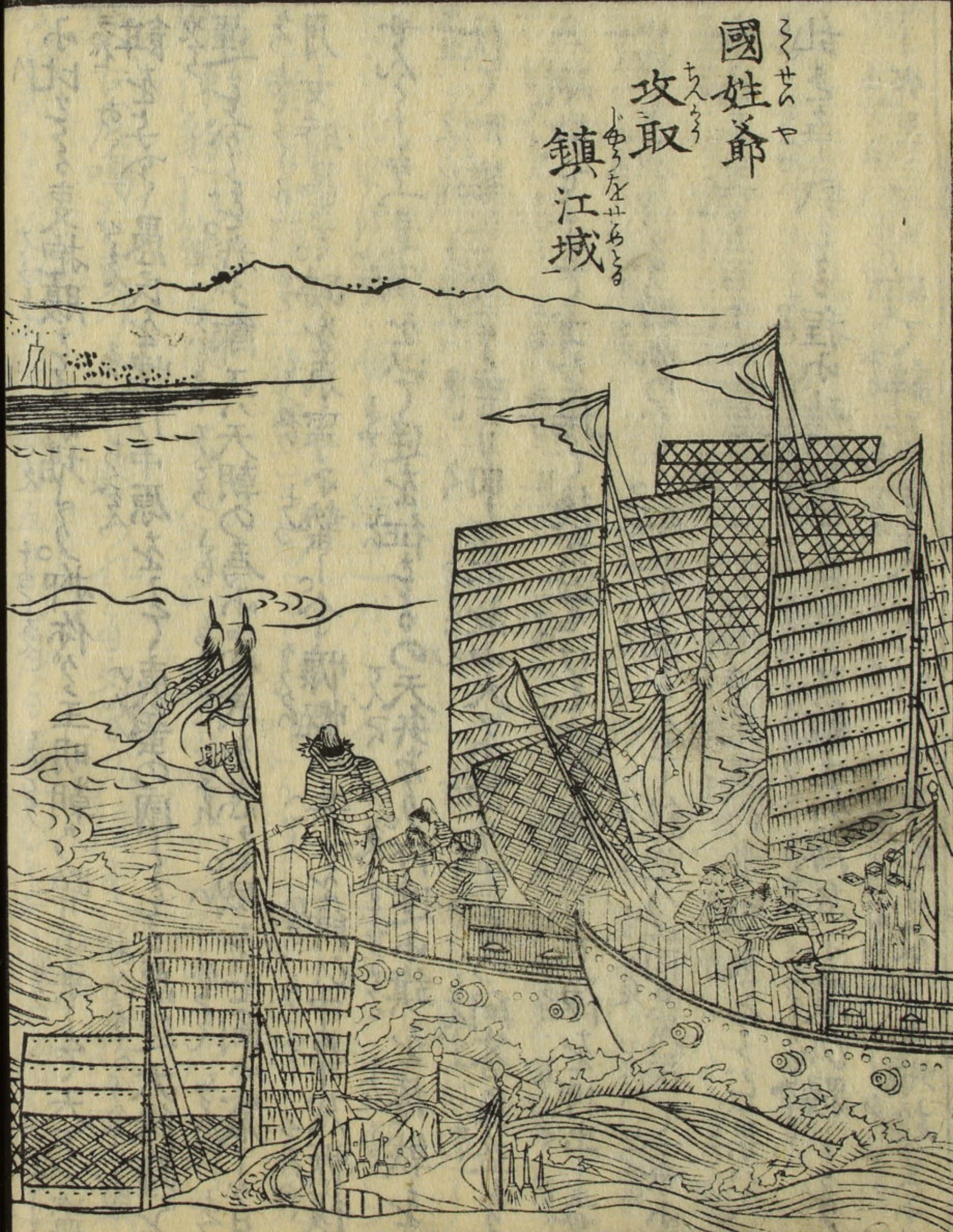
押出せむ。北軍も是を以て副将郎故山嚴小甲冑を穿て馬を陣
 外小乗出し大音小汝等無智の海賊貪て飽をもちて我頃治
 爺の聖徳も懐む。天朝の嚴威を犯し國家小寇せんとする。鷹
 斗さよ。是薪炭負て焼野を走り。石炭抱て深淵小投む。小等
 已と死を求む。愚かる。我が王の徳堯舜小則り下民を恵み。支
 子のどく敢て殺戮を好む。おれを。你們非死悔過を謝して速に
 去を拘命成助く。若猶送成。貪狼の心を維せむ。忽ち
 斧鐵首小臨。三族を亡すと。呼り。南軍の陣より先
 鋒陳豹門旗を用く。馬を乗出し大の喝して曰。不毛の虜賊何ぞ
 駄舌成鳴。支の多死や眼あれ。由文字成續。支能。我が王の旗
 の上面なる。延平王鄭森林の五字をたも解せ。て。猥小徳を先王

小比。支抱腹。と。の堪。抑。你。が。主。明。朝。の。弊。小。乘。して。天下。と。盜
 餌。を。よ。く。愚。民。を。懐。け。中。原。を。して。夷。蠻。の。國。と。する。惡。逆。天。誅。降。と
 運。と。く。我。が。鄭。王。の。天。朝。の。為。小。忠。義。を。忘。む。威。を。七。國。小。震。し。日
 月。女。時。曇。て。跡。を。東。寧。小。誓。し。今。慷慨。の。兵。士。を。帥。ひ。中。華。小。恢。復
 せん。是。頃。を。以。て。逆。を。征。する。の。天。兵。なり。你。速。小。旗。を。捲。戦。を
 伏。て。刑。戮。を。免。よ。と。雲。り。回。と。郎。故。山。大。小。怒。り。左。右。の。問。答。無。益。あり
 只。蹴。散。せ。よ。と。て。戈。を。揚。て。後。成。麾。け。ん。北。軍。鼓。噪。して。隊。を。押。出。し。毒
 笠。刑。を。放。は。し。時。雨。の。ごと。く。鄭。兵。も。函。を。合。て。鉄。炮。の。筒。口。成。揃。て。一。歩。小
 歩。出。と。其。音。百。千。の。雷。の。轟。が。如。く。兩。陣。死。傷。の。者。數。を。ま。ら。と。果。小。入
 乱。争。戦。と。する。程。小。破。煙。白。日。成。曇。せ。鯨。声。小。海。底。小。震。ひ。野。り。り
 光。景。なり。斯。て。鋒。を。争。ま。己。の。尅。より。申。刻。小。及。べ。も。雄。雄。更。小



鎮江城

國姓爺
攻取
鎮江城



決せしと双方の屍ハ累々として岡を築た鮮血淋漓とされ満地紅井ハ
幾ど干時日ハ西海ハ沈れ南北相分まじく軍戎班々鞭軍ハ城
中ハ郵兵ハ塞小回りて俱ハ軍旁をぞ息を

國姓爺火針陷宗明

其夜陳豹國姓爺ハ見テ曰淮安揚列の兵其勇壯侮りざり正兵を
以て是と戦ふ急ハ勝利を得んと難多し願くハ王二針ハ殺り此
敵を拉だす國姓爺ハ北坎ハして陰かり南ハ離ハして陽かり正兵
火攻ハ利有也余ハ老大爺遼東の戦ハ大功を立し地雷ハあり
今又是以て敵ハ敗る也你ハ如此と云々いひ敵を穿延よとて
密ハ奇謀を授け借火武の兵ハ余と深夜を冒し野外ハ若干の
地雷ハ伏其上ハ木葉枯草を散り布り陳豹馬信両先鋒ハ救と

多く爆て三里ハ程ハ撒散し準備全ク調ハれ未明より兵糧をつ
ハ城外まで押寄る城兵ハ勢を出し互ハ鯨波を發し弓鳥炮を
射違ハ喚び叫ん斬結其物音ハ山川震動して天維ハ裂地軸も
碎る疑ハる陳豹馬信と時分と倅と戦ハ屈せし時ハ
隊を乱して馬戎引回せし士卒ハ敗走する休をたす即故山王
老豹ハ敵ハ謀計ありとハ夢中も志すと城ハ逃るぞと心得味方を屬
し短兵急ハ先ハ争ハ追進ハ所ハ頓て原上ハのれを近ハせり
馬時ちじたる救ハ見テ是ハ喰ハ鞭も泥漳も敢て進ハん郎
故山王老豹此時を以て諸ハ敵ハ謀計有と覺ゆるぞ急ハ退けし
て幽僻の地ハ馬ハ乗入るハ忽進して一丸ハ大珠飛出るとハ
葉枯中ハ火移り一畝ハ煙を吐く百千の地雷霹靂ハ

忠義傳後編卷之百

大地悉く裂れて山峰の如く大珠散満として空中に散り人を紀
 一馬成裂ぬを泣叫声の遠近に震ひ正に焦熱大焦熱の罪人異子
 らど十里の江原忽ち屍の丘となり。其も驍勇の故山老豹も五射
 分裂して焼死し、怖る人も疎かり。李部院は遙小城上りりあ
 烟火をみて必定味方敵兵の奇計中り多かりと急死城に残る
 兵七萬騎成整点し。先鋒の軍成救人と城を蒐出搦ゆる人地到
 南兵十分の勝利小撮を得て陳豹馬信真先小馬成躍して殺出
 るを十萬乃兵後小隨ひ蒐合て追つ返す一挑を戦ふ北軍八萬なりと
 又も故山老豹地雷の為小焼殺されし勇気拵け自然と浮足り
 かり。南軍は勝纏る鋒先尖くして大浪の如く捲り多る小を李
 部院が勢支へる隊伍を乱し散々成て城中へ逃竄る。陳豹馬信を

とも五府六部の将等引續て城下へ攻結息成りはかと責まされも
 城兵毒箭を雨し大木大石を投下して守禦するが故南軍手肩死傷
 の者の多き攻徳て猶豫り。國姓爺此体を以て令成傳拵柴小火
 薬が瀝だ城門に積重石炮を放して焼上り下知れを大武の兵士
 心得て焼中へ焰硝をそた城門に迫着て手毎に投付る。城兵は是
 成寄付し矢石成飛して防げども南軍更にもせむ。死を的として柴
 を投る程小督時小山乃如く積上り。國姓爺今頃より石炮を
 一連小十挺を放ちられむ。其も堅固の城門碎け積上りる柴燃くと
 燃上り櫓々小焰ははるふを。城兵は防だるの周障狼狽する更大々
 かりと李部院はとも城の保がれをみて後門より趣き出るふ兼て
 南軍後門の両辺に埋伏し待候する更かれを一舟小發り立一騎も

余あまと八はち方を襲せむて責せまらる。李り部院ぶえん八はち隻せきの叶はを以もつて一丈余いちぢゆうあまりの蛇鋒へびさき戎ぶ抄しやう振び西せいの蒐しゆ東とうの弛し敵てきを討う事じ敷しをまゝと。此こゝ勢いきほひ小こ辟ひやく易えきして南軍なんぐん思おもふと路ぢを閑ひらた避さけ通とほと。是こゝ依よつて北軍きたぐん忽たちち活路くわくろを得え李り部院ぶえんを勸すすて落往おちゆ所しよ。南軍なんぐん五ご府ふの大將たいしやう乃な中ちゆうの左軍さぐん提督ていとく翁おん天祐てんすう日本にっぽん刀やいば戎ぶ振び拵しやう馬まを拍うて追お来きり。韃賊たつせき回くわいせし呼よりて刀やいばを真向まっこう小拵こしやうト斬きて蒐しゆ李り部院ぶえん大たい怒どり馬ま戎ぶ回くわいして蛇鋒へびさきを弄もす一ひと種しゆ小刺こさと進しん寄よ雙さう方ほう一ひと人ひと當あ千せんの勇將ゆうしやうかれを互あひ小龍せりう白虎はくこの威いを現あらし戦いくさ一ひと隻せき三十余さんじゆあまり合あ然ぜんる小こ李り部院ぶえんが命運めいゆんや盡つく久ひさ久ひさの大珠たいしゆ起おきりり肩かた戎ぶ抄しやうぬれり々さふと堪たへり馬ま上うり真ま送そう小落せりり翁おん天祐てんすう透すきと馬まより起お下くだり刀やいばを奉ほうて遠とほ小首級しゆきゆうを擊う落おと主將しゆしやう討うて残ざん平へい全ぜんくさるかから我われ先まめ江えを渡わたりて鎮江城ちんけいじやう逃にげ竈かまどる。國姓爺こくせいぢ公こう安あん敵てきを追お拂はらて部卒ぶそ小令げぢして城中じやうちゆうの火ひ消けせ。城じやう小令げぢ兵糧へいりやう戎ぶつらひ其その夜よ八軍馬はつぐんま戎ぶ休やすみ翌日あした緒將しよしやうを集あ鎮江城ちんけいじやうを攻せ死軍しぐん儀ぎをなりり

國姓爺こくせいぢ橫よこ梨なし賦ふ詩し

抑鎮江城おさくちんけいじやうと縉しん八はち往むか昔むかし吳ご主しゆ孫そん權けんが築きく所しよ。周しゆう迴くわい六百二十步ろくひやくにじふに前まへ小湖水せうこすいを帶お鐵てつの雍おん小似せ戎ぶ以もつて鐵てつ雍おん城じやうも号なる無む雙さうの要害やうがいなり。韃將たつしやう張ちやう文ぶん煥くわん十じゆ萬まん騎きおて茲こゝを固かく崇しゆう明めい因いんの敗さい卒そ五ご萬人ごばんにん鎮江城ちんけいじやう逃にげ竈かまどり。都みやこ合あ十五萬騎じふごばんにん又また戎ぶ磨ま鐵てつを琢たくて防ぼ禦ごの備そなをなす。南なん兵へい寄よるを微そ塵じんおとさんと待まちけり。國こく姓せい爺ぢ公こう安あん侯こうと出いて鎮江城ちんけいじやうの淺せん深しんを尺せき寸すんもむらふ。早さう春しゆんの時とき節せつをれ江え水すい氷こほりて渡わたりごとと報あむ。春はる暖ぬる小赴こしゆ戎ぶ待まちくると人ひととて日ひと送おくるうち程ほどなく二ふた月げつ中ちゆう旬じゆんたりとを。いざや啓あ行ぎやうよとて十七萬騎じちばんにん鎮江ちんけい



國姓爺
火討
大傷清
軍

忠義傳後編卷之四



の汀ふち出たるが雪解の水勢般石を流すとむらりぬく漫々江
水藍より青く底の深れ妻戎尋とりし吏を去ると船筏あはれん
む渡とむらりぬくとも敵軍船を盡く攸ち藏しなれむ奈何とも
れやうなく鬼神成ゆ手捕れまらぬ五府六部の衆將も茫然
て大洋に向かて空く手成拱た欄を水面を睨居り國姓爺
鎮江の地景の佳と鐵甕城の壯觀とを賛歎し実も孫權の築
たる城たるふと彼三國の時魏主曹操が詩を賦せし故事公思ひ
あり自己の江上成眺り繫を横へく一絶成唱て曰

春風得意馬蹄輕 滿月青歸細柳營

橫梨賦詩曹孟德 詞鋒先奪鎮江城

干時鐵騎鎮周全 斌曰這城一大江を帶れを縦ひ空く數月を

過とも江水の涸れ盡るふもあはれ安雨りて何の時城を攻落
ともた不如我暴虎馮河の勢を懸とも運を天任して先陣と
なり二軍後小續て濟せし言放ち部下の勢小令し江岸を下
り馬筏を組で碧潭緑深れ江水小騎入れを歩軍八馬小とて
押渡る國姓爺是れ大々大音小全斌が水煉小かゝり引續く渡
せし指揮するふと十七萬の猛軍先を争ひ馬筏を組が歩入る
渡を程小素り棧小乗むる勇兵をれをさると大江を一騎も溺る
者なく向り江岸小叫で登る鎮江の虜軍是れ大々大小れ
此湖水成跣涉りとも吏古今いま例をまむ南軍乃銳氣社忠
ろくこれと辟易して防箭をばも暴しく射出さむ屯成とも
城中小眺る國姓爺令して曰南海を出陣せし時より批言しごとく

忠義傳後編卷之四

活て飯らんと母の妻をこの屍を這城下小晒をそこの母の以定り。大急此
城を責落せよ。一遲滞せし南直の援兵きり却て利を喪
と嚴く下知をせし。三軍大勇悦び假令鉄城石室のあれ何
程の妻あらん。奥の連るごとく群を喚び叫び攻まら。城兵も糧々
より毒箭を多く放ち。茲を大妻と防戦。是小因く南軍死傷の
者多く屍山なり。女も厭うごと死族となり。競ひ逼る。其
れの名を名城の容易小乗取ること能は。其日を空しく暮
れを退ひく。江岸小陣を張陣々大舟を焼立威を示す。其余烟天
を焦し。江水映じて野に妻縋んを。斯て夜も明もこれ再び城
迎へ進み迫り攻まら。其兵勢昨日の十倍。城兵困り漂を張文
煥。走り廻り三軍を励し必死の成て防ぐ。其日もまた持堪り。國

姓爺の西日城を攻て下し。能ざる小氣を焦ち。五言。一部の諸
聚て城を陥落せし謀を問其時。建安伯萬孔進み出て曰。敵城堅固
なり。とくも王將張文煥と討つるを自落城とぞ。王。明日城下
小進み張文煥と對面せん。妻を望み。女時渠と問答し。王。其時王の左
右の歩軍乃ち中雜。鳥炮を以て文煥を堅殺とぞ。一不知此謀計
は奈何。國姓爺大悦び。如斯なり。城を陷んを何の難れ。妻の
人唯恐く。城上遠く。大珠の及ま。れ妻をと難む。萬孔曰。小臣
よく其遠道を察し。飛丸の及む。程小あり。張文煥。小
ど小出を驚ん。と手裡あり。軍中。小戲言。若堅損。とぞ。六
軍令。小行ひ。と。言。放て。ひ。明日張文煥を。鉤
か人構て。過つ。妻を。と。緘。諸。日。例。の。如。隊。を。押。出。一。城。四。迎。

宋史張文煥傳

十四

く叱して。國姓爺二十余人の歩軍を隨(延平王)鄭森と書し錦の旗
 を指挿し金龍の旗を頂て百花の戦袍披掛赤兎馬の跨りて
 徐々と乗出し城の小向ひより高聲小城將張文煥の一言のつて義あり出よ
 やと呼ろ。監軍今斯と達し張文煥城上の櫓に登り狭間を開
 け現出て曰。鄙賊你猥小我が界を犯し人民を悩ますと大膽なると。今日
 我城を出て你を擄り生かざらば其肉を喰入とあり。一汗你自ら我小對
 面せしを望み降を乞ふと欲るや。も死を需んと欲するやと。飽まて
 罵りしるふ。國姓爺微笑し。我南海小身は倚皇爺の消息を待と
 りども。今小至るまで詔書きたるを待たぬ。早く登還し小を知らんを
 我寄とるふ主なり事小君なり。因り清朝小降王北面して臣位小列
 せんとありども。清王我が老大爺を購て虜とて及ばんを。我先南京

小攻入老大爺を奪及し。威を清王小示して後和を講せんとあり。然
 ども南京へ攻入まると。義兵の軍民を損むるを。你清王小説くと。又
 我贈きとる。我崇明関小退れ。我戦を収て其音信を待。若
 我とんむ。已事を得。你が城を踏潰して南京へ攻入。思慮を
 定て回答せよと。呼り。張文煥巨口。関と呵々と笑ひ。你密言を
 以て我を賺し。又我安々と奪返し。其後國を偷人とあり。是も
 の詐謀ハ三才の小兒も購得し。無益の舌は勞せ入り。早く陣中へ飯り
 浴戒沐浴して身は淨り。刃の首小臨。我待よと。言り。國姓爺大
 小怒り。黄只の虜奴何ぞ無礼なる。人よく。今天殊の速なる。我人
 小を定め。忽ち切て。瞳と放。素り提針を。擊断。手煉り筒先

かれを過ぐ張文煥が面上に腦後へ突と撃貫り。何久以て堪へた一
声苦と叫び仰るる倒れ死しり。國姓爺其時三軍を麾て
須波菟をよと令とらふと待設る南軍天地崩とわたり小鯨
波を發し鐵壁を穿ちて攀登る。城兵ハサハハよと主將を討
まき周障顛倒しは強を防禦とらふ違なく手足を張て惘れ
惑ふ其隙に陳豹馬信をたどり我先中城中小乘入當分幸小難
廻り心利者ハ城門の鎖を碎ちち開く。是れ依て十七萬騎一
ふこ入其勢ハ山の二時小溢き下るぐわかれ。城兵敢て當ること
能く盛茂脱降旗を立し助命を乞ふ。國姓爺是を許し。城中ハ
入く士卒成勞ハ軍馬を息め重く萬札が功を賞し。是より南京の
石頭城を攻抜んと志しける

國姓爺拒諫向南京

國姓爺ハ鎮江城ハ攻落して周全斌を留主と定め兵糧を廻し
石頭城を責る計を京を議らるる陳豹が曰これ南直の地ハ敵軍幸ハ
るが故ハ高戸充滿して農夫少く田圃狭れ米穀乏し。是れ因て憐
國の采粟ハ浦子江ハ運送と願くハ王此所を本塞と定め兵糧と奪
ひ貯棧變ハ應じて南京を攻む。是根を固し枝葉を生じざるの謀
畧なり。國姓爺が曰卿が論ハ理ありと魚戰ハ神速カハ伐とつて功
が力と古語ハ疾雷耳が掩ハ違カと謂り余崇明関鐵江城
を奪上ハ早く南京ハ攻入敵の群議ハ定まらざるハ伐を必とす
て大利有るハ萬札翁天祐ハ陳豹が練ハ服し種々ハ練まとも國
姓爺敢て用ひて我ハ心已ハ決せり再度ハ更勿とて南京征伐

忠義傳後編卷之四



國姓爺
横梨賊詩

忠義傳後編卷之四

將校を定む。先五府の大將小前軍絨縹總統林頃中軍乃提督
 忠勇侯陳豹左軍提督翁天祐右軍提督馬信後軍提督萬禮是
 を龍師と号し。二萬騎を附屬と。先行左軍先鋒楊祖右軍先鋒都
 督陳餘是を雲師と号し。一萬騎を附屬と。五常鎮の前軍總兵武
 鎮康明中軍總兵義武鎮陳義左軍總兵智武鎮顏曼仲右軍總
 兵信武鎮黃與後軍總兵札武鎮林招是を風師と。四千人を付屬
 と。五行鎮の四千人を金武營木武營火武營土武營水武營の五總
 兵是を地師と。五兵鎮の四千人を正兵鎮楊福遊兵鎮胡結殿六
 鎮陳又奇兵鎮陳澤英兵鎮王義是を鳥師と。水軍七千五百
 八前軍周推之中軍林輔明右軍周瑞後軍陳輝是を天師と。と
 援勅鎮七千五百八前軍都督戴槌中軍都督鐘申左軍都督黃

昌右軍都督何文後軍都督劉德是を地師と。宣毅鎮七千五百
 八前軍都督韓又中軍都督魏良左軍都督萬爺右軍都督黃元後
 軍都督吳爺是を虎師と。八陣外小張内小陣小大武鎮七千五百
 前軍都督蘭燕中軍都督蕭拱辰右軍都督杜輝左軍都督萬
 二後軍都督黃弘是を前備として正五軍四千五百代加護軍陳邦
 旗兵鎮揚覽統領余申六部の七千五百を領し。殿後乃大將左軍都督
 高招林右軍都督何鐘左軍虎衛陳魁右軍虎衛陳鵬渾都其
 勢十七萬騎吉日良辰を占へ。啓行と部伍整々としてさながら天
 兵乃ぞく億萬の強敵ありとも微塵小とを免勢ひたり。と
 國姓爺神力破城門一
 柳石頭城ハ南京金陽の要害なり。壘高く堀深く無雙の名城なり

日本書紀卷之四

上小大平鳳陽の猛將蘇列寧列の堅甲池徽西列の利兵廣徳和
 列の勇士徐泗の強卒攢攢て固く縦ひ百萬の勢小張良韓
 信少智我兼整噲周劫が勇を具とも敢て陥落を乞ふとハハ
 ざりたりされども延平王國姓爺が十七萬騎のて必死の誓定
 り死生存亡を此一戦小決せんと思切らる上小宗明関鎮江城ニテ
 の堅城を攻落し勝小乗むるの勢ハ泰山をも崩つる死さみちを
 争う勇まさるる敵隊伍整々として進發し日次徑く應天府南京の府
 小春到し遙小石頭城を望見する小數千の旗旌ハ五色の雲の
 いろどく春風小翻り巨萬の劍戟之霜雪の降積らるること
 小晃死眼を奪むるをれども南軍些小遲礙せんと隊を整点し
 て應天府を押し出し金鼓を鳴り驚波を發して攻寄る其猛威

送浪の崖を崩さる如くわれを城兵も嗟歎し噫國姓又耶が威名
 四海小東小兒の啼を止るも理りらんと戦栗しあがらる各將互
 義を励め合矢名を起し防禦と南兵更とも甘むと三方より喚叫
 んで操立矢小中り石小碎まき死したる者我足代とあり己の克
 り未の克なく息我も継せむと攻立らるる小城兵大い疲乏已小城
 門破らるる極く見えらるる八府の總督馬故山大い怒り厲く下
 知我傳自己走り回て士卒我叱懲らるる小より城平是小機を整
 し命我限り小防ぐ程小其日小已小暮小舟よとくしども南軍城を
 落さるるの敵はど國姓爺も急小破らるる小知て軍我班應天府追
 退れ三軍小兵糧をたうせ儲新平の勢小肉盾小廉幕を持せ拒
 火を多く燃し連前來遠く城辺小押寄金鼓喧しく聲立て城を攻る

体成を以て城兵と終日の軍勢を休んとしてる処に敵まゝに押寄りて大に
 強た歩平戎屬して矢石成射し防ぐと魚南軍の箭來を量りて程
 遠く勢成をふるふより空に箭のまきく適ある矢も肉膚を穿る幕乃為
 ことなりと浴更ぬ一卒やも傷る更能くぞ。攻兵に終夜如是奇兵を
 翌を以て又新兵是と入替て。早天より城を攻る更昨日より猶屬に城
 兵多勢なりと魚一昼夜眠れぬ。大に疲困して腕痿力窮りたる城
 門を破られては南軍小屠り殺し入更を恐る互に志成屬して防禦
 此日ゆまさ無更を得たりといふも暮まをまゝに南軍鼓噪して城を攻る
 休をなし曉小を以て新兵入替て攻る。如此南軍の昼夜相替て息
 乏城兵六二日夜息む間なく眠れぬ。身神十分疲り上箭玉已に尽て
 奈何ともさるを申すなく憫せざる許たり。國姓爺ハ城中より射下し矢

の漸々小減せざる成りて。偕ハ早城中矢玉盡る。此様を絶て踐破よ
 して大盤石を以て左右小照狭で城門を走りより先石を両手小運りて
 嘯と擲りて鐵石を以て固く堅門滅裡々々と響音て震動く。國姓爺續
 て又一石成擲む。城門扉破を柱碎て倒を破ぬ。南兵大に勇
 我が王乃神力能鐵城を破りて。先を争ひ押破てこゝに入程り城
 兵周障狼狽し手足を張て怖惑を南軍得たりと突伏切伏難廻
 る。是れ依て八府の兵討くる者數多し。散々小敗まして正陽門小逃
 竈る。是則ち石頭城の二乃廓かり。南軍續て正陽門小押寄烈火
 の草成焼が如た勢ひやく攻逼る程に。此手ゆまさ二日夜小攻なり
 直に聚寶門小攻進む。城兵も力成一致り。毒箭前を射り木石を投
 下して防げとも。南軍ハ死族となつて雨の如く矢石成此も怖ます

親討るん其屍を捕く兄討るれ其軀を踏超て我カト壁と
 攀堀を論難く此門然も攻敗るぬ誠小其猛烈なること古今
 未例なく能筆紙の抄ふ所あらずと國姓希八勝小兼ト應天府
 の本城を攻寄り本城小南京の前軍都督府の勢龍讓虎龍
 天策飛龍龍江左豹龍左右衛を中軍都督府の勢神策
 應天廣洋和陽衛牧馬千戸左統騎右龍虎瀋陽左右の水軍
 金吾虎貴錦衣衛の諸軍統て二十萬の清騎雲のく小屯
 たり中軍の總大将操江を十萬騎あ地坑とい所まで出張
 南軍寄來を微塵小せんを待けり多禪將劉文練て曰往日顧
 愷之荆列の舟を破家とい所小出と或人地名の不吉なる或以
 他小移らん吏を練小顧愷之練を用ひむして果して大風の難

小遇り今將軍の陣所地坑地坑なり是坑小陷るの名あり願
 く八地を易し操江笑て曰卿其一を知て其二を志と我此地小出
 張せ八賊兵を地の坑小陷る為なり何ぞ我軍の陷る理あるん
 とて練を不用去程小南軍の先陣五府の一將陳豹八萬札と俱
 小魁小進と多る陳豹萬札小向ひて曰韃軍小馬小熟とと虫
 我延平王の威武小挫れ手小立敵もあらず此勢小攻伐を南京
 八手小唾して執法登一我徒操江を討く延平王小笑を獻せん萬
 札並りして敵陣小押寄石炮弩を放けられ北軍も毒箭
 然射け傾て互小入りて挑戦其間小南軍の後陣追々小進付
 喚叫声上六九天小徹して日月星辰を強し下八金輪水際小嘗た
 八大龍王を犯すと許かり中軍の陳豹萬札八兵卒を帥て操江が

本陣中て乱入當次幸小切て落と操江ハ韃將の中ふ名と知
 きたる驍將を自己揮子鎗をさのを陳豹が刺んと。陳豹ハ
 望む敵を其精神を吐ふ。斬馬刀を揮て一往一來。戦い度六十
 余合勝敗あがらり。陳豹一点の透を衄ら。刀を揚て操江
 が馬を斬れ。忽ち高く躍上りて主が大地に列落と。操江起上り
 んと。一刃を陳豹早く斬て。両断とを。此時萬礼ハ南京乃刑
 部李華と戦ひ。十合あして敵の黒旗を奪ひ。猿臂を伸
 して搔抓を擒ふと。うをを北軍散々。乱き。互討く者歎と
 ち。と。残兵ハ這々の体にて本城に逃入り。此時日已小西。是れを
 國姓爺凱歌。歌唱。兵戎班ね
 國姓爺忠義傳後編卷之四畢

繪本國姓爺忠義傳後編卷之五

目錄

- 國姓爺夜走鎮江
- 南北大戰金陵
- 萬礼力戰陣没乃圖
- 國姓爺再復思明 同圖
- 清王贈鄭芝龍講和
- 國姓爺天柱嶺得仙書
- 德を慕く思明乃民大寛小移る圖
- 國姓爺尸解再清王治世

忠義傳後編卷之五

繪本國姓爺忠義傳後編卷之五

國姓爺夜走鎮江

去程さつりやうの國姓爺くわんせいやうハ戦毎いくさごと小勝利こしょうりを得え清せいの大將だいしやう操江そうかうを討うたり。刑けい部ぶを生捕なまられむ。二軍ふたぐん勇ゆう之悦よろこび。明日あしたの一戦いっせん小京城せうきやうじやうを恢復かふくせん。其軍そのぐん議ぎをちと所ところ小忽こつち北京べいけいの援兵えんぺい大將軍だいじやうぐん靴子くち。金故山きんこさん下故山げさん鐵故山てつこさん其勢そのせい合あせせく二十萬にじゅうばん三千騎さんせんき野の小亮山せうりやうさん小滿せうまんて四平山しへいさんを下くだり東廬山とうりやうさん往むかへ南京なんきん小着到ちやくたうと。志しのこころをならせと。虜將りやうしやう忠光ちゆうかうと云い者もの思慮しりよを廻めぐり。烏合うがふの民舍みんしゃを毀こわつて火ひをなげ。川源せんげんより流ながして南軍なんぐんの船ふねを燒やく。体てい小見けんせられむ。南軍なんぐんの歩卒ふそ亦また大おほ小孩こご死し定じやう海崇明かいそうめい乃船ふねを燒やく。これを已やむ兵糧へいりやう乃路絶ろせつと。力ちからを落おし流なが石下官いしかげの怨うらみと二熊ふくまの思慮しりよ小及およむ。幽ゆう小心を變へんじ。拔ひく小落おす。

忠義傳後編卷之五

行ふと。十七萬騎の軍勢一夜の中、七萬騎小減也。それ、傷勞れ
たる者多かれ。國姓爺大い、孩れ、茫然として、惆然と。されども
五府の將軍六部の副將及び五行五兵の都督、初ら盟誓言違
を。心金石のごとく、一歩も退くを死体なり。先鋒陳豹が曰、今我ら軍
俄小減、これ敵の猛軍小向とも、憂々し。死を成得ぬとも、覺
を。此六王早く二三千の精兵を帥、鎮江小赴れ。周全斌と曰く、宗
明小い、船小屯して、兵糧を守り、臣は、も、緒將之、此
地小陣、敵百萬騎少く、王を追とも、能喰止く、一騎も通し、此
して、王乃鎮江小到り、又、頃、この地を引、も、ひて、崇明小至り、俱
小且東寧小回り、再び、兵勢、成、調、大志を果、ま、すと、い、ひ、る、小國姓
爺、曰、此、論、可、なり、と、い、ども、余、不、肖、の、身、を、以、て、緒將乃、補佐小、據

大敵、我、敗り、堅城を、陥、て、已、小、明日の、交戦、小、南京を、恢復、し、ぬ、死
期、小、臨、ん、ご、忽、ち、士、平、離、散、と、す、八、是、深、ホ、う、億、せ、る、小、あ、ら、ど、國
家の、運、數、の、盡、る、所、に、注、日、義、を、唱、へ、兵、を、興、し、て、り、我、為、小
死、したる者、萬、死、以、て、塞、る、也、一、死、す、小、今、死、地、小、臨、む、緒將、を、棄、て
余、独、り、鉞、を、退、く、を、何、の、顔、有、て、う、世人、小、面、を、合、と、た、余、小、於、て、ハ
決、して、退、く、を、死、心、なり、綴、小、勢、小、あ、ま、さ、韃、軍、小、蒐、向、ひ、かり、は、程
戦、ひ、屍、を、戦、場、小、晒、の、と、思、切、て、云、々、成、翁、天、祐、大、い、小、練、て、曰、王、ハ
大、勇、大、智、を、具、し、る、名、將、を、う、り、小、今日、ハ、却、て、血、氣、の、勇、を、の、思、ひ
ぬ、ハ、何、ぞ、や、と、我、軍、の、勝、敗、ハ、時、乃、運、小、朝、小、敗、を、暮、小、勝、を、兵、家
の、習、なり、我、軍、昨、日、す、て、ハ、三、門、を、破、る、勢、ハ、あ、ら、も、今日、ハ、ま、る、北、軍
乃、為、小、心、君、ら、う、も、ま、る、然、り、固、り、博、学、廣、聞、の、王、小、今、更、況、小、及

忠義傳後編卷之五

在れども越王句踐と呉の國小窘らるる。三年、新小卧石淋を
 嘗も遂小會稽の戦ひ小勝利を得て耻を雪む。将魏主曹操
 度々孔明が謀計小陥て敗績し、目を棄髪を剪りうとも。未終小
 蜀然亡せり。是皆且の敗小心を屈せざる大丈夫乃行迹小して未代
 の龜鑑とると言ひ盡して練り争とるとも。國姓爺公猶頭とらむけ
 黙然と。時小白髪の小老将殺小挺て声を厲し。延平王何と惑む
 吏の甚どしやと呼ぶ。緒人發て是を凡れを使ち中軍の都督魏
 良なり。眼を睜て曰く、隆武帝曾て王の忠義を賞して國姓と
 賜ひ朱成功と呼ぶ。豈尋常の吏か。人明朝乃治世三百余年。十
 五代乃王の諸王子凡百以て尊を。然る小今一人乃監國なり。王
 永曆爺乃消息を詳し。若登遐小極らむ。王代て監國乃計と

ありしとつれ吏其任より。然る小時勢を察せんとして無謀の戦小命
 戎損さむ。隆武帝の遺招小背くなり。結萬全乃練をかりひむ
 と練りたる五行鎮の緒將も列位志茂吐て退陣を勧む。國姓爺ハ
 本意小あふれども。そのへを漸小練を納。緒將小別を告三千騎
 小て其後とて鎮江とて拔落し。若極惜らむ。形勢なりなり
 南北大戦金陵

北朝の順治十五年丑五月四日北京の援兵二十余万騎。南軍の
 背小襲ひ逼る。南京乃貝勒王是を見て。龍の雨を得るがごとく大
 小勇も。是も二十萬騎出出張と。金陵と。小廣死地なりと。小
 山野と。軍塞と成り。南軍、延平王を落し。心を安し。義と金
 石小比。命を塵芥より狂小て。一步も退く心なく。五萬余騎を勝り

二隊小分つ前陣ハ提督陳豹日萬孔左軍林勝日翁天祐右軍馬信
後陣ハ總領余申都督魏良其他援勦鎮宣毅鎮の諸將今日を
限とすひ定りし更なれを殺氣天を衝回天の威を顯して鯨波一聲
山野を動し南京八府の勢二十萬騎が竹葦の如く隊へ陣（鉄炮石
炮を撃ちしけ攻入を韃軍も貝勒も今後ひ毒箭を雨して攻戦し陳
豹ハ何卒貝勒を討たんと自余の敵ハ月もけを敵陣深く斬入
人を斬り更卒が難がごとく金剛神の怒を見し雲の如く敵中へ縦
横とす更七度も及ぶも貝勒王ハ不遇其身小箭矢負くと義乃毛
のくく小傷重傷十余ヶ所を肩を杖にして小間息を憇る所へ杜
萬會單孫と三人の胡將比く馬を進て撃て菟る陳豹ハ血小
そく眼を瞋し戈をうらと棄帶する倭刀を抜挿し兩人を迎て

挑戦戦ふ三馬の回る更巴のくく喚叫んで或ハ斬或ハ斬まき其時わたり辛
ひしう遂小陳豹萬會公馬より下斬て落と其間小單孫三又の戦
を執伸陳豹胸板を望ぐ丁ど刺さるふ拳下りて高股を突通を
陳豹猶も屈せんと戦の柄を左平小握り右王の倭刀を閃いて單孫
をも両断となすとされも其身も重傷小眼くもて働く更然ハされ
か終小自己首刻く死し高招林陳魁ハ敵乃二萬騎小曲すれ
三千余の勢も或ハ討ち或ハ擒となりて只二騎小討され俱小馬然双
東小弛西小蒐て虜兵を斬こと數もくど血煙散乱して紅の霧と
降とち如くなれ北兵怕をかりて只遠箭小射る是小依て陳魁ハ
立瘞小成て死し高招林ハ自殺して死益小まき萬孔二萬騎の兵と
左右ゆ貝勒が麾下八萬騎と並合せ卵の魁より己の魁と挑合



敵を駈けし屠殺し部下の兵も漸々減じて百騎不足なり
 ぬ。されども萬札敢て屈せんと是も貝勒と刺違人と其旌符の的
 群る歩軍を前後左右小薙拂て進む所小黃老虎とより
 鞭の繞將六十介の斧を揮て微塵おせんを撃て萬札得
 了と渡り合。四尺小余る倭刀が電のごとく弄して結つ流しつ戦ひ多
 小黃老虎へ數度空を撃て腕瘡力弱り多る乃を萬札。あつと喚
 て横さぬ小斬て落と。續て洞鬼山と小虜兵長鎗を搦て萬札小
 撞てくる。萬札はく對合せ秘術を尽して争戦し。是が刀下り
 斬て落と。又北軍の中より震輝陳蚤とより兩將萬札が繞勇と
 又々々嗚呼がまうと。二人比しく萬來て左右より無手と組萬札
 數尅の厨戦小身力頗る劣る。乃と魚猶物乃骨ともせんと先

壘を搔扱て目より高く指上弓丈三文許投遣々れ士卒二人を亦
 殺して陳蚤も微塵小成て死し。萬札も震輝を鞍の前輪小
 捻伏双手を咽喉おけり一締志も氣六穴より鮮血を吐て息絶
 ぬ。然る小一枝の流矢來て萬札が眉間の直中を之のしと射り大隻
 の傷をれ免首小伏て死す。是亦始として余申馬信其餘の諸
 將も火出る程戦ひ悉く戦死し。黃昌と戴槌と六位前傷を得て擒
 とかりぬ。此日虜軍斬取首三萬余小及ぶされも北軍も戦死
 七萬小余り將校八十員を討せし。貝勒王。舌が震して怕れ陰
 丸剛將の下小弱平なりと。古言空しうると余いま斯程乃強
 敵を刀をどとて屢賞歎し討と。首級を点檢せしる小國姓
 爺の首が足とと告。靴子。降人を曳出して推向せり。昨夜已小鎮

江(退)々(々)と曰。靴子貝勒王。小湯(湯)て曰。國姓爺。已(止)鎮江(江)ま(り)由(降)率(率)り。集(集)今(今)勢(勢)を拵(拵)た將(將)を討(討)せて勢(勢)ひ(力)盡(盡)し。此(此)機(機)に乗(乗)りて鎮江(江)進(進)發(發)し。一(一)戦(戦)小(小)鄙(鄙)賊(賊)を屠(屠)殺(殺)して。永(永)く災(災)害(害)の根(根)を断(断)絶(絶)し。貝勒王(王)首(首)が振(振)て曰(曰)兵(兵)書(書)小(小)窮(窮)寇(寇)に追(追)及(及)らざる。と謂(謂)す。呪(呪)や鄙(鄙)森(森)公(公)勇(勇)力(力)焚(焚)燬(燬)ゆ。勝(勝)の(と)あ(と)ど(と)智(智)も又(又)韓(韓)信(信)小(小)讓(讓)ら(と)ど。敢(敢)て侮(侮)る。た敵(敵)小(小)あ(と)び(と)決(決)して追(追)及(及)られ。又(又)渠(渠)を討(討)得(得)る。と。其(其)枝(枝)葉(葉)義(義)を唱(唱)る。兵(兵)を發(發)し。寇(寇)を(と)斃(と)し。我(我)が順(順)治(治)爺(爺)の天(天)下(下)を平(平)定(定)し。我(我)が仁(仁)德(德)を尊(尊)んで殺(殺)戮(戮)を好(好)む。と。彼(彼)鄙(鄙)森(森)ハ天(天)下(下)の義(義)士(士)なり。強(強)て逼(逼)り殺(殺)さ(と)ど。只(只)德(德)を絶(絶)して心(心)服(服)さ(と)ど。以(以)待(待)ふ不(不)如(如)と。渠(渠)順(順)治(治)爺(爺)の聖(聖)德(德)小(小)懷(懷)を南(南)海(海)乃(乃)小(小)島(島)小(小)摠(摠)も。是(是)九(九)倉(倉)の一粒(粒)滄(滄)海(海)の一滴(滴)の(と)何(何)の慮(慮)る所(所)ら。わ(と)人(人)須(須)捨(捨)置(置)る。率(率)小(小)勸(勸)り髪(髪)を薙(薙)飯(飯)頃(頃)せ。む(と)命(命)し。靴(靴)子(子)及(及)を討(討)る。

伏(伏)して。黃(黃)昌(昌)戴(戴)槌(槌)を曳(曳)出(出)し。卿(卿)ホ心(心)を改(改)り。清(清)朝(朝)小(小)飯(飯)頃(頃)して。髪(髪)及(及)薙(薙)る。過(過)分の職(職)位(位)を授(授)く。と。曰(曰)る。小(小)兩(兩)將(將)眼(眼)を瞋(瞋)し。靴(靴)子(子)を白(白)眼(眼)と。曰(曰)我(我)徒(徒)ハ是(是)天(天)朝(朝)の遺(遺)臣(臣)なり。何(何)ぞ會(會)歎(歎)小(小)等(等)く。義(義)を棄(棄)て生(生)を偷(偷)る。不(不)毛(毛)左(左)襟(襟)の虜(虜)奴(奴)小(小)膝(膝)を屈(屈)さ(と)ど。死(死)無(無)益(益)の言(言)が動(動)る。と。人(人)より疾(疾)く斬(斬)る。魂(魂)ハ死(死)して九(九)泉(泉)小(小)飯(飯)と。と。魄(魄)ハ猶(猶)陽(陽)土(土)小(小)停(停)り。你(你)ホが天(天)罰(罰)を得(得)る。我(我)徒(徒)の(と)刑(刑)戮(戮)小(小)臨(臨)み。と。散(散)る。小(小)言(言)を。靴(靴)子(子)大(大)小(小)怒(怒)り。向(向)人(人)小(小)桎(桎)梏(梏)を。り。て土(土)の牢(牢)下(下)し。ぬ。黃(黃)昌(昌)戴(戴)槌(槌)猶(猶)も。言(言)て止(止)む。古(古)の伯(伯)夷(夷)叔(叔)齊(齊)も。道(道)ある周(周)の粟(粟)公(公)小(小)喰(喰)む。自(自)首(首)陽(陽)小(小)餓(餓)死(死)せり。況(況)や。飛(飛)會(會)走(走)歎(歎)む。如(如)く。無(無)道(道)不(不)義(義)の胡(胡)賊(賊)の食(食)が。と。兩(兩)人(人)も。飲(飲)食(食)を断(断)自(自)頭(頭)を。歩(歩)碎(碎)た。獄(獄)中(中)小(小)死(死)と。是(是)を見(見)聞(聞)る。者(者)其(其)忠(忠)義(義)を感(感)ず。哀(哀)まぬ。

國姓爺再復思明

國姓爺朱成切緒將の練黙止ぐ。三千騎みく鎮江へ退た。多小敗
兵追々小弛回。金陵の戦ひの顛末を往進。國姓爺天を仰ぐ歎
息。五府六部の緒將勇なりとも。焉ぞ五十萬の敵を前後小受て生
る変を得ん。我曾て緒將の戦死。た意を知り。人々乃忠練を
納む。心かたふ似され。已変を不得退たぬ。金陵の方を望み涙
を流して在る。小公羽天祐魏良。敗兵七千余騎を帥て。朱小深なぐ弛
回。多小。國姓爺愁の中。小も悦。緒將虜軍の為。小田。一人
も活て。飯る者有ま。と。かひ。兩将命を。て。飯る変悦。何
ぞ。是。小。如。手。ば。良。藥。を取て。是。を。と。小。公。羽。天。祐。魏。良。泪。を。流。し。て
曰。臣。等。王。乃。為。小。金。陵。の。陣。小。死。せん。と。旨。を。定。り。し。も。然。有。て。誰。う

合戦の始末を辨ぬ。と。其。の。後。の。軍。議。成。り。な。る。為。惜。し。ぬ。命。を
昨。の。回。り。の。國。姓。爺。曰。金。陵。小。死。し。る。小。安。く。鎮。江。回。る。難。し。卿。亦。が。敢
勇。小。非。人。を。維。り。是。を。善。ま。さ。ん。定。て。北。虜。迹。を。追。て。寄。き。る。也。
我。大。將。十。五。人。を。討。せ。兵。を。失。し。更。數。ま。ら。む。練。小。一。萬。騎。小。討。ま。さ。る。と。以。ち。も
皆。是。義。氣。金。鍊。の。勢。わ。れ。む。此。城。小。立。籠。り。韃。軍。引。受。て。決。く。戦。死
を。受。し。公。羽。天。祐。魏。良。大。小。練。て。曰。是。決。し。て。無。用。なり。臣。等。萬。死。を。凌。死
回。来。し。る。小。王。小。此。意。有。ん。と。公。畏。る。故。なり。且。東。寧。小。飯。陣。一。兵。を
綱。餉。を。足。て。今。日。の。耻。を。雪。り。と。練。り。た。周。全。斌。が。俱。小。言。成。盡。し
飯。陣。を。勸。る。小。を。退。去。を。受。し。と。公。羽。天。祐。魏。良。を。先。陣。し
周。全。斌。を。殿。と。して。夜。小。結。江。と。涉。り。崇。明。ま。る。小。南。京。より。追。討。の
兵。由。来。され。安。々。と。崇。明。関。小。看。し。繁。死。置。る。軍。艦。小。り。乘。風。小。乘

して東寧を回り、今般戦死せし大将十五人が、正を神と崇め、十五宇の祠を造営し、犠牲を供へて國姓爺自己忠良を祭り、諸洪旭戴健、黃廷林勝、翁天祐、魏良周、全斌、ホの緒將と、昼夜軍議を疑し、專ら國家恢復を議し、外更ふ他更ふ。其ハ且措清朝の順治爺を去る年より、緒道を巡狩有らば、河南道にて、蒼梧の安ふ羅王をひく南北兩京の百官、大い孩た赤子の母を喪ひ、心地一國哀を發せんと、天下一口も君をくむ有らざる。群臣朝廷を評議して、太子を寶位ふ即王と仰れ、翌年の春、康熙と改元し、天下ふ大赦を行はば、去年國姓爺南京ふ敗績してより、後ハ閩の地も、靖王四川の賊黨も、勦ふ就四海一統、靜極して天下全く清の代となり、ね康熙帝まさる天乃繼、世明君ふく。聖智廣大ふして、萬民を撫育し、親皇極殿ふ出御ありて、朝

政を正し、李蔚、明珠、馮溥を大學士となり、黃機を吏部尚書、清標を戸部尚書、吳正治を禮部尚書、宋德宜、成兵部尚書、朱之弼を工部尚書、魏象樞を刑部尚書とす。百官一時の賢才を、挺で緒道小學校を、開た十六條の聖諭を、領ち文武の道を、講せしめらる。時小東寧の國姓爺、八時々味方を、招た四五年、戎徑て七萬騎の勢と成り、ハバや先七閩の地を、恢復し、それより、漸次ハ蚕食して、南京を、攻下し、を、洪旭戴健を、先鋒と、公羽天祐、周全斌を、後陣と定め、自己ハ嗣子錦舍、軒と、俱中軍となり。清朝の康熙六年四月、上旬、軍艦の艦を、解順風ふ乘りて、思明ふ押渡り、陸ふ上り陣を、張此時、思明の鎮護、孟季年、俄小海寇の、到ふ孩た、福列、飛馬を、互く援兵を、乞自ら三萬騎、小城外十里、小出屯を、張南軍の

皇朝通志卷之五

七

先鋒供旭戴健勢或押出とて鉄炮石炮をあけ喚叫ぐ撃て蒐
 る孟季年。部下の將小邵岩虎とり者一萬五千騎を帥して南
 軍小蒐合せはく鉄炮毒矢を放し圍を發して攻戦されとも虜軍ハ
 久く軍陣小臨され進退自在を得と。南軍ハ晝夜調煉せし
 兵をれど其勢ハ疾風の速を捲ぐ如く忽ち敵をまくり三人馬を討
 更毀し孟季年ハ味方の敗色成んと劫然と怒り麾下乃軍之師
 て殺出。先陣を技て敵小當る國姓爺が世嗣錦舎生年二十才乃
 若將あれども又祖乃勇氣を受て身丈七尺小向と。臂小千竹を
 掛る脊力ある上緒般の武技小達しれ金龍の盛を頂た紫錦の
 戦袍を披掛白馬小跨り尺余の傍力をち振先陣小蒐到りて北
 兵小入り合先一刀小岩扉を斬て落し猶も戦場を縦横して馬ハ

乗し者小刀をぬぐ心ち小斬て落と。是が為小虜騎討る者五將
 さふが魔利ま天の荒る如くられ孟季年が勢戦慄しく敵非走ら
 國姓又耶ハ味方の勝利を足て鼓をち鉦を鳴して勢ハ成扶け大瀆の
 ちがく殺到しれ孟季年堪らて敗績し城中小閉籠て防禦ハ
 南軍ハ勝小乘て城を十重廿重小田と。三日間息をち継せと攻る
 城兵ハ大志の籠城小兵糧乏し上士卒敵の猛威小怕て拔々小落
 行援兵のまが来され逐小城を守る更能らと孟季年妻女子を車
 小乗て夜中小城の後門より忍び出福建をさして拔落と。是小依く
 残兵降旗を建て助命を乞國姓爺降を許て城中小入手始よと視
 して牛を牽し大宴小開し士卒小分此機を絶じ小墨々々追落
 福泉障三列を恢復せん其軍議小催しと

こくせいや
國姓爺
再復ニ
思明列



北の國 南の國 東の國 西の國



北の國 南の國 東の國 西の國

清帝贈卹之龍講和

福列の牧李馮ハ至季年が。註進ハ該ハ軍勢を募テ思明を援入と
 内。早クも孟季年敗走。来リクハ益該ハ其旨以南京ハ私馬少ク
 註進一軍を整正。思明進發と。其勢八萬五千余騎。福列の境
 國姓。耶斯と。歩て敵を竟ハ入。七。禹騎を三隊。小分チ。福列の境
 郊野。小出て。屯を張。北軍。由是と對陣。互ハ戰書を通。勢と出
 一。小北陣の門旗を用テ一員の虜將。數十騎の部將を左右。小して
 徐々。と馬を出。酈成功。出。一言。曰。人と呼。南軍。是を歩。曰
 門旗を用。世。卹。錦舍。周全。紙。供。旭。小。孟。械。を持。け。左右。小。後。馬を出
 虜將。馬上。小。札。を。施。一。回。曰。来。將。ハ。酈。成功。錦舍。曰。余。ハ。酈。森。ハ
 卹。子。錦舍。ガ。敵。將。の。姓名。成。由。少。人。虜。將。声。小。應。我。ハ。福。列。の。部

李馮ガ。柳先朝の時。你ガ。又。酈成功。南京。小。敗。鎮江。拔。落。し。砌。緒。將
 追。討。し。酈。族。の。根。成。斷。葉。を。枯。ん。し。小。先。帝。順。治。帝。卹。森。ガ。忠。義
 を。惜。し。緒。將。を。宥。て。逼。り。伐。り。成。す。故。小。酈。氏。萬。死。を。出。す。南海。小。飯
 更。成。得。り。是。先。帝。の。仁。恕。小。あ。く。し。何。ぞ。加。之。其。以。後。も。酈。族。大。免
 小。跡。を。潜。る。更。を。知。と。ん。も。敢。て。征。兵。を。向。ら。れ。ど。況。や。酈。之。龍。小。於。と。そ
 今。以。て。上。賓。と。朝。小。饗。食。夕。小。宴。枕。を。高。し。て。老。を。親。ハ。ち。成。す。を
 酈。森。其。德。小。伏。一。飯。降。と。さ。う。さ。も。な。く。を。海。島。を。守。り。て。國。朝。小。寇。と。し。海
 小。猶。来。て。扁。竟。を。侵。一。黎。民。を。煩。ハ。と。更。不。義。無。道。と。し。も。飽。と
 小。所。詮。海。島。の。微。勢。を。以。て。國。朝。小。敵。甘。ん。更。ハ。螻。蟻。の。浮。屠。成。崩。と
 小。小。比。し。て。功。た。た。の。を。な。し。て。遂。ハ。族。滅。を。免。ま。し。唯。速。小。惑。と
 棄。て。降。札。を。勤。よ。と。又。酈。森。小。曰。と。呼。り。る。錦。舍。曰。然。と。て。曰。虜

忠義傳後編卷之五

奴が言太ど無礼なり。我が大爺義を唱て南京を恢復せん。破竹の
勢ひ小乗の二軍小宗明鎮江を攻下し。續て金陵の三門を攻破り。已
小本府がも襲ひ取人更手裏の有多る。天の期いま到せしめて兵士離
散したるは以て。械を絶東寧小飯る。縦ひ百萬騎の追捕も共
撃散して。回人更何の怖る有。徒大爺の武勇小碎易し。追
討も更能くも。然るは却て仁恕と呼。其怯弱を掩んとする偽言耳
。老太爺を賓と。光を兼と。是れ弥妄言なり。其鋒を以て制し。是
を量り。奸計を以て擡と。人質取て。我が父の銳氣を折んと。是
豈大丈夫の所為なる。胡賊ハ斯くて。蓬た事ハ。勝利を貪
む。明朝の粟を喰者ハ。匹夫といふ。不義を行は。你ハ
小王の徳を称せ。呉三桂を扶助を名として。國家を奪ふ。大

悪無道。維う是れ。仁と徳とせん。先你を屠殺し。天誅の速な
る。後ハ。顧て。南軍咄と。鯨波を發して。押出さ
李馮も大り。怒て。陣中。小回リ。隊を押し出。鼓噪して。戦を交む
去程。小兩陣より。射違る。矢玉。白。兩。小。霰。の。雜。て。如。く。歩。軍。騎。馬
。鬼。合。せ。く。嗷。叫。び。争。戦。を。程。小。郊。野。忽。ち。修。羅。闘。場。と。變。じ。血
ハ。紅。蓮。の。浪。を。揚。ぎ。戦。ハ。劔。山。の。刀。樹。を。鳴。ら。す。如。く。行。馬。足。音。金。鼓。の。音
。天。小。徹。し。地。小。響。音。て。響。く。光。景。なり。錦。舎。ハ。血。氣。の。昔。年。を。ま。む
。根。小。挺。て。勇。戦。し。敵。將。を。斬。吏。七。八。騎。猶。も。都。督。李。馮。を。討。んと。敵。陣
。小。深。入。し。忽。ち。虜。兵。の。為。小。圍。籠。ら。す。左。右。前。後。小。敵。を。結。已。小。危。く
。ん。え。々。る。所。小。忽。然。と。北。軍。亂。き。強。く。錦。舎。戦。ひ。た。が。我。を。救。ふ。ハ
。何。者。ぞ。と。ん。ふ。り。是。別。人。か。と。五。府。の。一。員。周。全。鐵。なり。錦。舎。が。敵

忠義傳後編卷之三

三十一

小田うらこままゝとて。河修羅あはらの怒いらまゝか如ごとく驍勇きやうゆうを表あらわす。雲霞うんげのどくた
 敵たてを蒐あつめて来きまゝなり。錦舎きんしや是こゝに力を得えて。李馮りほうが副将ふくしやう黎干吉りけんきち。
 とつ者を一刀いちぼう斬きつて落おす。周全しぜん斌ひんと雙たがひて敵たてを斬き靡み難がたく。田うらを
 蒐あつ出いでたり。是こゝより前國まへくに姓せい爺や。後陣ごちん乃すなはち勢いきを帥いて路みちを横よこつて李馮りほうが中
 軍ちゆうぐん一いつ率そつてくる。李馮りほう不ふ意いの敵たて小孩こごたが。隊たいを整ととめて是こゝと戦たたかふ。然
 とも前路ぜんろの争戦そうせん南軍なんぐん強つよく。北軍きたぐん色いろめ死しなす。中軍ちゆうぐんも。國姓こくせい又また耶
 鉄騎てつぎ小蒐せうそ。遂すなはち隊たいを七しち烈れつ八はつ裁さいせし。堪たへて福列ふくれつ敗たふす。
 南軍なんぐん勝かつふ。乘まりて追討おひたし。首くびを得える事こと二ふた萬まん余よふ。及およびぬ。國姓こくせい又また耶や。
 勇ゆう之の凱歌がいがを唱となて。軍ぐんを班まりて思明しんめい小圃せうぼ。福列ふくれつを伐うた。軍議ぐんぎをなす。
 然しかる。北朝きたてうの康熙かうせい爺や。南軍なんぐんま。田うら地ちを侵かす。とて。使しむ。以もつて。群臣ぐんしんと集あつ
 て。廷議てんぎ有ある。先帝せんてい德澤とくさくを民たみ小施せ。四海さいかい已や。平定へいぢやう。一いつ。多おほく。國姓こくせい

父ちち耶や。猶なほ王化わうか小伏せうふくせ。田うら地ちを侵かす。とて。干戈かんかを以もつて是こゝを制せいせん。とせむ。兵弊へいへい民
 困こて。又また擾乱じやうらんの線せんを引出ひく。不た如ごとく。鄙へい芝龍せいちりゆうを宥なむ。鄙へい芝龍せいちりゆうを宥なむ。不た如ごとく。鄙へい芝龍せいちりゆうを宥なむ。
 憤怒ふんぬを宥なむ。福列ふくれつを宥なむ。官職くわんしやくを授たまけ。永ながく我われが清朝しやうてう小臣せうしんた。り。
 又また小命せうめいある。群臣ぐんしん王命わうめいが徳とくとて承伏せうふく。尚書しやうしよ吳靖治ごせいぢを勅使ちやくし
 と。鄙へい芝龍せいちりゆうを真まふ。乘まり。北きた京きやうを啓行けいぎやう。福列ふくれつへ赴おもむく。此時このとき國姓こくせい又また耶や。
 福列ふくれつの郡縣ぐんげんを侵かす。李馮りほうと才さいを争あは。交戦かうせん止とどむ。時ときた。り。忽たちち。北きた京きやう
 の勅使ちやくし吳靖治ごせいぢ。鄙へい芝龍せいちりゆうを送おくりて。南塞なんさい小到せうたう。王命わうめいが述のて。和わを講かうす。
 福列ふくれつ總督そうとくの金印きんいんを出だす。清せい小圃せうぼ。順じゆんせん。吏しが勸すすむ。國姓こくせい又また耶や。先まづ。安あん
 寧ねいが悦えつび。吳靖治ごせいぢ。小對せうたい。とて。曰いはふ。森しん不ふ敵たてなり。と。皇明わうめい帝てい。國姓こくせいを賜たまふ。鳩きう恩おん
 を荷おむ。命めい有ある。限かぎり。八はち國家こくがの恢復くわふくを練れんる。吏しが任まかす。と。清せい王わう老らう。
 又また。を贈返くわうへん。さ。思おもふ。重おもく。且かつ。軍ぐんが。似にて。飯いる。但たゞ。官位くわんゐを受うて。清せい朝てうの

忠義傳後編卷之五

三十四

臣たゞ人事ハ我決して是を不為とて金印を推返し酒宴を致さず呉
 靖治を嚮食應し金銀絹帛ヲ贈て勅使を遣らし其後軍城ヲ兵船ハ
 一乗東寧小回リたり是ハ依て岡地の乱頓小治リしを孟季年曰ハ
 依て思明を獲李馮ハ福列の府城飯陣と諸兵靖治北京(回リ)康
 熈爺小錫して國姓爺ガ封を受兵を收て飯陣せ昔於奏して孟
 帝大ニ感賞ありて曰明朝武臣君一ノ人ハ鄭氏又子の生涯其忠
 義の節を改と渠等汝や威武ハ屈せと富貴ハ湯されど
 縉紳一噫呼鄭森又子ハ真の大丈夫ハと屢是を賞美あり
 國姓爺天柱嶺得社書
 去程小國姓爺ハ父鄭芝龍を得て回リれを林氏を始諸部ノ將率
 死したる人ハ再び遇て悦び勇之是を賀すと知れども鄭芝龍ハ

て喜びと國姓爺小廻て曰明朝の命運盡て自皇爺跡を消諸臣或ハ死
 或ハ降りて清朝天下を二統とて魚猶你亦又子有て志汝屈せと微勢
 汝以く度々強清を犯と茲汝以て我清ハ虜となりて在ども心サハ
 患へと茲小清帝你ガ勇武を控更能と我を餌して你ガ銳氣と
 拵く你何ぞ其針を覚むと又子の親を先とて君臣の義を後小
 やと叱りこれ國姓爺恐て曰本林元來忠孝兩たが全た更能と更を知
 とし何も奈何せん皇爺迹を失しのみ其餘の自皇子ハ在む維ガ為小清と
 天下ハ争奪疾より首陽の餓死ハなして清小臣たがるの義と全
 せんハ思と魚眼前又を虜小せと争う是を他ハんる命死所詮命の
 有人限ハ清小敵として身ハ忠孝の為小抛んと欲せし小國とて清帝又
 を贈り和を乞は是敵の計略ハハハも且天我ガ孝心を憐むかハ再び又



くせふが
國姓爺
慕德
思明民
赴
臺灣

足利氏行状記卷之三

の尊顔を拜とる。吏を得せり。其息をかり。一旦和を納て軍成。収と。いも争う。國家の仇を忘る。表父を返せ。情小伏せ。体をかり。内々兵卒。成綱。糧草を足して。敵の不虞を襲ひ。願く。大爺怒を宥り。老を此島。小娘。ひ。と。曰。い。ハ。鄭芝龍。中心和だ。是より。風月を説びて。静。小。老を。親。ひ。多。小。其。翌。年。鄭。芝。龍。一。朝。病。小。く。して。少。卧。れ。か。國。姓。爺。父。子。大。小。孩。た。醫。官。小。委。ね。自。ら。衣。帶。を。解。ご。晝。夜。の。侍。病。手。成。盡。し。れ。ども。其。途。を。遂。小。九。泉。の。客。と。な。り。ね。國。姓。爺。を。も。ち。錦。舎。林。氏。其。余。の。將。卒。人。民。小。到。る。まで。悼。と。哀。む。吏。大。く。さ。あ。る。と。酹。成。功。の。禮。を。享。し。て。骸。を。葬。り。靈。を。一。社。の。神。小。祀。り。死。小。事。多。く。生。小。事。多。く。哀。成。幾。と。て。喪。小。篋。リ。多。小。魏。良。戴。健。由。少。續。て。老。病。小。死。れ。ハ。國。姓。爺。益。歎。成。重。ね。快。々。と。て。年。月。を。送。る。程。小。光。陰。の。押。替。り。ま。

流水の如く。三年の夜。畢。多。小。より。喪。服。を。脱。で。祭。服。小。新。小。父。の。靈。成。祭。り。金。銀。絹。布。を。士。民。小。絶。し。賤。し。諸。小。介。小。爵。同。を。慰。ん。と。陳。良。只。一。人。を。從。て。天。柱。嶺。小。登。り。往。々。風。景。を。眺。望。し。多。小。山。隘。小。當。て。白。氣。隱。々。と。三。所。あり。國。姓。爺。大。小。姪。と。陳。良。と。伴。小。其。一。所。小。登。り。多。小。一。座。の。石。廟。あり。幾。星。相。成。歴。久。緑。の。苔。む。と。蓋。之。羅。造。ま。し。羊。八。土。小。埋。ま。り。白。氣。正。し。此。廟。内。より。立。ま。れ。ハ。國。姓。爺。陳。良。を。顧。て。曰。你。此。石。廟。を。用。死。見。よ。陳。良。練。て。曰。王。の。命。あり。と。魚。此。石。廟。是。何。の。神。な。ら。ん。と。忘。り。小。用。を。是。鬼。神。を。侵。ま。り。古。今。古。廟。古。墳。を。用。に。て。禍。災。を。招。れ。例。女。く。と。須。此。終。小。捨。置。ま。し。魚。一。國。姓。爺。首。成。揮。て。曰。智。者。不。惑。勇。者。不。懼。と。り。多。小。此。廟。の。此。山。小。有。成。土。人。由。知。吏。な。れ。と。社。人。の。踏。分。る。路。も。あ。ら。ず。然。小。今。我。

陳良の命して匣に廟内納め扉を扉前の如く鎖し諸曰我ら
 伯温導師の遺書を得且仙丹を服して長生不老の道を得る
 此義を決して漏らさず勿き若半言ふても仙機を漏らさず即時小
 命は損まぬ陳良大に畏て曰王も不死の道を得ぬ清を伐り
 大義を奈何かすよと國姓爺が白師の遺書是を載せり明朝亡滅
 清は易て天下を保つ更素り天數の終る所を人か能く
 余期を待て針音あり唯何更を口外する更あれ
 深く緘り遂に柱嶺をとり府城を回り
 國姓爺尸解 清王治世

斯て國姓爺府城を回り柱嶺にて仙書を得る更八妻林氏
 錦舎の深く隠れ國政を悉く錦舎執行し其身閑室に
 人を避て昼夜心を煉る或日錦舎又小問へ更有て其室へ入て見
 姓爺拱手端座して在錦舎近くより安否を問ふ更答を大に
 訝りよく探り乃ち小死して程往くと覺て四肢氷より令と錦
 舎仰天して林氏を始り緒部將士を呼聚斯と告を各々手
 舞足の踏を忘る菟来り此体を乃ち声を放て哀哭を独陳良
 八天柱嶺の一条に知を必と身尸解の法を以て仙去りなると
 ありやといふも嚴く緘を受けれを絶て口外せざ林氏錦舎其故
 を知れず天の哀を地も悲しむ成緒將種々小練り耐心な
 棺小收り擯して嚴小喪の禮を行ひ多る其葬小及人棺乃狂
 死空棺の如くなれば諸人大に怪し陳良小室小告陳良されを
 思ひなぐ色小も表さざ何とさる理あらず暗小棺を開た見

人を避て昼夜心を煉る或日錦舎又小問へ更有て其室へ入て見
 姓爺拱手端座して在錦舎近くより安否を問ふ更答を大に
 訝りよく探り乃ち小死して程往くと覺て四肢氷より令と錦
 舎仰天して林氏を始り緒部將士を呼聚斯と告を各々手
 舞足の踏を忘る菟来り此体を乃ち声を放て哀哭を独陳良
 八天柱嶺の一条に知を必と身尸解の法を以て仙去りなると
 ありやといふも嚴く緘を受けれを絶て口外せざ林氏錦舎其故
 を知れず天の哀を地も悲しむ成緒將種々小練り耐心な
 棺小收り擯して嚴小喪の禮を行ひ多る其葬小及人棺乃狂
 死空棺の如くなれば諸人大に怪し陳良小室小告陳良されを
 思ひなぐ色小も表さざ何とさる理あらず暗小棺を開た見

う小只衣冠劍履と長八尺許の竹有の之中く更小戸なり是小依々
 愈其尸解たる或知なき尊骸在りと云て遂小酌芝龍墳の
 側小葬り日く一社の神と崇む是清朝の康熙九年庚戌の十月二日
 かり東寧の人民父母を喪し心地哀動して止ま去程小北京へ酌芝
 龍國姓父耶父子相續て死去せし由定えたる康熙帝初て意と安ん
 じむ其喪を弔ひ且飯頃を勸ん為禮物を齎して招撫使と東寧に
 到せし然ども錦舎父志を嗣ぐ封を辞し招撫使を重く嚮食し
 て飯猶も中國を恢復せんを謀まども康熙帝耶の仁徳四夷公認不溢
 て廉ぬ草木もあふれ狂忽小年成さぐり時成待りち小星霜いろ
 しく登る錦舎も東寧小死し其世嗣奏舎康熙二十年丙寅の月で終
 小清朝の封を受臺澎東寧王となりて美舎嗣子なくして爵氏

血脉絶果々を是罪もなり干時北京小康熙二十一年正月自爺朝廷
 小脚宴於用れ百官と俱小四海の昌平瓜税漢柏汉ホの體小方ひ
 て聯句なりし使ち震翰の序あり御製の句小曰
 麗日和風被萬方
 と唱也を大学士勒德洪御声小應じて曰
 卿雲爛漫滿紫園
 それより一百の官員句毎小韻を押百句成聯々々魏象樞是公梓小
 して世小壽と抑此康熙帝爺先帝小勝る英主や仁慈深く民を
 撫育し先王の礼樂を重んじて萬機の政至正なりと云萬民感伏し
 て皆太平瓜集まるとる八日出度るとる例なりなり

國姓爺忠義傳後編卷之五畢

